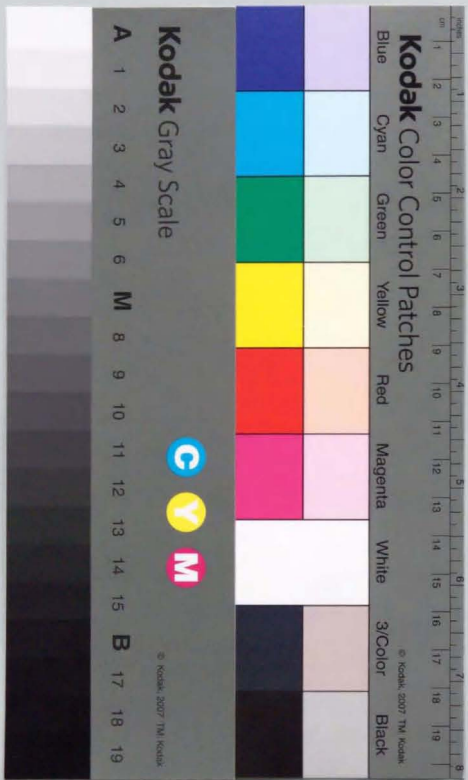


高齢者居住施設における
環境適応プロセスに関する研究

橋 弘志



高齢者居住施設における
環境適応プロセスに関する研究

橘 弘志

論文目次

第1章 背景と目的6

1. 社会的背景 7
 - 1) 高齢者施設のニーズの高まり
 - 2) 高齢者施設の個室化
 - 3) 高齢者施設の捉え方
2. 理論的背景 17
 - 1) 人間と環境との関わり方
 - 2) 社会的環境の中の人間
3. 研究の目的と位置づけ 26
 - 1) 研究の目的
 - 2) 研究の位置づけ
 - 3) 論文の構成

第2章 調査概要31

1. 調査概要 32
2. 調査方法 33
 - 1) 入居者の基本的属性と施設生活の流れ
 - 2) 入居者による居室の環境形成
 - 3) 共用空間の使われ方
3. 調査対象施設 35
 - 1) 概要
 - 2) 個室
 - 3) 空間構成
 - 4) 施設の生活の流れ
4. 調査対象者 39
 - 1) 人数
 - 2) 部屋替え
 - 3) 心身状況
 - 4) 前居住形態と出身地

第3章 環境への働きかけ45

1. 居室における個人的領域形成 46
2. 居室内の家具・物の量的特性 48
 - 1) 持ち込まれる家具
 - 2) program 物と personal 物
 - 3) 前居住形態の影響
 - 4) ADL・痴呆程度の影響
 - 5) 「施設」入居の意識と物の持ち込み
3. 居室内の家具・物に見る領域形成 56
 - 1) 家具・物の意味の4側面
 - 2) 持ち込まれる家具・物の意味
 - 3) 各側面からの環境形成過程
 - 4) 物を媒介とした個人的領域形成

4. 居室の領域形成過程の事例	72
1) 環境形成のバリエーション	
2) 環境形成タイプの時間的变化	
3) 具体的事例	
5. まとめ	93
1) 相互作用としての環境形成	
2) 居室の役割	
3) 個人的領域の形成	
4) 施設全体の広がりへ	
第4章 場の形成	95
1. 施設空間の個人的領域形成	96
2. 施設空間のゾーニング	98
1) 施設空間とゾーン	
2) 領域と滞在時間割合	
3. 場所における入居者の行動	103
1) private	
2) semi-private	
3) semi-public	
4) public	
4. 施設に展開する場	113
1) 場の概念	
2) 場の類型化	
3) 空間と場との対応	
4) 領域の意味の混在性	
5. 個人の形成する場	120
1) 各個人に対する視点	
2) 領域滞在時間による類型化	
3) 具体的事例	
4) 個人的領域展開の空間的特長	
5) 施設空間の環境形成から見た入居者の類型	
6. まとめ	131
1) 共用空間の重要性	
2) 施設空間の多様な意味付け	
3) 入居者の生活の多様性	
4) 多様性を許容する空間	
第5章 評価	133
1. 入居者の評価の構造	134
1) 施設環境	
2) 個人的状況	
3) 入居以降の環境移行	

- 2. 施設環境 137
 - 1) 制度的環境：福祉施設であること
 - 2) 社会的環境：共同生活の場であること
 - 3) 物理的環境：個室型居住空間であること
- 3. 個人的状況 150
 - 1) 家族との関係
 - 2) 自宅に対する意識
- 4. 入居以降の環境移行 157
 - 1) 心身状況の変化
 - 2) 部屋替え
- 5. 全体的な評価 160
 - 1) 人と環境との相互交渉の型
 - 2) 適応と評価の過程
 - 3) 評価の個人差

第6章 適応過程.....165

- (事例1) No.47 AK 168
- (事例2) No.46 FI 179
- (事例3) No.49 TM 190
- まとめ 201

第7章 まとめ.....202

- 1. 適応過程を支える要素 203
 - 1) 施設への適応
 - 2) 家という意識
 - 3) 物の役割
 - 4) 個室の役割
 - 5) 場の展開
 - 6) 共用空間
 - 7) 施設のパログラム
 - 8) 時間軸上の動き
 - 9) アイデンティティの確立
- 2. 生活の場としての施設空間 212
 - 1) 個室化に対する批判に対して
 - 2) 入居者の多様性を支える空間計画
- 3. 環境に対する期待 216
 - 1) 期待の概念
 - 2) 期待と適応モデル
 - 3) 期待とアイデンティティ
- 4. 人と環境との媒介 220
 - 1) 媒介の役割
 - 2) 媒介を通じた人間-環境システム
 - 3) 媒介としてのコミュニティ

参考文献	225
研究業績	228
あとがき	230
資料	232
(資料1) 各調査時における入居者の心身状況	
(資料2) 各調査時における入居者の部屋の配置	
(資料3) 入居者個別データ	

第1章 目的と背景

第1章 目的と背景

1. 社会的背景
2. 理論的背景
3. 研究の目的と位置づけ

第1章 背景と目的

1. 社会的背景

1) 高齢者施設のニーズの高まり

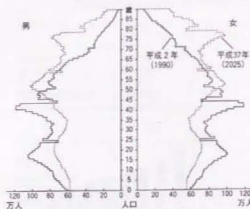
・高齢社会への突入

日本における高齢者の数は、今後ますます増加していく。それは「社会の高齢化」というひとつの対処すべき問題のジャンルを形作っている。高齢者層の増大、すなわち65歳以上の「高齢者」と呼ばれる人たちの集団がますます大きなものとなることは、そこに属する人たちの多様性がますます広がり、「高齢者」と一括りに論じてしまうことが難しくなっていくことを意味する。「高齢化」あるいは「高齢者」の問題の捉え方として、それに伴う諸問題に細分化して細かいレベルで捉えていくか、あるいは高齢者だけの問題を越えた社会全体の問題としてメタレベルで捉えるか、どちらかのアプローチが必要とされるようになる。

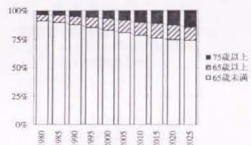
よく言われることであるが、日本の高齢化の特長は、65歳以上の人口が総人口に占める高齢化率の増加するスピードの速さと、その中でもとくに75歳以上の後期高齢者と呼ばれる層の増加にある。そのような後期高齢者層の増加は、身体的・精神的なレベルが低下したときにどのようにケアするか、という問題をより深刻にしていく。これに関わる問題として、高齢者層の増加に伴う高齢者のみの世帯（夫婦のみ・一人暮らし）の増加ということがある。高齢者のみの世帯は、将来ケアの問題が浮上した場合に世帯内で対処することが難しく、今後ともずっと在宅で住み続けられることの困難にもっとも直面しやすい層である。住み慣れた地域での在宅介護を望む人が多い現在、住宅レベル・地域レベルでのサポートが重要な課題となることは間違いないが、どうしても在宅では対応できない場合なども現実には多く、高齢者のための居住施設に対するニーズも多岐なしに高まっていく。

・高齢者施設の整備

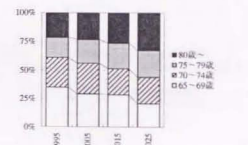
高齢者居住施設の現状をみると、1993年の時点での経費老人ホーム・養護老人ホーム・特別養護老人ホームを合わせた定員数は、28万人あまりとなっている（特別養護老人ホームの



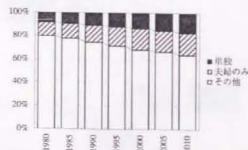
(図1-1) 日本の人口ピラミッドの推移
(「国民の福祉の動向」より転載)



(図1-2) 日本の人口に占める高齢者の割合の推移



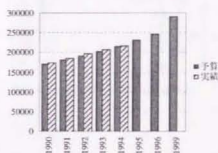
(図1-3) 65歳以上高齢者の年齢別割合の推移



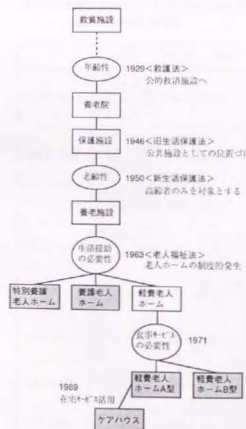
(図1-4) 全世界中、65歳以上高齢者の単身世帯と夫婦のみ世帯の占める割合の推移

(表1-1) 高齢者保健福祉推進十年戦略(ゴールドプラン)とその見直し(新ゴールドプラン)における施設の数整備目標

事業	ゴ ¹ 43'プラン	新ゴ ¹ 43'プラン
特別養護老人ホーム	24万人	29万人
老人保健施設	28万床	28万床
ケアハウス	10万人	10万人
高齢者生活福祉センター	400カ所	400カ所



(図1-5) 特別養護老人ホームにおけるゴールドプランのこれまでの実績(1999年は目標)



(図1-6) 高齢者居住施設の機能分化の流れ(大原1989による)

みでは19万人強)。これは、65歳以上人口1600万人に対して1.67%という数字である。決してニーズが少ないわけではない。多くの自治体ではかなりの数の入居待ちを抱えており、申請してから入居まで数年かかることも珍しくない。高齢者の居住形態におけるひとつの選択肢というには、まだまだ施設の絶対数が足りないのが現状である。

こうした現状に対し、厚生省はゴールドプラン及び新ゴールドプランにより施設の拡充を図っている。1989年に策定されたゴールドプラン(高齢者保健福祉推進十年戦略)が1994年に見直し新ゴールドプランとなったが、これによると1999年までに特別養護老人ホームを29万人分整備することになっている。これは現在の1.5倍近い数字であるが、これまでのところ着実に実績を伸ばして目標をクリアしつつある。この急速な施設整備に伴い、当然のことながら、在宅や病院などから施設へ移行する高齢者がそれだけ増加する。在宅から施設へという環境の変化は入居者本人にとって、住んでいる環境も、周りの人との関係も、今まで果たしてきた役割も、すべてが変化してしまう重大な転換点となる。この環境変化に伴う衝撃に以下に対応するか(Pastalan 1983)、ということを含めた施設整備が課題として浮かび上がってくる。とくに環境の影響を受けやすいとされる後期高齢者(Lawton, 1981)の増加を考慮すると、この問題の重要性はさらに高まる。

・高齢者施設の体系

一般的に居住施設とは老人ホームのことを指すが、自宅に替わって高齢者の長期滞在しうる選択肢としてより広く捉えた場合、およそ以下のようなものが含まれる。

1. 高齢者住宅 シルバーハウジング・シルバーピア・シニア住宅等
2. 福祉施設 特別養護老人ホーム・養護老人ホーム・軽費老人ホーム(A型・B型・ケアハウス)(有料老人ホーム)
3. 中間施設 老人保健施設
4. 医療施設 老人病院・療養型病床群等

1.は建設者や自治体によって定められているもので、施設ではなく住宅に位置づけられ、自立度の高い高齢者を対象に生活面での援助が提供されるものである。4.は医療行為のための施設であり、本来治療が終了れば退院することになるが、高

高齢者の慢性疾患による長期療養によって、実質的にはそこに「居住」していることも多い。3は、医療施設と福祉施設との橋渡しをすべく、新たな施設体系として両者の中間に位置づけられたものだが、その内容には特別養護老人ホームと競合する部分が多い。在宅で住み続けることの限界に直面し施設への移動を決意した高齢者や（そして大抵の場合）その家族は、このような細分化した施設の中から選択を迫られることになる。

このうち福祉施設だけを見ても、特別養護老人ホーム・介護老人ホーム・軽費老人ホーム（A型・B型・ケアハウス）、そして民間による有料老人ホームに分類されており、本人の介護やサービスの必要性に応じて入所規準が定められている。大原（1989）は、この施設の細分化の歴史的经验を踏まえた上で、機能を細分化しそこに空間（施設）を割り当てていく対症療法的な「一対一対応主義」と呼び、人や時間の変化に伴う要求の変化に対して柔軟に対応できない硬直性を生み出すものとして批判している。また、介護老人ホーム・特別養護老人ホームへの入居は、行政による「措置」という形で行われている。小室

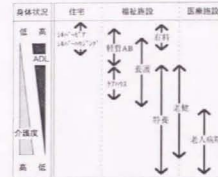


図1-7 施設体系と入所者の身体状況

表1-2 高齢者居住施設と老人保健施設および長期療養型施設の概要

	対象者	利用形態	定員	面積	定員1人あたり	床面積	施設数 定員数
特別養護老人ホーム	65歳以上で、身体上または精神上著しい障害を有し、日常生活を営むことが困難な者	公的措置	58人以上	34,131㎡	4人以下	4,951㎡	2,242ヶ所 206,611人*1
介護老人ホーム	65歳以上で、身体上または精神上、または両方の面で介護を必要とする状態にある者	公的措置	58人以上	26,346㎡	2.62人	3,362㎡	947ヶ所 67,505人*1
軽費老人ホームA型	65歳以上で、家族介護が困難な状態にある者	契約	58人以上	30,362㎡	1人	6,662㎡	253ヶ所 15,261人*1
軽費老人ホームB型	65歳以上で、家族介護が困難な状態にある者	契約	50人以上（施設20ヶ所以下）	30,362㎡	1人	16,546㎡（標準）	38ヶ所 1,808人*1
ケアハウス	65歳以上で、日常生活が可能な状態にある者	契約	10人以上、施設22の施設は15人以上	39,662㎡	1人	14,856㎡	145ヶ所 6,547人*1
有料老人ホーム	老人ホームの必要要件を満たすこととなる者	契約	10人以上				275ヶ所 27,750人*2
老人保健施設	短期滞在型にあり、入居する必要がある者	契約	50人以上		4人以下	8,062㎡	1,403ヶ所 122,548人*3
療養型病院	入院した老人をケアする施設	契約			4人以下	6,462㎡	17ヶ所 1,218人*4
老人病院	施設の利用者または家族の介護を必要とする者	契約				4,362㎡	1,493ヶ所 177,668人*4

(1987)は「措置」の問題について、縦割り行政の反映であり、制度間の柔軟な運用が阻まれるとともに、類似施設の併存・乱立の状態を招くとして批判している。施設は施設体系ごとに縦割りにされているとともに、介護度によって輪切りに分類されており、それらの一貫性のない規準によって施設の役割が明確にされていない状態と言える。細分化された施設体系が、さらに踏襲したものになっていることがわかる。

老人ホームを「収容の場」から「生活の場」へと転換させようと言われてから久しい。しかし、この施設体系の細分化の過程は提供するサービスの規準の細分化であって、そこには高齢者を類型化して「収容」しようという意図は見えても、実際に一人一人の入居者の生活が営まれる「住処」としてどう整えていくか、という視点は見あたらない。

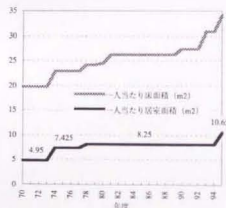
2) 高齢者施設の個室化

・個室化への潮流

高齢者居住施設は全体的に個室化の方向に動いていると言える。軽費老人ホームはすでに個室が原則である。養護老人ホームにおいても雑居部屋から2人部屋へ、そして現在は個室化へと整備が進められている。最も身体レベルの低下した高齢者を対象とした特別養護老人ホームのみが、2人部屋もしくは4人部屋が主流となっている。1992年時点での全国の特別養護老人ホームの全室数の7割以上は4人以上の部屋である。個室の割合は年々次第に高くなってきてはいるが、それでも1割に満たない。これらの個室は入居者のプライバシーを守るためということよりも、重度の入居者の監視部屋であったり、他の入居者からの隔離部屋として位置づけられていることも多い。

そんな中、1995年厚生省により特別養護老人ホームの施設整備費補助基準面積が引き上げられ、一人当たりの居室面積が8.25㎡から10.65㎡となった。この基準面積の引き上げは「他人の視線を意識せずにプライバシーの保てる空間の確保」[入居者が家庭で慣れ親しんだ家具等の持ち込みが可能な空間の確保]「小型リフト等の福祉機器の使用が可能な空間の確保」を意図したものとされている。これに伴い、特別養護老人ホームにおいても今後個室化が急速に進められていくと思われる。

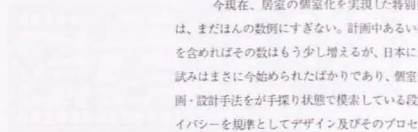
この個室化の背景にあるのが、入居者の、そして将来入居するであろう人たちのプライバシー意識の高まりであると

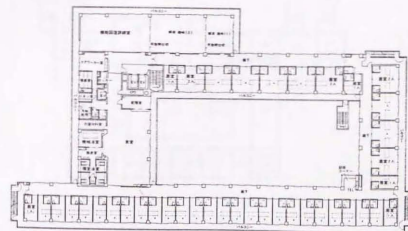
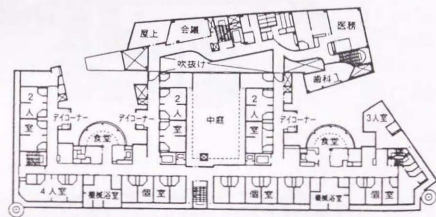
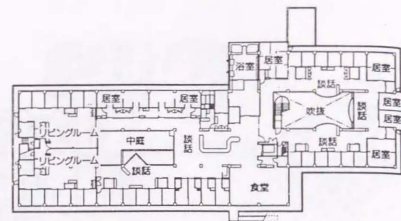


(図1-8) 厚生省による特別養護老人ホームの施設整備費補助基準面積の推移

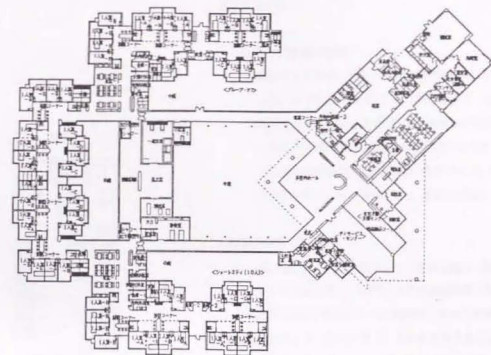
われている。東京都福祉協議会が1991年に行った都民に対する調査によると、老人ホームの個室化の希望が8割を占めている。こうした結果を受けて、施設計画の中によりやく入居者のプライバシーという考え方が含まれるようになってきたと言える。

今現在、居室の個室化を実現した特別養護老人ホームは、まだほんの数例にすぎない。計画中あるいは施工中のものを含めればその数はもう少し増えるが、日本における個室化の試みはまさに今始められたばかりであり、個室化に対応した計画・設計手法が手探り状態で模索している段階にある。プライバシーを規準としてデザイン及びそのプロセス全体の意志決定の枠組みを規定する (Hoglund, 1985) ような施設計画手法の確立が早急に求められており、それらの事例の中から見出していく必要がある。





(図1-9-1) 個室化された特別養護老人ホームの例



(図 1-9-2) 個室化された特別養護老人ホームの例

・個室化に対する批判

特別養護老人ホームの個室化は順調に進んでいるわけではなく、さまざまな面から批判されたり、現実には難しい問題に直面している。

1. 一人当たり面積の増加

個室化した場合、当然一人当たりの面積は4人部屋などに比べれば大きくなる。とくに都市部などで床面積から規定されているような場合、それは施設の定員が少なくなることを意味する。施設の絶対数がまだまだ少なく、入居待ちの高齢者が非常に多い現状では、まず受け入れ枠を拡大することが優先され、個室化は進みにくい。

2. 個室は賢況

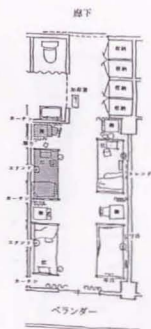
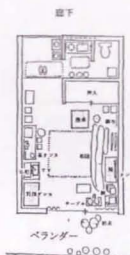
1.と同様であるが、もう身体も弱って税金でもらっているだけの存在の要介護高齢者に個室などは賢況である、税金はもっと効率的に使って福祉を行き渡らせることに使すべきだ、という意見もある。感情面の議論はともかくとして、質の充実よりも量を、といった議論が未だに強い説得力を持つ社会的背景がある。

3. ケアする側の負担増

個室となって部屋ごとに独立していると、4人部屋などに比べケアの手間もかなり勤続も長くなるなど、職員側の負担が増大するという懸念がある。これは職員数の不足ということ自体が大きな問題として捉えられなければならない。また、本当に職員の負担が増大しているのかについては、それを対象にした調査を行った上で結論づけるべきであろう。

4. 監視の目が行き届かない

それぞれの入居者が個室に閉じこもってしまうと、全員に目が行き届かなくなるという懸念もある。4人部屋などの場合には、職員側の目だけでなく、入居者同士の相互監視も働く、高齢者住宅などにおける孤独の死などが報道されるたびに、入居者に対する監視の重要性が議論される。特養への入居者の中には、職員側の目が届くことにより、見守られているという安心感にもつな



(図1-10) 個室と4床室のしつらえの違い
上：個室、下：4床室

がっている場合もあり、複雑な問題をはらんでいる。

5. 入居者間のコミュニケーションの減退

個室になって一人一人が部屋にこもってしまうと、入居者同士で出会う場がなく、コミュニケーションが衰退してしまうという意見がある。これはある意味で高個室を、寂しがり屋で常に誰かと話しそたがっている、というステレオタイプで捉えていることである。部屋が同じであれば仲良くなるという保証はどこにもなく、また4人部屋に比べて個室の方が交流も少なく寂しい思いをしているということも言えない。

6. 入居者の意識

4人部屋が基本の特別養護老人ホームで話を聞くと、個室には入りたくないという答えが返ってくることもある。個室では何となく寂しそうだという気持ち以外に、施設における個室の位置づけが他の入居者からの隔離の場であったり、重度の入居者に対する常時監視の場であったりすると、入居者も個室を「あそこに入ったらもう終わり」といった意識で見ることになる。

これらの批判や問題に対し、それをどのように乗り越えていくか、あるいは乗り越えるだけの価値があるのか、それを見出すことは本論のひとつの目的でもある。その鍵となるのは、実は以前から言われているような、特別養護老人ホームなどの居住施設を「収容の場」あるいは「介護の場」ではなく、入居者の「生活の場」として捉え直すことである。



(図1-11) 個室と4床室の行動領域の違い
上: 個室、下: 4床室

3) 高齢者施設の見え方

Sven Thiberg (1990)によると、スウェーデンにおける福祉政策は、施設・在宅を含め、すべて国民を対象にした住宅政策を基盤として行われている。つまり、国民一人ひとりに日々の生活を支える良質な住宅(住処)をどのように提供していくか、ということの一貫として居住施設あるいは在宅福祉が位置づけられているのである。高齢者・障害者などを保護すべき特殊な人たちとして扱うのではなく、普通の人とまったく同様な生活を保障しようという思想である。これは、居住施設への入居者をふつうの人とは異なる「介護されるべき存在」という枠に押し込め、その枠をさらに細分化して特殊化し、それに合わせた機能を提供していこうという考え方の対極に位置するものだろう。

「介護される」立場に置かれた入居者は、自らを「介護される」存在と見なすようになり、ますます施設に依存する存在となっていく。ここには二点の大きな問題が含まれる。一点は入居者自身の問題として、本人の主体性が奪われ、自らの存在意義を失ってしまうという問題である。もう一点は施設から施策全体に及ぶ問題として、今度高齢者層がますます増加しますます多様化していったときに、依存度の高い入居者の多様化したニーズには逐一対応できなくなっていくという問題である。

幅広い人たちの幅広い生活スタイルを受け入れていくような、柔軟で広がりのある計画論が求められることになる。これに対し、本論では、居住施設を「介護する・される場」として捉えるのではなく、入居者が普通の人として主体的な生活を送ることをサポートする場として捉え直すことから始める。普通の人として捉えると言うことは、つまり、入居者もわれわれ同様、これまでの人生の様々な経験に支えられた価値観・考え方・生活スタイルを持ち、それを維持しながら生活するとともに、未来に向かって何かの目標を持って生活している存在として捉えることである。

2. 理論的背景

1) 人間と環境との関わり方

本論のもっとも大きなテーマとなるのは、ある新しい環境において、人と環境とがどのように関係性を作り上げていくのか、ということである。

・環境の捉え方

環境を最も普遍的な意味で捉えると、われわれを取り囲み、包み込んでいるもの (Ittleson, 1970) ということになる。ここで取り上げるのは、自然環境や地球環境といった、われわれの日常生活にとってある意味で抽象的なレベルの環境ではない。(われわれの日常生活を考えた場合、自然の中に一人であることはほとんどありえない。) そうではなく、われわれにとってとくに關心のあるのは日常の生態系レベルつまり人間の日常行動のレベルでの人間を取り囲んでいるものである (Lang, 1987)。それはつまり、人によって造られ、使われている建物や町、そこに住んでいる人々や自分の關心のある人々、自分の属する集団や地域などのことである。

この環境の中には、非常に多様な情報が含まれている。そこには直接われわれの生活と関係するものもあれば、間接的にしか関係しないものもあり、あるいはまったく関係ないものも含まれている。Ittlesonの言うように、環境はきわめて冗長であり、環境を知覚しているそれぞれの人 (すなわちその環境で生活しているわれわれ一人ひとり) にとっての意味を抜きにしては、その環境を捉えることはできない。つまり、環境は、人が意味づけることによってはじめてその人にとっての意味を持ち、その意味を持った環境こそがその人の生活や行動に影響を与えるのである。

Koffka (1935) は、このような各人が能々の仕方でも認知し、解釈し、意味を与えている環境を「行動環境」と呼び、誰にとっても等しく個人をとりまわっている「地理的環境」と区別している。

(表 1-3) さまざまな環境の捉え方

環境のカテゴリー

環境	構成要素
物理的環境	地球的・地理的セッティング
社会的環境	個人・グループの間に存在する組織
心理的環境	人々の間の存在するイメージ
行動的環境	人が応答する対象としてのもの

Koffka による分類

地理的環境	我々に個人をとりまわっている客体的環境
行動的環境	行動の基盤となる客体的環境の認知的「場」

Powell Lawton による分期

Social Environment	規範・価値観・制度など社会的環境
Inter-Personal Environment	個人と他人の一对一の関係からなる心理的環境
Super-Personal Environment	性・年齢・年齢を超個人的環境
Physical Environment	建物など物理的環境

・生態学的視点

Kurt Lewin(1943)はこのような人と空間との分らない関係に注目し、次の式によって図式的に捉えようとした。

$$B=f(P,E)$$

この式は、人間の行動(B)が、人間の自由意志だけでなく、また環境条件だけによって決まってくるものでもない、人間(P)と環境(E)との両者の関数、つまりその相互作用によってその環境における行動が決まってくることを示している。

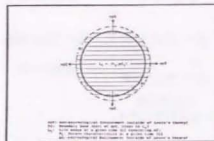
Lewinの式における環境(E)は、単に人のまわりを広げている物理的な環境を示しているわけではなく、個人の知覚した環境、つまり人間が環境とかわかっていく中で頭の中作り上げたイメージとしての心理的環境を示している。この心理的環境(E)と個人的な資質(P)とが融合した心理的な総体を「生活空間(lifespaces)」と呼び、これが人の行動を規定するものとした。

それまでは、人間の行動が、刺激(S)に対する反応(R)によって表すことができるというS-R理論が主流であり、人の行動を物理的環境によって誘導していると言う環境決定論はその延長として位置づけられる。Lewinの捉え方は生態学的視点を取り入れたものであり、それらの理論とは明らかに一線を画している。それは、刺激を人間に対する刺激として見るのではなく、その中に人間を包み込んでのものとして捉え、環境の中で活動している人間そのものを対象とする視点である。

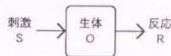
・トランザクション理論

Lewinはあくまで、ある時間における心理的環境と人との完結した相互関係が行動を規定すると捉えている。しかし実際には人と環境とは時間とともにお互いに影響を与え合いながら変化していく。とくに高齢者の問題を考えた場合には、この時間的変化は非常に大きな意味を持つ。実際にLewinの式のEとPをお互いに影響し合い変化を与え合う、より広義な概念として捉え直すと、人と環境とのより複雑な入り交じった関係が表れてくる。

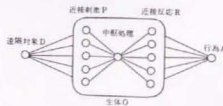
心理的環境(E)は人によって知覚された環境であり、人の資質(P)が変化したときには影響を受ける。また環境と人間との総体としての「生活空間」自体も、ひとつの環境として人



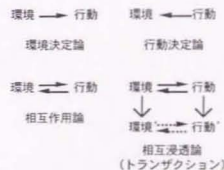
(図1-12) Kurt Lewinの生活空間の考え方
(Tajama「Identity and milieu」
1988より転載)



(図1-13) 刺激-反応理論
環境からの特定の刺激Sに対して、
生体Oには、一対一対応した反応R
が発生する



(図1-14) Brunswik(1952)の生態学的反応モデル
人は、環境刺激にそのまま反応する
わけではなく、自分の行為を達成する
ために最適な刺激を環境の中から取り
出し、有効な反応をする。
(佐伯「認知科学の方法」1986より転
載)



(図1-15) 環境決定論・行動決定論・相互作用論
および相互浸透論(トランザクション)における環境と行動の関係の違い
(高橋, 1989)

に知覚され構造化される。その結果、人の行動(B)もPとEの複雑な影響を受け変化していく。一方、人の行動(B)はそれ自体、人の資質(P)に変化を加えるものであり、再びも自らの行動の影響を受けて変化していく。人間の行動を規定するPとEの双方に入れ子関係が出来上がり、ある行動が起こる状態を考えたときに、人と環境とを切り離して考えることがもはやできないことになる。

人と環境とは、どちらか一方がもう片方を規定するのではなく、相互に影響を与え合うことによって互いに変容しつつ、互いに規定し合うものである(Ittena, 1987)。トランザクション理論は、このような個別の環境と高齢者個人個人との相互の影響を捉えようとするものである。そこでは個人の経験や時間的な過程が重要な役割をしており、人間と環境とが分離できない一体として過去から未来に互って変容していく状態として把握することを特性とする(高橋, 1992)。

トランザクション理論の方法論的特長についてIttenaら(1974)は次の2点をあげている。

1. 人間と環境との関連性は日常生活の関連の中で、自然のままのセッティングで研究されなくてはならない
2. その人間と環境との関係のパターン付けを、その人物の行動、経験、及び諸活動と関係させてゆかなくてはならない

ここで大事なことは、人間が行動して環境と関わっている状態を分析の対象とし、その行動の起こった状況自体を重要な意味を持つものとして、つねに行動と状況とをセットにして捉えなければならないということである。つまり分析の最も適切な単位は、活動の生じている場面の中で行為している人間全体(Lave, 1995) すなわち「環境の中の人」(Wapner, 1991)ということになる。このアプローチは、行動する人間と、変容する環境とのダイナミックな関係を捉えようとする意味で、環境行動論とも呼ばれる。

・移行理論

人と環境との関係は、時間の流れの上で、人の側に何らかの変化が起こったり、あるいは環境の側に変化が起こること、次第にもしくは急激に変化する。山本とワプナー (1991) は、人生の出来事や移動によって環境が変わることを環境移行 (environmental transition) と定義している。

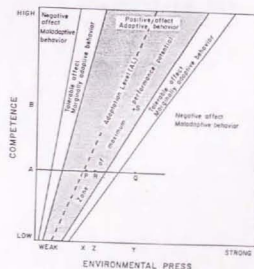
人と環境とのトランザクションは、その関係が安定している場合はほとんど意識されることもないため直接捉えることは難しい (Lawton, 1973)。何らかの原因によってその関係が大きく変化して、はじめて明確に意識されることになる。移行理論は、その動態としての人間-環境トランザクションに注目する。

人と環境との分ちがたい関係は、通常の状態では安定した「人間-環境システム」として機能している。しかし人もしくは環境が大きく変化すると、これまで安定していた人間-環境システムが崩壊し、人が強いインパクトを受ける。このような危機的移行 (critical transition) に対し、新たな人間-環境システムをどのように再構築していくかが、適応のための課題となる。それは旧環境を切り離し新環境へ完全に移行していくのではなく、両者に折り合いを付け統合していくことである (南, 1995)。

高齢者の転居は、もともと危機的移行を引き起こしやすい出来事であり、そのインパクトについては数多くの研究がなされている。その多くは転居による悪影響 (relocational effect) に焦点を当て、それに影響を与える要因を探ろうという視点が主流である。転居の自主性 (Lawton & Yaffe, 1970)、環境の変化 (Shulz & Brenner, 1977)、健康状態 (Borup, Gallego & Helfman, 1980)、転居に対する事前準備 (Pastalan, 1983)、など様々な要因が、転居者の死亡率や心理尺度に影響を与えるものとして見出されている。Toyama (1988)、大原 (1989) は、これらの研究の視点に欠けていた、転居という環境変化が個人の物理的・社会的環境との間わり方にどのように影響を与えているか、そして新しい環境にどのように適応していくのか、ということに注目し具体的に捉えている。

環境の変化と高齢者の適応について、Powell Lawton は次のような生態学的モデルで捉えている (Lawton, 1973)。

縦軸は個人のコンピテンスを示す。これは、人が世界に対処するときの能力を示すもので、認知能力、精神的健康、身



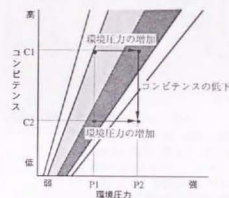
(図 1-16) 高齢者のコンピテンスと環境圧力の適応モデル (Lawton & Nahemow, 1973)

体的健康、知的キャパシティやエゴの強さなど、広範な属性をカバーする。

横軸は環境圧力と呼ばれる。これは、人が環境に対処する際に必要とする力であり、ストレスを高めたり問題が起きたり環境から要求されたりする水準を示す。

この図は、人と環境との適応関係が、人の側のコンピテンスのレベルと、環境の側の圧力のレベルの、両方によって定まることを意味する。人はある環境圧力の範囲では、適応した行動をとることができるが、圧力がある程度以上になると適応できず、また圧力が低すぎても人は依存的になりやはり適応できない。

この理論によって、環境移行によって受けるインパクトは人によってそれぞれ異なり、また環境圧力の適応レベルも異なってくるのが説明される。加齢などによる人のコンピテンスの低下によっても、また環境が変化することによる環境圧力の変化によっても、適応のバランスは崩れる。とくにコンピテンスの低い場合ほど、同じような環境圧力の変化であっても、環境の与えるインパクトは大きくなる。高齢者居住施設への移行によって、ただでさえコンピテンスの低下しつつある（つまり環境の変化による影響がより大きくなる）高齢者が、大きな環境圧力の変化を体験することになるのである。



(図 1-17) 環境圧力の上昇とコンピテンスの低下
環境圧力の増加によっても、コンピテンスの低下によっても適応のバランスは崩れる。また、コンピテンスの高い人 (C1) と低い人 (C2) では、環境圧力の増加に対する影響が異なる。

ここに、現在の高齢者施設を計画する際のかなり重要な問題が含まれていると言えるだろう。Lawton のモデルは、たとえコンピテンスの低い人であっても、適切な環境圧力であれば環境との適応レベルを保つことができることも同時に意味している。

2) 社会的環境の中の人間

これまでに見たように、人と環境とは密接に関係している。その中でもとくに社会的環境との関わりは重要な問題である。個人の行動は、社会的状況の規範に従ってさまざまに修正されており (Goffman)、まさに進行中であるという性質において本質的に社会的なものである (Lave, 1995)。

・プライバシーとテリトリー

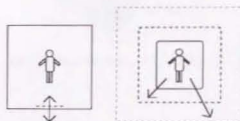
プライバシーは、きわめて社会的な概念であるとともに、物理的な環境と密接に関わるものである。これまでプライバシーは「私事が内密であること。私人の秘密」(広辞苑)というように、社会的な関係からの離脱・防壁の要求もしくは権利として捉えられてきた。現在はより社会的・選択的な概念として捉えられている。

Prohansky (1976) が「自分のことについて何を他人に伝えるか、またある状況の下で誰にそれを伝えるかを選ぶ個人の自由」と、Rapport (1977) が「相互作用をコントロールし、それを選択して希望する交流を得ることのできる能力」と定義しているように、他者との視覚的・聴覚的・嗅覚的相互作用(あるいは情報)を自らコントロールできることが強調されている。

Westin (1967) はプライバシーを、孤立 (solitude)・親密 (intimacy)・匿名 (anonymity)・確保 (reserve) の4種類に分類し、さらにプライバシーの効果についても、自立性の獲得・感情の解放・自己評価・コミュニケーションの保護と制限、の4つをあげている。児玉ら (1994) は、プライバシーの欲求及び達成度を把握するため、「引きこもり」「孤独」「分離」「匿名性」「個人づきあい」「親密」の6因子から分析している。

・テリトリー

物理的環境においてプライバシーを達成する手段のひとつが、テリトリー行動と呼ばれるものである。テリトリー行動は場所の専有化と、自他の境界を調整するメカニズム (Altman 1975) であり、空間を支配もしくはコントロールする概念である。Et-Sharkawy (1979) はテリトリーの機能として、次の4つの要求が満たされることをあげている。1. アイデンティティ(自分が何者であるか、社会の中でどのような役割を持つか)、2. 刺激(自己充足・自己実現)、3. 安全(外部の非難や攻撃からの防壁)、4. 参照系(他者や周辺環境との関係の保持)。



(図 1-1) プライバシーとテリトリー
 プライバシー(左)は、自分と自分以外の他者との関係をコントロールする概念であるのに対し、テリトリー(右)とは、空間的な広がりとして、段階的に秩序付けられた領域を示す。

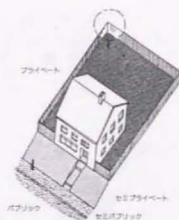


図1-19 Oscar Newman (1972)によるテリトリー

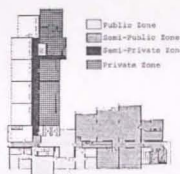


図1-20 Sandra Howell (1982)によるテリトリー

このような空間のコントロールによって、プライバシー獲得だけでなく、社会的関係の形成や自己アイデンティティの確認と関わっていくという視点は、本論でかなり重要な概念として展開されていくことになる。

テリトリーは、個人あるいは集団によって空間を段階的に意味づける。Oscar Newman (1972) は住戸近隣空間を住戸内部から公共のスペースまで、プライベートスペース、セミプライベートスペース、セミパブリックスペース、パブリックスペースの4段階に区別した。これは居住者側のコントロールの及ぶ影響力による段階分けであり、住戸の防壁面・安全面からテリトリーの重要性を述べたものである。Sandra Howell (1982) は高齢者居住施設の内部空間にこの段階分けを適用し、高齢者が集まって住む場合の自立とコミュニケーションのために空間のヒエラルキーの重要性を指摘した。

・コミュニティ

コミュニティは、もともと社会学の領域で使われており、「地域性」と「共同性」によって成り立っている地域的な共同体のことを指していた (Hillery 1955)。現在の社会学では、地縁ではありながらも、伝統的な地域共同体に替わり、個人同士のより緩いネットワークにより (森岡、1993) 多様な人が共存できる新しい共同生活の規範・様式として (奥田、1993) コミュニティを捉えている。

コミュニティを空間的広がりとして捉えようとする、テリトリーと密接に関係してくる。Newmanの守りやすい空間は、コミュニティによる共同防衛を目的としていると言える。これを現実の計画されていない町中で行動論的に見出したのが鈴木ら (1984) の共有領域論である。近隣の居住者のテリトリーが公共空間で共有され、安心感のある空間が形成されており、拘束的でないコミュニティのひとつの表現となっている。

これに対し Goffman (1963) は、公共空間における社会的場面(集まり)を、人と人とのコミュニケーションの結節点として捉え、人はそこに参加することで直接的・間接的な人との出会いが起こる。そこでのコミュニケーションは、その場面の社会的状況によって定まる厳格な規範の規制を受けている。つまり広い意味でそこでは人々の共同生活が一時的に行われているのであり、テリトリーでは表せないコミュニティの表現として捉えることができる。Goffmanのアプローチは、人々の状

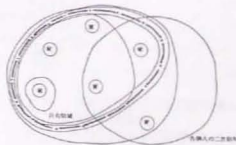
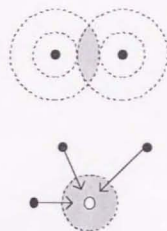


図1-21 共有領域 (鈴木ら、1986)

況適合性を問題にする点で、生態学的視点と共通している。
 実際に人の生活している地域では、自宅を中心に広がるテリトリーの共有と、共用空間に繰り広げられる集まりなどが不均一に分布しており、全体としていわば斑模様のコミュニティが形成されている。生活歴も身体的状況も全く異なる入居者が集まって住んでいる高齢者施設も、全体的・拘束的なワン・コミュニティではなく、このような斑模様のコミュニティとして捉えることができる。



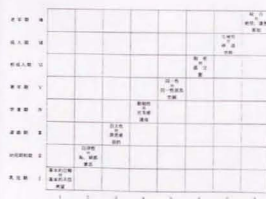
(図1-22) 共有領域によるコミュニティ(上)と集まりによるコミュニティ(下)

・アイデンティティ

アイデンティティとは自分が自分であることの確認である。それはまさに自分自身の活動によって確認するだけではなく、自分の社会的な役割や人とのつながりなどによって、社会の中でおたがいに与え与えられる強さを持った相互関係(Erikson, 1986)を持つ存在としての自分を認める。アイデンティティはこのような二重の意味を含んでいる。つまり、社会的関わりの中で自分の活動こそが、自分が自分であることにとって本質的に重要である。Lave (1988) は、アイデンティティを、人間と、実践共同体およびそれへの参加との、長期にわたる生きた関係として捉えている。それはコミュニティの中で自分が成長していく過程であるとともに、コミュニティに自分が位置づけられ、安定した関係を築いていく過程である。

Eriksonはアイデンティティを、時間の流れのなかでさまざまな危機を乗り越え統合していくことによって成長していく過程として捉えている。それは階段を登るようにある段階から次の段階へ進むものではない。自分の中に抱えている対立する要素(これが葛藤となり心理的危機となる)を二者択一的に選択するのではなく、両者や折り合いを付けながら包含し統合していくことによって次第に・連続的に進んでいく過程である。生活環境の大きな変化によって、これまでの生活(過去)とまったく異なる環境(現在)との間に対立が生じ、高齢者は紛れもない危機に直面する。これをどのように統合していくかということがアイデンティティの課題となる。

Toyama (1988) は、個人の環境適応過程を、環境の中に自己アイデンティティを映し出しそれを再び自分に取り込んでいく相互プロセスとして概念化している。環境の変化によってたらされる危機に直面した高齢者は、そのプロセスによって過去との折り合いを付けながら新しいコミュニティの中に自分



(図1-23) Erikson (1982) による心理社会的人生段階の8段階
 (「ライフサイクル、その完結」より転載)

を位置づけていくことで、環境の中でアイデンティティを再構成していく。新しい環境への適応がそこの人と環境との新しい関係を作り出すことであるならば、アイデンティティはその過程において重要な鍵となる概念と言える。

3. 研究の目的と位置づけ

1) 研究の目的

これまでの背景から、いくつかのテーマと視点を見出すことができる。これらのテーマと視点のもとに、入居者にとっての高齢者居住施設の意味を明らかにし、入居者の視点から施設計画のあり方を探ることが本論の目的である。

・テーマ

1. 環境移行の影響と適応過程の把握

住み慣れた自宅から高齢者居住施設へと生活の拠点が移動することは、高齢者にとってインパクトの大きい危機的移行である。とくに身体的・精神的能力の低下などによってコンピテンス（環境適応能力）が落ちてきた場合、環境の変化によって受ける影響も大きくなる。高齢者居住施設へのニーズは今後ますます高くなり、ゴールドプランの実行により実際の施設整備が急速に進められている一方、75歳以上の後期高齢者が増加しコンピテンスの低下した高齢者が増えつつある。生活拠点移動に伴う危機的環境移行により及ぼされる影響と、新しい環境への適応過程を把握することは重要な課題となる。

2. 個室型高齢者施設の意義の明確化

高齢者居住施設の個室化の要望は確実に高まっている。居室の一人当たり面積の補助規準面積が厚生省により引き上げられたこともあり、これまで4人部屋が主流だった特別養護老人ホームの個室化が確実に進んでいくと思われる。ただし個室化に対する批判や現実的な問題が根強く残っていることも確かである。居住施設を「収容の場」あるいは「介護の場」から「生活の場」に視点を転換し、プライバシーという抽象的な言葉だけでなく、入居者の生活にとっての個室の意味と役割を明確にする必要がある。

3. 個室型高齢者施設の空間構成のあり方の導出

高齢者居住施設での生活は当然ながら、居室の中だけで完結するわけではない。特別養護老人ホームの場合、自由に外に出ることは入居者の身体的にも施設の制度的にも難しく、生活時間のほとんどが施設内空間で行われることになり、個室型施設であったとしてもその外側に広がる空間は生活の中で重要

(表 1-4) 見出されたテーマ

1. 環境移行の影響と適応過程の把握
2. 個室型高齢者施設の意義の明確化
3. 個室型高齢者施設の空間構成のあり方の導出
4. 具体的な個室型高齢者施設の入居後評価 (POE)

な意味を持つ。施設の全体空間を、個人の生活の場として、そしてコミュニティの場としてどのように整えていくか、その空間構成の計画手法を見出すことは、施設の個室化が進みつつある現在、早急に行われるべき課題である。

4. 具体的な個室型高齢者施設の入居後評価 (POE)

POEとは、種々の建物が建設され入居後しばらくたってから、計画的に建物（構築環境）と入居者との対応関係を評価するプロセスである（高橋, 1991）。現在のところ、完全な個室化が行われた特別養護老人ホームは、まだほんの数例しか実現していない。今後の施設の個室化の進行に先立ち、すでに実現した先駆的事例の入居後調査を行い、施設における環境と入居者との関係を包括的に評価していくことは、その施設環境の修正・調整にとっただけでなく、これから整備されていく施設にとっても重要なデータを提供することができる。

・視点

1. 普通の生活の場として捉える

高齢者は型にはまった見方をされ、まるで同じ一つの集団のように見なされてきた（Hoglund, 1985）。しかし実際は平均的な高齢者が存在しないと同様に、生活歴・価値観・生活スタイル・心身状況など、その個人差はかえって大きい。今後高齢者層が増大するとともに、その個人差はますます広がっていく。そこで、高齢者の特性から問題を特殊化して捉えるという視点は本論ではとらない。一人一人の高齢者が普通の人として普通の生活をする場所として、高齢者居住施設を捉えるところに出発点をおく。

2. 生態学的視点から捉える

環境が人の行動に及ぼす影響を捉えるのではなく、人が行動している場面においてその人と状況をセットにして捉え、それぞれの場面における人と環境との相互関係に視点を当てる。それぞれの人は多様な理由を持って環境と関わっており、それぞれの場面での活動は明確な目的によるというよりも、状況に根付いた問題解決手段によって行われている（Lave, 1988）と捉える。さらに、本論では一施設において入居者個人個人の間を見えていくことにより、個人の生活の積み重ねによって形成された（されつつある）環境としての施設を捉えることができる。

〔表 1-5〕 見出された視点

1. 普通の生活の場として捉える
2. 生態学的視点から捉える
3. 入居者を社会的存在として捉える
4. 時間軸状の変化を捉える

それによって、人が行動しているある状況を、施設全体というさらに大きな状況の中に位置づけることができる。

3. 入居者を社会的存在として捉える

環境適応プロセスにおいて、新環境における自己アイデンティティの確立は重要な役割を果たす過程である。それには、自分自身がどのような存在であるのか、ということと共に、自分が社会的にどう位置づけられた存在なのか、ということが重要である。本論での視点としても、入居者が施設における社会的な存在として、コミュニティとどのように関わっていき、どんな関係を作り出していくのか、そして施設全体の中に自分をどう位置づけていくのか、という過程に注目する。

4. 時間軸上の変化を捉える

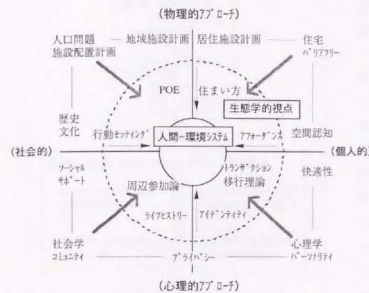
人と環境との関係は、人が環境に適応している状態では直接捉えることが難しい。環境移行～適応過程は、人間と環境との関係が、崩壊から再構築へ向けてダイナミックに変化する一連の過程である。本論は環境移行の過程を、系時的・縦断的な調査を行っていくことで、人間と環境との関係の時間軸上での動きとして捉えようとするものである。この動きは、環境に対して人間が関わり方を変化させていくということにとどまらず、その関係の変化によって環境自体も影響を受け変化していくことであり、すなわち、人間-環境システム全体の変化として捉えていく。

2) 研究の位置づけ

本論の位置づけは背景および目的に記してきたが、ここで本論をとりまく人間-環境研究の中での全体的な位置づけをモデル的に表す(図1-24)。

縦軸に研究のアプローチとして心理的-物理的の軸をとり、上方には物理的環境を対象とした建築・都市計画に関わる領域を、下方には心理・社会的領域を対象とした心理学・社会学に関わる領域を並べてある。

横軸に研究対象として個人的-社会的の軸をとり、右方は個人と環境との関わりとしての小スケールの領域を、左方には社会と環境との関わりとして集団を対象とするもしくは大スケールの領域を配置した。



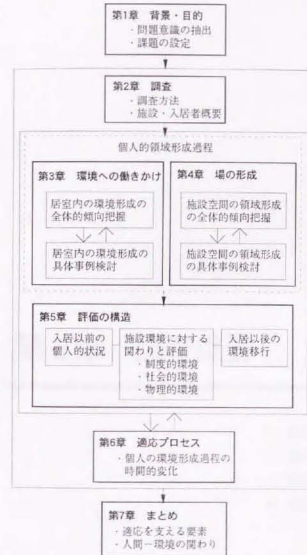
(図1-24) 研究の位置づけ

外側に位置するものは、なるべく多くの人にあってはまる一般解を求めようとする分野であり、それぞれの分野の独立性が強い。内側ほど、一般解を求めよりも個別的な状況を対象にし、生態的・状況的な視点をとることにより各分野が融合される傾向が強まる。

この図は、本論がさまざまな理論・統合された中心に位置することを意味するものではない。本論がある特定の理論のもとに組み立てられたものではなく、さまざまな関連分野の理論によって支えられながら、人間-環境システムの概形を捉えていこうという立場を示したものである。

本論を中央に位置つけたもう一つの意味は、それが軸の両端のバランスをとる位置にあるという意味ではなく、それぞれの軸がお互い強め合いながら融合していくという意味を含めている。たとえば、社会-個人の軸の中央ということは、個人は社会的な文脈の中でこそ個人としての意味を強めるとともに、社会も個人個人の自立性が高まってこそ社会としての意味を強めていくような、個人と社会との融合した関係を扱うことを目指している。その意味では、2本の軸の交差と考えるよりは、4本の軸が中央に向かって絡み合いながら交わっていると捉えた方がわかりやすいと思われる。

3) 論文の構成



(図1-25) 論文の構成

本論文は7章より構成されている。

第1章では、社会的背景および理論的背景を検討することから、問題意識を抽出し、課題を設定した。

第2章～第6章は、具体的な調査及びその結果の考察を行っている。第2章では調査概要として、分析の前提となる調査方法と対象施設の概要を記述した。

第3章、第4章では、個人的領域形成の実態把握を行っている。第3章では居室に焦点を当て、入居者による環境形成の様子を実態として捉え、同時に個室の意義を導出した。第4章では施設全体に視点を広げ、入居者の施設空間に対する意味付けの様子を捉え、施設空間のヒエラルキーとの対応を検討した。

第5章は、入居者による施設環境の評価の構造を全体として捉えた。施設環境のさまざまな側面に対する入居者の関わり合いによって入居者の行動環境が形成され、評価されることが見出された。

第6章では、第2章～第5章によって形作られた施設環境の全体像の中で、入居者個人が時間軸にそって行動環境を形成していく過程をとらえるため、具体的事例を詳細に検討した。

第7章では、全体のまとめを行い、人間-環境の関わりモデルを仮説的に提示した。

調査の種類

調査の種類は、調査の目的や調査対象の範囲によって異なる。例えば、市場調査、社会調査、学術調査などがある。また、調査の方法も、アンケート調査、インタビュー調査、実験調査などがある。



調査概要

調査概要は、調査の目的、調査方法、調査対象施設、調査対象者などを説明する。調査の目的は、市場調査、社会調査、学術調査などである。調査の方法は、アンケート調査、インタビュー調査、実験調査などである。調査対象施設は、市場調査、社会調査、学術調査などである。調査対象者は、市場調査、社会調査、学術調査などである。

第 2 章 調査概要

1. 調査概要
2. 調査方法
3. 調査対象施設
4. 調査対象者

調査概要は、調査の目的、調査方法、調査対象施設、調査対象者などを説明する。調査の目的は、市場調査、社会調査、学術調査などである。調査の方法は、アンケート調査、インタビュー調査、実験調査などである。調査対象施設は、市場調査、社会調査、学術調査などである。調査対象者は、市場調査、社会調査、学術調査などである。

第2章 調査概要

1. 調査概要

本論では、入居者個人と施設環境との相互に影響し合う過程を包括的・縦断的に分析するために、1箇所の施設のみを調査対象としている。複数の施設の比較をすることによってより一般的な結論を導き出すという手法をあえてとらず、ある事例における環境と人間との相互浸透の全体像を捉えることを主眼にした。

環境を作り出すと同時にその環境によって規定される人間と、その人間によって作り出されるとともに人間の行動を規定する環境といった、分らない両者の関わりを描き出すために、単なる物理的環境ではなく、そこに入居者が生活することによって形成される社会・心理的意味も含んだ環境を描き出し、その中で個人と環境との関わり方をケーススタディ的に取り上げていく、という手法をとった。施設環境の意味を人との関わりから捉える際に、次のような二つの視点考えられる。一方は入居者・職員・訪問者などの生活行為の積み重ねによって創り出されるものとして全体的に捉える視点であり、また一方は一人ひとりが生活の中で関わり合うものとして個別に捉える視点である。本論ではその双方の視点を往復させながら考察を進めていく。

そして本論のもう一つの重要な視点は、人間と環境とが相互に影響を及ぼしつつ変化していく過程を捉えることである。施設が開所し、入居者が次第に入り始め、定員に達した後も少しずつ成員が変化していく。そういった時間的流れの中で、人と環境との関わり方や人間関係、施設との関係の変化に注目するために、ある程度の期間に互って断続的に調査を行い、観察あるいはインタビューの中から取り出していく。このような継続的な調査・研究方法は、ある時点におけるさまざまな集団や条件を比較する横断的(cross-sectional)研究方法に対して、縦断的(longitudinal)と呼ばれる。

2. 調査方法

1994年7月に開設された全個室型の特別養護老人ホームを対象とし、開設後間もない1994年8月から1996年10月までの2年あまりにかけて、系時的な調査を行ってきた。これによって入居後次第に施設環境に適応していく過程を追っていくことを試みた。

調査は次の7回にわたって行った。

第1回：1994年8月8日～10日

第2回：1994年10月29日～11月2日

第3回：1995年3月2日～3月4日

第4回：1995年7月31日～8月4日

第5回：1996年2月13日～16日

第6回：1996年6月24日～27日

第7回：1996年10月23日～25日

調査の概要を以下に述べる（表2-1、2）。

1) 入居者の基本的属性と施設生活の流れ

各入居者の年齢・出身地・前居住形態・身体状況・痴呆状況など、基本的属性に関しては、施設の職員へのインタビューによって把握した。入居者の身体能力はKatz指標を用い、また痴呆状況についてはBerger指標を用い、第2回、第4～7回の調査時にその都度、全入居者を対象にして調査した。（ただし第2回調査時には直接Berger指標を用いずに、「クリアー、ややクリアーでない、軽度痴呆、中度痴呆、強度痴呆」の5段階で尋ねており、厳密に同一スケールでの比較は行えない結果となった。）

また、施設の日単位・週単位・年単位の生活の流れについても、職員へのインタビューによって把握した。これは入居者一人一人の細かな生活リズムではなく、主に職員側の職務スケジュールの流れであり、すなわち施設から与えられる運営上のプログラムに規定された、施設全体の生活リズムである。

(表2-1) 調査内容

- | |
|----------------------|
| 1) 入居者の基本的属性と施設生活の流れ |
| 2) 入居者による居室の環境形成 |
| 3) 共用空間の使われ方 |

(表2-2) 調査時期と調査内容

調査	時期	調査1	調査2	調査3
第1回	94年8月	-	○	-
第2回	94年11月	○	○	○
第3回	95年3月	-	○	○
第4回	95年8月	○	○	○
第5回	96年2月	○	○	○
第6回	96年6月	○	○	○
第7回	96年10月	○	(補足調査)	

2) 入居者による居室の環境形成

この施設の最も特徴的である個室空間の、各入居者による使いこなされ方を把握するために、各居室の家具・物の持ち込みとその配置の仕方の様子を描き込んだ居室図面を採取した。これは第1回～第6回の調査において、全居室を対象に行った。これは、居室室内での行為、家具・物などの使い方、または家具・物にまつわる思い出や意味を捉えるため、インタビュー可能と思われる入居者に対しては、居室を訪問してインタビュー調査を行った。インタビューは、あるフォーマットに基づいて順番に尋ねていくことが難しく、何度も居室を訪問しながら会話の中で尋ねていくようにした。したがって、すべての対象者から同じ密度で話を聞くことは結果としてできず、それぞれの人から分析に用いたすべての内容について回答を得られたわけではなかった。このことは分析の際に限界として現れてきている。

3) 共用空間の使われ方

居室の外部に広がる共用空間の使われ方を見るために、一定時間ごとに共用空間部分を観察し、入居者の位置およびそこで見られた行動を図面上にプロットした。その際、一人一人の入居者を特定して行ったため、ある時間断面ごとの共用空間における人の分布だけでなく、一人一人の入居者の場所・行動をつなぎ合わせていくことから各入居者の一日の生活の様子を捉えることができる。このタイムスタディの間隔は、第2回～3回調査では30分おきに、その後、第4回～6回調査ではより間隔をせばめて15分おきに行った。

これら1)～3)の調査から、各調査時ごとの時間断面における入居者の心身状況と居室～全体空間の使い方をもとめ、シート化した。そしてこの継続的な調査データを時間軸に沿って見ていくことにより、各個人そして施設全体としての時期的な変化が捉えられた。

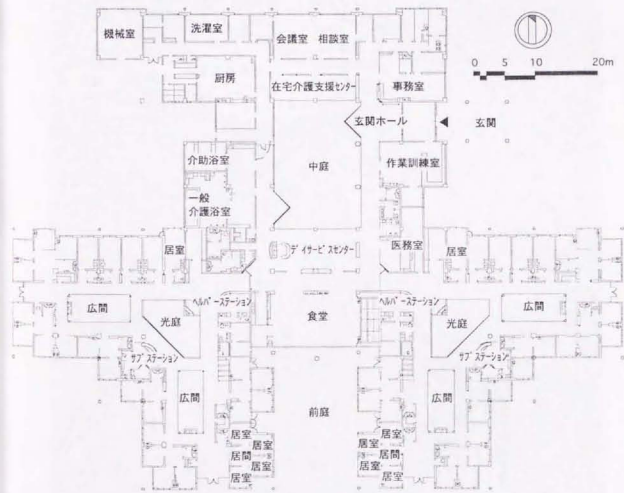
3. 調査対象施設

1) 概要

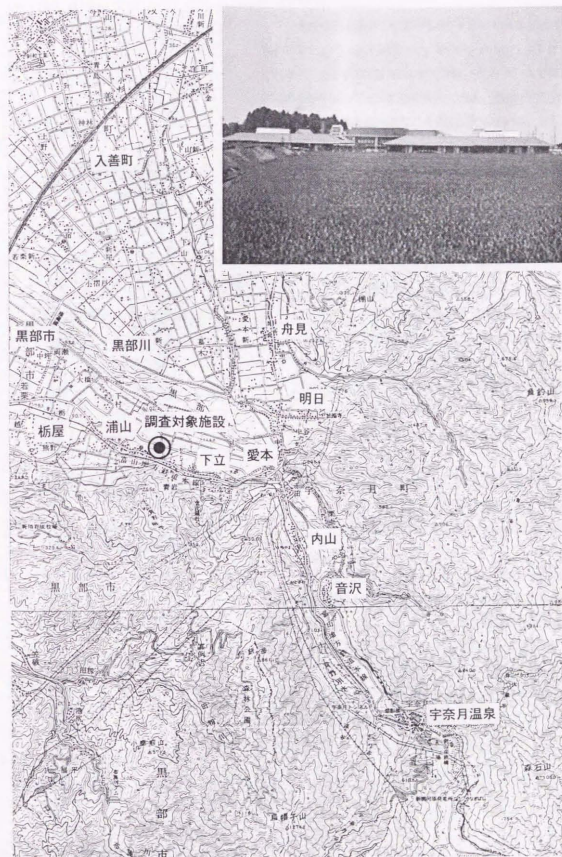
調査対象としたのは、富山県宇奈月町に1994年7月に開設された特別養護老人ホームである。黒部ダムで有名な黒部川の作り上げた三角州の付け根のあたり、山の麓から広がる一面の田園地帯の中に位置している。17425m²という広い敷地を利用した、1階建てでありながら60人の定員（特養は50人）にしてはかなりの面積的にゆとりのある特養である。この施設の最大の特徴は、全個室（厳密には2人部屋が2部屋ある）を実現したことであるが、単に個室を並べただけではない、ヒエラルキーを持たせた施設全体の空間構成にも大きな特長がある。在宅介護支援センター、デイサービスセンターが併設されている。

(表2-3) 施設概要

所在地：富山県宇奈月町
開所時期：1994年7月
敷地面積：17425m ² 、建築面積：4202m ²
構造：鉄筋コンクリート造1階建て
併設施設：在宅介護支援センター、デイサービスセンター
定員：60名（うち、特養15名）



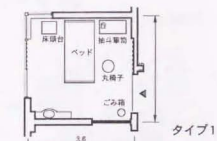
(図2-1) 調査対象施設平面図



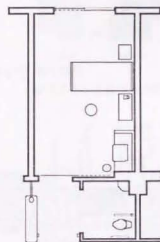
(図2-2) 周辺環境

2) 個室

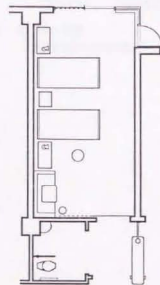
個室はおよそ以下にあげるの3タイプである(図2-3)。全体の特徴として、全居室内に流しがついている。トイレは室内ではなく、タイプ1では2-4室で共用、タイプ2・3では専用ではあるがやはり居室外に設けられている。1階建てのため、全ての居室から直接外部へ出られるようになっている。掃き出し窓は木造の建具で、雪見障子になっている。入り口の扉にはガラス窓が入っており、外から扉を開けずに中の様子を見ることが出来る。



タイプ1



タイプ2



タイプ3

タイプ1: 3.6×3.6mの8畳間大の居室。このタイプが48室と、最も標準的である。各室は厳密に同じ環境の部屋というわけではない。居室の位置によって扉と窓、流しなどの位置関係が異なる。また場所によってはL字窓のない居室もある。

タイプ2: 3.6×5.8mと面積がタイプ1の1.5倍以上ある居室で、8室ある。建物の北側にあって採光条件が悪い分、居室面積を広くし、また専用トイレがあるとといった、他の付加価値をつけたタイプである。

タイプ3: 3.6×7.2mとタイプ1の2倍の広さを持つ居室で、2室。このタイプのみ2人部屋である。部屋面積以外はタイプ2とはほぼ同様である。

単純な平行配置ではないため、通風・採光、外の景色、施設の共用空間との関係など、居室の条件は各室によって全て異なると言ってもいい。とくにタイプ2・3は部屋数も限られ、面積的・設備的にもタイプ1とは差があるため、当初はショートステイ用として考えられていたが、実際には看護ステーションから近いことと車椅子で出入りしやすいと言う理由から、重度の入居者向けに使われる傾向がある。

(図2-3) 3タイプの居室

3) 空間構成

居室というもっともプライベートな空間からパブリックな空間にかけて、明確に領域分けされた段階構成が特徴的である。まず、2~4室の個室で共用空間（アルコーブと呼ぶことにする）を囲んだものを1クラスターとして（図2-4）、複数のクラスターがより広い共用空間（広間と呼ぶことにする）を囲むように配置される（図2-5）。さらに2箇所の広間がL字型につながって一つの居室棟となる。東棟・西棟の2つの居室棟が食堂によって対照的に連結され（図2-6）、そこからよりパブリックなエントランスへと続く。

4) 施設の生活の流れ

以下に、主に施設側のプログラムによって規定される、入居者の一日の生活の流れをまとめておく。

7:30 朝食…食堂にて、全員が参加する。

9:30 検温…広間に入居者が集められ、看護婦によって検温が行われる。

10:00 体操…全館に音楽が流れ、「あるけあけ」「こきりこ体操」「ラジオ体操」と続く。はじめ食堂で一斉に集まっていたが、のちに各居住棟の広間に移行した。引き続きおしほり畳みの手伝いをすることもある。

月・木は特浴

12:00 昼食…食堂にて、全員が参加する。のちに身体的自立度の低い人のみ、より自室に近い広間で昼食をとるようになった。

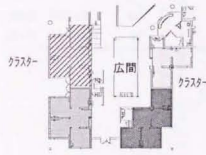
火・金は一般浴

15:00 おやつ…各居住棟の広間にて。朝食後に何らかのイベントがあったりしたときは、そのまま食堂でおやつを配る。

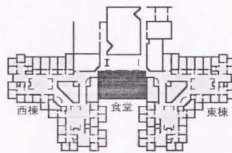
17:00 夕食…食堂にて、全員が参加する。



(図2-4) 第1段階
居室とアルコーブとの段階構成



(図2-5) 第2段階
クラスターと広間との段階構成



(図2-6) 第3段階
施設全体の段階構成

4. 調査対象者

(表2-4) 各調査時におけるレベルごとの調査対象人数

調査	時期	レベル1	レベル2
第1回	94年8月	20	10
第2回	94年11月	42	18
第3回	95年3月	50	21
第4回	95年8月	51	21
第5回	96年2月	50	21
第6回	96年6月	50	22
第7回	96年10月	49	21

1) 人数

調査は2つのレベルで行われた。

レベル1では、入居者属性・居室図面採取・共用空間タイムスタディの各調査を、調査時に入居していた入居者全てを対象として行った。7回の調査で60人となった。これは、94年7月の開設以来96年6月にかけて施設に入居した全入居者64人のうち、調査と調査の間に入所しすぐに退所してしまった4人を除いたものとなっている。

レベル2は、個別に居室を訪問するなどして行ったインタビュー調査であり、インタビューに応じていただいた人は比較的身心状況のレベルの高い23人(4割弱)だった。

本論では、レベル1の調査で全体的傾向を捉え、レベル2の調査で得られた個別のデータを重ね合わせていくことによって、さらに具体的な施設の姿に迫ろうとした。

施設の入居者受け入れは、開設時にいきなり定員の50人まで受け入れるのではなく、様子を見ながら段階的に増加させていくという方式をとっている。94年7月の開設時に19人、その後1ヶ月ごとに、1人、10人、10人、10人と増やしていき、11月に50人の定員に達している。その結果、各調査時の人数も多少変動があり、各7回の調査時において、20人、42人、50人、51人、50人、50人、49人となっている(これがレベル1の調査対象者となる)。レベル2の対象者は、それぞれ10人、18人、21人、21人、21人、22人、21人であった(表2-4)。

調査対象者の概要を表2.5に示す。

No.	Initial	性別	年齢*	前居住形態	入所日	居室							
						9408	9411	9503	9508	9602	9606	9610	
○ 1	YM	女	83	特養	94.07.01	W17	W17	E04	E04	E04	E24	E24	E29
○ 2	SN	女	81	特養	94.07.01	W06	E08	E08	E08	E08	E07	E07	E07
○ 3	TK	女	74	特養	94.07.01	W18	E16	E16	E16	E16	E10	E10	E10
○ 4	HK	女	84	特養	94.07.01	W11	E18	E18	E18	E18	E17	E17	E17
○ 5	YT	女	88*	特養	94.07.01	W12	W19	W19	W19	W19	W29		
○ 6	SS	女	86	特養	94.07.01	W07	E09	E09	E09	E09	E02	E02	E02
○ 7	NY	女	72	特養	94.07.01	W13	W13	W21	W21	W08	W04	W04	W04
○ 8	KY	女	95*	特養	94.07.01	W27							
○ 9	YH	女	90	特養	94.07.01	W22	E02	E02	E02	E02	W16	E16	E16
○ 10	KT	女	81	特養	94.07.01	W21	W04	W04	W04	W04	E04	E04	E04
○ 11	SR	女	87*	自宅(同居)	94.07.01	W08	E10	E10					
○ 12	KK	女	86*	自宅(同居)	94.07.01	W23	W18	W18					
○ 13	YS	女	83	老健	94.07.01	W19	E15	E15	W01	W01	E26	E26	E26
○ 14	NS	女	81	老健	94.07.01	W28	W03	W03	W03	W03	E22	E22	E22
○ 15	SM	女	81	病院	94.07.01	W09	W06	E01	E01	W26	W26	W26	W26
○ 16	NM	女	79*	病院	94.07.01	W20	W11	W11	W10				
○ 17	KS	男	79	自宅(同居)	94.07.01	W03	W28	W28	W28	W28	W27	W27	W27
○ 18	TF	男	77	自宅(一人)	94.07.01	W10	E19	E19	E19	E19	E20	E20	E20
○ 19	YK	男	64	自宅(同居)	94.07.01	W02	W07	W07	W06	W06	E03	E03	E03
○ 20	YA	女	75	自宅(同居)	94.08.01	W16	E14	E14	E14	E14	E12	E12	E12
○ 21	YC	女	88	自宅(一人)	94.09.01	E20	E20	E20	E20	E19	E19	E19	E19
○ 22	NH	女	86	自宅(同居)	94.09.01	E17	E17	E17	E17	E18	E18	E18	E18
○ 23	NH	女	86	老健	94.09.01	W02	W02	W02	W02	W02	W02	W02	W02
○ 24	TE	女	86	老健	94.09.01	E26	E26	E26	E26	W15	E24		
○ 25	UY	女	85	老健	94.09.01	E03	E03	E03	E03	W07			
○ 26	KI	女	85*	自宅(一人)	94.09.01	W26	W26	W26	W26	W25	E29		
○ 27	IT	女	77	病院	94.09.01	W09	W09	W09	W09	W08	W08	W08	W08
○ 28	OS	男	73	病院	94.09.01	W12	W12	W12	W12	E25	E25	E25	E25
○ 29	OS	男	73	病院	94.09.01	W12	W12	W12	W12	W12	E25	E25	E25
○ 30	WS	女	67	病院	94.09.01	W24	W24	W24	W24	W21	W21	W21	W21
○ 31	TG	女	92	老健	94.10.01	W15	W15	W15	W15	E15	E15	E15	E15
○ 32	UF	女	92	老健	94.10.01	W15	W15	W15	W15	E15	E15	E15	E15
○ 33	NK	女	91	自宅(同居)	94.10.01	W25	W25	W25	W25	E22	E22	E22	E22
○ 34	II	男	83*	病院	94.10.01	W10	W10						
○ 35	OH	女	84*	自宅(同居)	94.10.01	W14	W06	W07	W07				
○ 36	SG	女	83	病院	94.10.01	W16	W16	W16	W16	W11	W11	W11	W11
○ 37	TN	女	80	老健	94.10.01	E27	E27	E25	E25	W18	W18	W18	W18
○ 38	MS	女	67	病院	94.10.01	W27	W27	W27	W27	E16	E16	E16	E16
○ 39	KA	女	66	自宅(同居)	94.10.01	W01	W01	E15	E15	W12	W12	W12	W12
○ 40	MC	男	62*	病院	94.10.01	W05	W05	W05					
○ 41	TI	男	92	自宅(同居)	94.11.01	W23	W23	W23	W23	W23	W23	W23	W23
○ 42	MM	男	85*	自宅(同居)	94.11.01	E11	W22						
○ 43	TT	女	87	自宅(同居)	94.11.01	E07	E07	E07	E07	W13	W13	W13	W13
○ 44	NI	女	79	自宅(一人)	94.11.01	E24	E24	E24	E24	W17	W17	W17	W17
○ 45	IM	女	76	自宅(同居)	94.11.01	W20	W13	W13	W21	E14	E14	E14	E14
○ 46	FI	女	75	自宅(一人)	94.11.01	E23	E11	E10	E10	W20	W20	W20	W20
○ 47	AK	男	71	自宅(一人)	94.11.01	E12	E12	E12	E12	W10	W10	W10	W10
○ 48	WN	女	71	病院	94.11.01	W14	W14	W14	W14	W14	W14	W14	W14
○ 49	TM	女	71	自宅(同居)	94.11.01	E06	E06	E06	E06	E05	E05	E05	E05
○ 50	MS	女	95	病院	94.12.01	W20	W20	W20	W06	W06	W06	W06	W06
○ 51	MS	女	95	病院	94.12.01	W08							
○ 52	OK	男	86*	自宅(同居)	94.12.01	W17	W29	W19	E27	E27	E27	E27	E27
○ 53	IS	男	69	自宅(同居)	94.12.01	W08							
○ 54	MH	男	77	自宅(一人)	95.02.01	E21	E21	E21	E11	E11	E11	E11	E11
○ 55	HM	女	85	老健	95.05.01	W08	W05	W22	W22				
○ 56	OT	女	73	病院	95.05.01	W11	W13	E21	E21	E21	E21	E21	E21
○ 57	TY	女	89	自宅(同居)	95.05.01	E13	E13	E09	E09	E09	E09	E09	E09
○ 58	KW	女	74	老健	95.05.01	W18	W18	W24	W24	W24	W24	W24	W24
○ 59	KN	男	76	病院	95.08.01	W17	W17	E08	E08	E08	E08	E08	E08
○ 60	YR	男	90	病院	95.08.01	W22	W22	W09	W09	W09	W09	W09	W09
○ 61	AH	女	75	病院	96.02.01					W11	E06	E06	E06
○ 62	NU	女	83	自宅(同居)	96.03.01					W04	W04	W04	W04
○ 63	NU	女	83	自宅(同居)	96.03.01					W04	W04	W04	W04
○ 64	TS	男	87	病院	96.06.01					E13	E13	E13	E13

(表2-5) 調査対象者概要 (年齢は96年6月現在。ただし*は退所時年齢)

2) 部屋替え

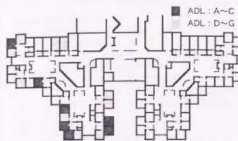
居室に関して、各入居者はたいへん度かの部屋替えを経験している。部屋替えの理由にはさまざまなものがあるが、全員を対象とした大規模部屋替えと個別のケースを対象とした個別部屋替えがある。この調査期間中、大規模部屋替えは2度行われた。

1度目は94年8月から11月の間である。施設開設当初の20人の入居者はすべて西側の居住棟に割り当てられていたが(図2-7)、その後入居者を50人の定員まで引き上げていく過程において、全員の部屋替えが行われた。その際に入居者のケアレベルによって居室が大きく振り分けられ、東棟には比較的自由度の高い入居者を、西棟には自自由度の低い人や痴呆度の高い入居者を集中させ、ケアの重点を西棟に置くという配置がなされた(図2-8)。

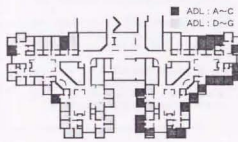
2度目の部屋替えは、96年2月と6月の間に行われた。この時には対照的に混合処遇を目指し、ケアレベルの高い人・低い人とが東西に均等に分散するように行われた(図2-9)。部屋替えによって自室の位置が認知できなくなると思われた痴呆の人を除き、不公平感のないように全員が部屋を変えることを前提としている(中には隣同士で部屋を交換した場合もある)。

このほかの個別の部屋替えとしては、ケアの程度の変化、新規入居者との関係、周りの人との人間関係の悪化、本人の希望などによって、その都度行われている。

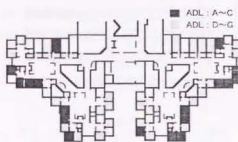
部屋の変化は、施設から在宅という危険的な環境移行に比べるとインパクトは少ないように思われるが、入居者にとっては、居室の物理的環境、周囲の人との関係、共用空間との位置的関係などのさまざまな変化をもたらす、一つの大きな環境移行と言える。



(図2-7) 94年8月の入居者ADLと居室位置



(図2-8) 95年8月の入居者ADLと居室位置



(図2-9) 96年10月の入居者ADLと居室位置

(表2-6) KatzのADLスケールとBergerの痴呆スケール

KatzのADLスケール	
A	食事・着衣のコントロール・移動・トイレ・更衣・入浴の自立
B	上記の1項目以外は自立
C	入浴と他の1項目以外は自立
D	入浴・更衣と他の1項目以外は自立
E	入浴・更衣・トイレと他の1項目以外は自立
F	入浴・更衣・トイレ・移動と他の1項目以外は自立
G	6項目全てに介助を要する
O	2項目以上に介助を要するが、C・D・E・Fにあてはまらない

Bergerの痴呆スケール	
1.	どんな環境においても自立しているが、物忘れのせいで日常生活はたびたび混乱する
2.	慣れた環境においては断片的に自立している
3.	慣れた環境においても指導監督が必要だが、指示のみで適切にふるまえる
4.	指示するだけでは適切に振る舞うことができず、介助を要する
5.	多くことができる。生活全般に介助が必要。通常の意味ある会話は成立しない
6.	寂たたり又は椅子に座らせることができるのみ。言葉には無反応。身体に触れると反応がある。

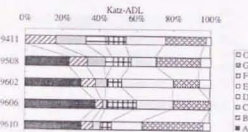
3) 心身状況

入居者の身体的な自立度、および精神的な痴呆の程度は、日常生活のあり方に大きな影響を及ぼすものである。それは常に一定のレベルにあるわけではなく、施設での生活が長くなるにつれ次第に変化していくものである。とくに特養の要介護入居者にとって、心身状況の変化のもたらす影響は大きいと言える。

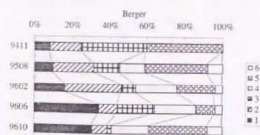
入居者の心身状況についての調査は第2・4・5・6・7回の調査において行っている。入居者の身体的な自立度はKatzのADLスケールを、痴呆の程度についてはBergerの痴呆スケールを用いて、職員の評価によって判定した(表2-6)。

入居者のADLは、時間とともにやや二極化の傾向が見られ、A・Bの自立度の高い入居者は増加している反面、C～Eの中等度の入居者が減少している(図2-10)。実際にはF・Gなどの自立度の低い入居者は次第に(入院・死亡などにより)退所していることを考えると、中等度の入居者の自立度が上昇あるいは低下して、二極分化していったものと思われる。

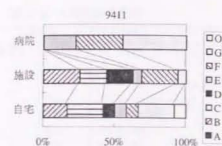
痴呆程度は96年6月までは次第に全体的に改善が見られている(あるいは職員が痴呆に対する認識が変化してきた可能性もある)が、96年10月の調査ではとくに痴呆度の高い人の痴呆の進行が見られ、こちらも二極化の傾向が見せてきている(図2-11)。



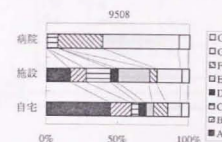
(図2-10) 入居者のADL度合の変化



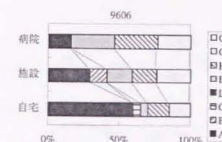
(図2-11) 入居者の痴呆度合の変化



〔図2-12〕94年11月の前居住形態とADL



〔図2-13〕95年9月の前居住形態とADL



〔図2-14〕96年6月の前居住形態とADL

〔表2-7〕前居住形態

調査時期	自宅	施設	病院
第1回 9408	12	8	0
第2回 9411	17	16	9
第3回 9503	23	16	11
第4回 9608	20	18	13
第5回 9602	20	18	12
第6回 9606	20	17	13
第7回 9610	19	17	13
全体	25	19	16

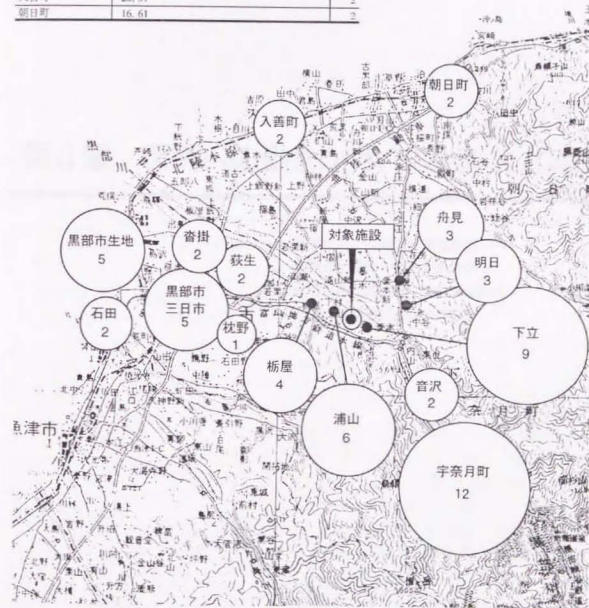
4) 前居住形態と出身地

この特養入以前前の居住形態は、他の特養・老人保健施設を合わせた施設系が19人、病院からの入居者が16人、家族と同居・一人暮らしを合わせた自宅からの入居者が25人となっている。この前居住形態は、居室の環境形成の様子、施設へ入居することに対する意識などに、かなりの影響を与えている。またそれ以前に、入居者の身体的な自立度とかなり密接に関係している(図2-12～14)。当然ながら、自宅に比べて病院からの入居の方が自立度は低いが、次第にその傾向が顕著になっている。

入居者の出身地は大きく分けて、地元宇奈月出身43人、隣の黒部市18人。入善町・朝日町各2人ずつとなっている。この地域は、農業を主体としている家も多く、日常生活において地域のつながりが強く存在する。各入居者の出身地は施設入居後の人間関係に少なからずの影響を与えているように思われる。入居する以前からお互いに知っていることもあれば、同じ村の出身ということでつながりを感じることも多い。その際、宇奈月町という大きな単位ではなく、浦山・下立といった地域レベルがお互いの認識の単位となっている。また、黒部市のような都会の出身の人の場合、同郷といってもお互い知り合いであることはほとんどなく、地域によるつながりを感じることは少ないようである。

(表 2-8) 入居者の出身地

出身地	入居者No.	人数
宇奈月町	04, 05, 08, 18, 19, 21, 42, 46, 49, 53, 54, 62	12
音沢	02, 06	2
下立	09, 10, 12, 20, 27, 35, 51, 52, 64	9
浦山	14, 33, 39, 44, 47, 60	6
栢屋	17, 40, 56, 58	4
明日	01, 07, 13	3
舟見	03, 23, 57	3
黒部市		
三日市	29, 30, 31, 34, 48	5
杖野	41	1
萩生	36, 38	2
香掛	43, 59	2
生地	15, 24, 25, 45, 55	5
石田	11, 32	2
入善町	28, 37	2
朝日町	16, 61	2



(図 2-15) 出身地ごと入居者数



第3章 環境への働きかけ

居室における個人的領域形成

1. 居室における個人的領域形成
2. 居室内の家具・物の量的特性
3. 居室内の家具・物に見る領域形成
4. 居室の領域形成過程の事例

居室における個人的領域形成とは、居住者が自身の生活空間の中で、物理的な環境と心理的な境界を形成する過程を指す。この過程は、家具の配置、物の量、そして居住者の行動パターンによって大きく影響を受ける。本章では、これらの要素がどのように相互作用し、最終的に個人の領域を形成するかを考察する。

まず、居室における個人的領域形成の基本的な概念を整理する。個人的領域とは、個人が自覚的に所有感や責任感を持つ空間を指す。これは必ずしも物理的な壁や扉で囲まれた空間に限らず、心理的な境界によって形成される領域も含まれる。居室においては、家具の配置や物の量が、この心理的境界を形成する重要な手がかりとなる。

次に、居室内の家具・物の量的特性が領域形成に与える影響について検討する。家具の種類や数、物の量や配置は、居住者が空間をどのように認識し、利用するかを決定する重要な要因となる。例えば、大きなソファやテーブルの配置は、開放的な領域を形成し、一方で小さな椅子やデスクの配置は、より限定的な領域を形成する傾向がある。

最後に、居室の領域形成過程の事例を通じて、実際の生活空間における領域形成の具体的なプロセスを考察する。事例を通じて、居住者がどのように空間を認識し、利用し、そして最終的に個人的領域を形成していくのかを明らかにする。

第3章 環境への働きかけ

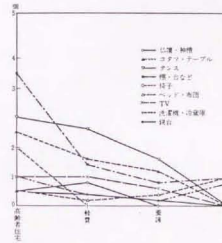
—居室における個人的領域形成

1. 居室における個人的領域形成

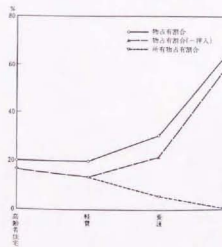
在宅に生活する居住者は、自分で家具をレイアウトし、さまざまな物を持ち込み、空間を飾り付けたりしながら、自らの家の環境を作り上げていく。そうにして作られた環境の中で、物を使ってさまざまな行為をしたり、物にまつさまざまな背景に思いを巡らすことによって、その環境を使いこなし、さらに自分に合ったものにしていく。そういった意味で、居住者と家の環境とは分ちがたく結び付いた一つの安定した人間-環境システムを形成していると言える(Wapner, 1991)。そこに置かれた物は、居住者と環境との相互浸透の関係を反映したものとなっている(Csikszentmihalyi & Rochberg-Halton, 1981)。

さて、そこから居住施設というまったくの新環境への転居は、これまでの人間-環境システムがいったん壊れてしまうことを意味する。これまでの日々の生活の中で次第に培われてきたさまざまな関係が失われ、自分の生活と一体になった環境が失われるということは、それまでの自分の生き方自体をも変化せざるを得ないほどの転換点であり、とりわけ生活歴の蓄積が大きく、また心身的能力の低下しつつある高齢者にとっては、そのインパクトの強さは想像を超えるものがあると思われる。これがWapnerの言う危機的移行(critical transition)という状況である。その際、新たな人間-環境システムをどう再構築していくか、あるいはこれまでの人間-環境システムをどれだけ維持しておくことができるか、ということが、新しい環境を自分の「住まい」として捉えて適応できるかどうかの重要な鍵のひとつとなる。

このことは、個室という物理的に区画された個人的な環境を持つことのできない多人部屋の居住施設では、人と環境との新しい関係を構築していくことがかなり困難であることを示唆する。図3-1~3-2は、同一の母体によって運営されている特養・養護・経費・高齢者住宅の4種類の施設において、入居者による家具の持ち込みと、居室における家具の面積的な専有割合を調べたものである。これを見ると、4人部屋の特養におい



(図3-1) 特養・養護・経費各老人ホームと高齢者住宅における物の持ち込み



(図3-2) 特養・養護・経費各老人ホームと高齢者住宅における私物の面積割合

1. 住宅環境の改善 暮らし

高齢者の住宅環境

高齢者の住宅環境の改善

高齢者の住宅環境の改善は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。

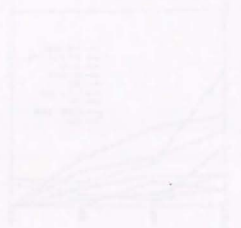
高齢者の住宅環境の改善は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。

高齢者の住宅環境の改善は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。

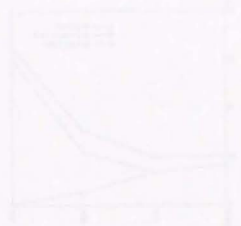
高齢者の住宅環境の改善は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。

高齢者の住宅環境の改善は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。

高齢者の住宅環境の改善は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。高齢者の住宅環境は、高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。



高齢者の住宅環境の改善に関する傾向を示すグラフ



高齢者の住宅環境の改善に関する傾向を示すグラフ

では、私物の持ち込みも難しく、ただでさえ少ない自分のスペースのほとんどが施設側の家具で占められてしまうのである。これは、普通の自宅よりも物が少ないであろう高齢者住宅と比べても、その差は歴然としている。自宅から特養へ移行させられた高齢者の心理的ギャップは、このグラフに現れた数字以上のものがあるだろう。

この章では、居住者による人間-環境システムの再構築に対し、個人的領域の形成という概念を用いて、人が環境に働きかけ、環境を形成していくことの重要性について考察する。とくに居室内空間に注目し、居住者がその空間に家具や物を持ち込んで独自の環境を形成する過程を捉え、居住者にとっての居室環境の意味を見出すとともに、施設の個室化が果たす役割について考察することを目的とする。

項目	内容
1. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
2. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
3. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
4. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
5. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
6. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
7. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
8. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
9. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。
10. 高齢者の住宅環境の改善	高齢者の生活の質を向上させるために重要な課題である。

2. 居室内の家具・物の量的特性

まずは、個室という空間が与えられた入居者によって、実際にどんな物が持ち込まれるのか、そして時間とともにそれがどのように変化していくのか、ということについて、全入居者のデータをもとに概観する。

1) 持ち込まれる家具

居室空間における入居者の生活の様子を示す指標として、具体的な家具の持ち込み状況について考察する。表3-1は家具の種類ごとに、その家具を持ち込んでいる人の人数および各調査時点での全入居者に対する割合を示したものである。このうち一人で同一種類の複数個の家具を持ち込んでいる場合、()内に家具の個数を示してある。ここから以下のようなことがわかる。

(表3-1) 居室内に持ち込まれた家具と持ち込んだ入居者の人数および割合

調査日	94.08	94.11	95.03	95.08	96.02	
人数	20	42	50	51	49	
施設家具	ベッド	20	40	46	46	47
	100.0%	95.2%	92.0%	90.2%	95.9%	
	床頭台	20	41	50	51	49
	100.0%	97.6%	100.0%	100.0%	100.0%	
	抽斗	19	39	47	48	46
	95.0%	92.9%	94.0%	94.1%	93.9%	
	丸椅子	19	37	43	39	41
	95.0%	88.1%	86.0%	76.5%	83.7%	
	クッション	4	10	9	8	6
	20.0%	23.8%	18.0%	15.7%	12.2%	
	布団	0	2	4	5	2
0.0%	4.8%	8.0%	9.8%	4.1%		
機器類他	5	2	7	6	2	
25.0%	4.8%	14.0%	11.8%	4.1%		
持込家具	軍筒類	6	16(17)	18(20)	17(19)	16(18)
	30.0%	38.1%	36.0%	33.3%	32.7%	
	棚類	4(6)	9(11)	13(17)	15(19)	17(21)
	20.0%	21.4%	26.0%	29.4%	34.7%	
	衣装ケース	8(9)	14(16)	24(26)	26(33)	25(33)
	40.0%	33.3%	48.0%	51.0%	51.0%	
	洋服掛け	4	8	6	6	6
	5.0%	9.5%	16.0%	11.8%	12.2%	
	台類	3	5(6)	8	10(11)	10(12)
	15.0%	11.9%	16.0%	19.6%	20.4%	
	椅子類	2	7	10	11(12)	11(12)
	10.0%	16.7%	20.0%	21.6%	22.4%	
	TV	5	13	20	22	20
25.0%	31.0%	40.0%	43.1%	40.8%		
冷蔵庫	3	4	7	11	11	
15.0%	9.5%	14.0%	21.6%	22.4%		
その他	2	4	5	5	5	
10.0%	9.5%	10.0%	9.8%	10.2%		

・起居様式

就寝に関しては、ベッド就寝がほとんどであるが、布団就寝の例も次第が増え、最大5例見られた。これらは基本的に施設からの貸与であるが、中には自分で持ち込んできた例もある。布団就寝かベッド就寝かに関しては、入居者の側に選択権は少なく、過去の生活との連続性が重視されることも少ない。ベッドではどうしても落下してしまい適応できない人の場合のみ、安全性の面から（あるいは管理上の面から）布団就寝に変更されるということになる。日中も居室で寝て過ごすことが多いため、布団は畳まれることはなく、一日中敷きっぱなしである。1例のみ、自分の意志でベッドと布団を併用している例があり、日中は布団で過ごし夜はベッドで寝る。

日中の起居様式に関するものとして、椅子は施設の丸椅子以外に自分の椅子を持ち込む、もしくは施設から別の椅子を借りるという例が次第に増加しており、2割を越えている。やはり背もたれが欲しいという機能的レベルから、昔から使っていたどうしてもこれが必要という情緒的レベル、あるいは家族や友人が尋ねてきたときに座らせるといった社会的レベルなど、さまざまな理由により持ち込まれているが、どれも自分の生活スタイルに合わせることに對する要求の現れと言える。なお、机・テーブルの類を持ち込んでいる例は、冷蔵庫やTVの台として持ち込まれている物を除くと1例のみであった。

・ケア器具

ポータブルトイレやリフト、エアマットなどの介護用の機器類は、時間とともに減少している。入居者のケアレベルの改善によって減少した面と、もしくは施設側のケア器具に対する意識の変化によってこれらの器具を居室に持ち込むことを避けるようになった面と、2通りの理由が考えられる。これらの物が居室内に持ち込まれることによって、その空間が居住の場ではなく、医療・介護の場としての性格が強まっていく。

・収納

居室には押入がなく、施設から与えられた抽斗タンスがあるのみなので、居室内に次第に私物が増加していくと、それらを取納する家具もまた必要となる。なかでも組立式の棚や衣装ケースなど、安価な取納家具の増加が顕著である。とくにプラスチックの衣装ケース類は、半数以上の入居者の部屋に持ち

込まれている。これらは持ち物が増えたために必要に迫られて新たに買い足されたと思われるものが多い。これに対して恒久的な家具であるタンス類はそれほど増加していない。入居当初に持ち込まれない限り、後から持ち込まれることは少ないようである。おおよそ収納に関しては、どちらかと言えば手軽で間に合わせ的な解決法が選択されていると言える。

・付加機能

TVは4割以上、冷蔵庫は2割以上の居室に持ち込まれるようになってきている。これらは居室に単に寝る場所として以上の機能を付加するものである。一人で好きな時間に好きな番組を見たり、自分の好きな物や人からもらった物を冷蔵庫にしまっておくことができる。それは入居者が「日中も過ごす場所」としての意味とともに、他者に気兼ねせずに自分のペースで過ごすような場所としての意味を、居室に与えている。あるいは居室がそういった（他者に気兼ねせずに過ごす）場所であるとの認識から、これらの物が持ち込まれるようになったとも考えられる。

・歴史

昔から使っていた鏡台や仏壇などを持ち込む人は1割程度で増加していない。入居時に持ち込まれない限り、後から持ち込まれることはほとんどないのである。もともと仏壇に関しては、この地方の仏壇は相当に大きい物で（小さいものでも幅1.5mはある）、この限られた個室空間には持ち込みたくても持ち込めないという事情もある。

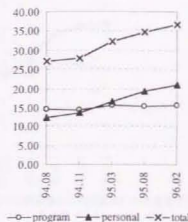
2) program物とpersonal物

居室内に置かれた家具・物を大きく分類すると、まず施設から与えられた物と自ら持ち込んだ私物に分けられる。さらに施設からの物は、施設から貸与されている「施設家具」（これは、最初から全員に与えられる家具類とケアの必要に応じて入れられた器具類からなる）と、その後の生活をしていく中で慰問などの際に皆に一齐に配られるような「施設小物」（これは個人に与えられた後は私物ということになる）に分けられる。また自ら持ち込んだ私物は、施設から必要最低限の物として指定されて持ち込んだ「必要私物」と、それ以外に自分で自由に持ち込んだ「その他私物」とに分けられる（表3-2）。

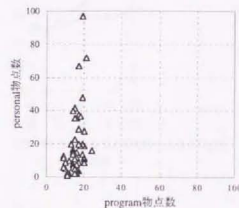
「施設家具」は、入居者の生活スタイルの変化や身体程度の変化によって多少変動することもあるが、時間の経過によってそれほど大きな変動のない性質の物である。「施設小物」

表3-2 居室内に持ち込まれた家具の分類

施設から の物	施設家具 （最初から置かれた家具・物） ベッド・抽斗櫃・床団台・椅子・壁・押し・ 布団・マット・ゴミ箱・脱衣む （ケアの必要に応じて入れられた器具類） まてがけ 入れ、エアコン機器・リフト機器・台車	
	施設小物 （その後の生活の中で皆に配られたり 慰問でもらった小物類） 紙の書類立て・紙むす・造花・干羽鶴・ 似顔絵・写真・カード・色紙・賞状・切り 絵・人形・飾り・お守り・飲料	program物
持ち 込んだ 私物	必要私物 （施設から言われて持ち込んだ必需品） 湯飲み・コップ・洗面器・タオル・バスタブ 歯磨き・石鹸・洗剤・絆創膏・オムツ メガネ・薬・押入れ・カミ・吸い飲み・履物・ 杖・シューズ・おむつ・眼鏡・靴・シャツ パ・上履	
	その他私物 箆筒・抽斗・タオル・おむつ・カミ・櫛・おひら か・本棚・押入収納・衣袋入れ・洋傘掛 け・冷蔵庫・卓機台・テープ・椅子・ソ ファ・仏壇・鏡台・TV・ラジオ類・座布団・ 枕・カベット・手押し車・食器入れ・小物 入れ・トイ・押し掛け・箱・段ボール・風呂 敷・袋・かみ・手紙入れ・缶・時計・鉛筆 ケース・温かい・おむつ掃除機・折り紙・掃除 機・カッター・筆の目録し・おむつ・おひら か・写真・絵・色紙・人形・置物・造花・ お守り・植木・ブローチ・花瓶・花・水 桶・金魚餌・急須・茶筒・お茶わん・茶 料・煎茶・お茶・おひら・コヒー・雑誌・ 本・年鑑・新聞・パンフレット類・画板・レ ット・手紙・ペン・本立て・おひら・鏡・おひら か・おひら・秤・おひら器具・織み物・鏡・化 粧品・トイ・代・薬箱・救急箱・裁縫箱・ 懐中電灯・位牌・数珠・マット・毛布・布団 カバー・靴・巾着・帽子・眼鏡・シューズ・靴 ケース・傘・団扇・孫の手	personal物



(図3-3) program物とpersonal物の一人当たり点数の推移



(図3-4) 各入居者のprogram物とpersonal物の点数

は、原則的に全員に平等にいきわたるものであり、個人差は少ない。これは自分で捨てない限り次第に増加し室内に蓄積していく。「必要私物」は、施設から渡されたリストにより持ち込むのでやはり個人差は少なく、また必需品であるためにその後の変化も少ない。これら3者はいまいずれも施設側によってプログラムされたものであり、これらをまとめてprogram物と呼ぶ。一方それ以外の「その他私物」を、施設に規定されない個人的な持ち込みという意味で、personal物と呼ぶことにする。

居室内の物・家具をprogram物・personal物に分けて、点数をカウントした。点数のカウントは、抽斗や箱にしまわれているような物を除き、居室内で直接目に触れる物のみを対象とした。カウントのしかたは、家具については1個につき1点、小物等についてもなるべく1個1点でカウントしたが、ベアの人形や歯磨きセット、お茶道具一式など、セットになっている物については、1セット1点でカウントした。このカウントによる分析は、第1回(94年8月)から第5回(96年2月)までの入居者全員を対象として行う。

この2種類の一人当たりの物の点数の時間的な推移を図3-3に示す。program物はやや増加もしくはほぼ横道であり、入居時に持ち込まれて以後の変化が少ない。対照的にpersonal物は時間とともに顕著に増加している。入居して以降の居室に見られる持ち込み物は時間とともに増加していくが、それはほとんどがpersonal物によるものであることが分かる。また、各入居者について横軸にprogram物・縦軸にpersonal物の点数をとってプロットしてみると(図3-4)、program物はほぼ10~20の間に収まっており、人によって大きな差はないのに対し、personal物は、0~100まで人による差が大きく現れている。これらの時間的推移と人による分散の様子は、program物が時間による変動も人による多様性も少なく、皆に一定にプログラムされている物であることを裏付けている。対照的にpersonal物は、時間とともに変化する居室の環境形成の様子を反映していると同時に、個人によって大きく異なる居室での過ごし方や趣味や嗜好、それまでの生活態が映し出された個人的な環境形成の様子が示されていると言える。

以上の理由から、これ以降の分析はほぼprogram物を中心に行うこととする。

3) 前居住形態の影響

施設入居以前の居住形態は、入居以降の環境形成にどのような影響を与えているのだろうか。ここでは、自宅・施設・病院の3タイプに分けて、物の持ち込み点数の比較を行った(図3-5~3-7)。

program物にはやはり、前居住形態による差はほとんど見られない結果となった。

personal物の一人当たりの点数は、どの時点をとっても施設が最も高く、次いで自宅、病院の順となる。その後のpersonal物の変化を見ると自宅の方が施設よりも増加量が大きく、96年2月時点ではほとんど差が見られない程度まで接近している。入居時の持ち込みは施設からの入居者の方が多いが、入居してからの持ち込みは自宅からの方が多いことが分かる。これは二つの理由が考えられる。

一つには、施設からの入居者はこれ以上ほかに行き場もなく最初からすべての私物を持ち込んで入って来るのに対し、初期の自宅からの入居者は、入居時にはあまり物を持ち込まず、後から次第に持ち込むようになってきたこと。家族と同居していた施設に入居してきた人はもちろんのこと、一人暮らしをしていた人であっても、自宅をそのままの形で残している人は多い。自宅からの者のうち、自宅を処分するなどして完全に退去してきた人は4人のみである。そのように自宅を残して入居してきた人の中には、施設を終の棲家と考えずいつか自宅に戻りたいと思っている人もいる。その場合、戻ったときのことを考えて自宅に私物を残しておき、施設は一時的な仮住まいと思っているために積極的に物を持ち込んで環境形成を進めようとは思わないのである。その後必要に迫られながらも少しずつ持ち込むようになる、そして自ら環境に働きかけるうちに施設に対する意識が変化し、居室が自室としての認識が高まるというプロセスの結果、次第に多くの物が持ち込まれるようになったと思われる。

もう一つの理由として考えられることは、後から入居した人ほど始めから多くの私物を持ち込んでくる傾向があることである。後からの入居の場合、すでに他の部屋でさまざまな家具や物が持ち込まれているという前例が存在するために、初期の入居者に比べ私物の持ち込み抵抗がないことが考えられる。またそれに伴い、職員側の意識の変化ということも考えられる。まだ職員も入居者も手探り状態の始めのうちに比べ、入居

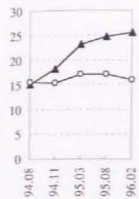


図3-5 他施設からの入居者の一人当たり持ち込み点数

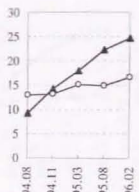


図3-6 自宅からの入居者の一人当たり持ち込み点数

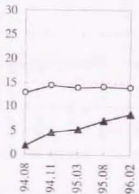


図3-7 病院からの入居者の一人当たり持ち込み点数

者の環境形成が進み、居室環境が安定してくる。その過程自体が職員の意識に影響を与え、後になるほど持ち込みを奨励するようになった可能性もある。

なお病院からの入居者は、病院に入った時点で持ち込みが厳しく制限されており、物を持ち込むという意識が希薄となっているか、もしくはもともと持ち込まれるべき物が非常に少ない。病院からの入居者はとくに、かなり身体が弱っている人が多いこともあって、その後の増加量も他の2タイプに比べてかなり低い。それでも確実に増加していることは注目すべきである。

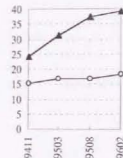


図3-8 自立度高

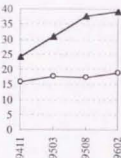


図3-11 痴呆程度

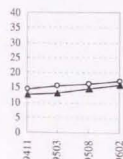


図3-9 自立度中

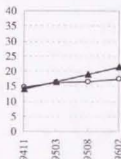


図3-12 痴呆程度

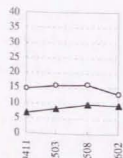


図3-10 自立度低

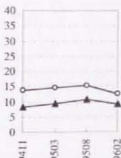


図3-13 痴呆重度

4) ADL・痴呆程度の影響

入居者の心身状況は、環境移行後の適応の際に強い影響を及ぼすといわれている。ADLの低下は単に身体的能力の低下にとどまらず、環境への働きかけや自己管理・自己決定が難しくなっていくことでもある。ここでは居室への物の持ち込みに対し、入居者の心身状態が及ぼす影響について捉えるため、ADL・痴呆程度によって比較を行った。ここでは94年11月～96年2月にかけての4回の調査すべての対象となった31人についてのみ、分析の対象とする。入居者のADL・痴呆程度も時間とともに変動しているが、まずは全体的な比較に重点を置き、94年11月時点でのADL・痴呆程度と持ち込まれた物との関係を考察する。

身体的自立度に関しては、KatzのADLスケールでA～Cを「自立度高」・D～Eを「自立度中」・F～Gを「自立度低」の3段階で比較した。痴呆程度に関しては、94年11月ではBergerスケールではなく、「クリアー+ややクリアーでない」程度痴呆・中度痴呆・強度痴呆の3段階で評価していたので、これを「痴呆程度 (クリアー+ややクリアーでない)」「痴呆中度 (軽度痴呆+中度痴呆)」「痴呆重度 (強度痴呆)」の3段階に置き換えた。Bergerスケールの場合には、1～2を「痴呆程度」・3～4を「痴呆重度」・5～6を「痴呆重度」の3段階とした。

program物とpersonal物の一人当たりの点数の推移を見ると(図3-8～3-13)、ADL・痴呆ともかなり似た傾向を示すことがわかる。program物については、ADL・痴呆程度が高いほどや高い点数を示すものの、それほど大きな差は見られず、心身状況によっても一定である結果となった。これに対し、personal

物はADL・痴呆程度が高いほど高い点数を示すとともに、その増加量も大きくなり、program物を大きく上回るようになっていく。このことはやはり、身体的・精神的な状況の良好な入居者ほど、自分なりの家具や物を持ち込んで積極的な居室の環境形成が行われていることを示している。これは当然の結果と言えらるが、居室の環境形成に際し、ADLや痴呆の程度がかなり大きく影響を及ぼしていることが分かる。ただし、ADL・痴呆程度などが低い入居者であってもこれらの家具・物は基本的に増加傾向を示しており、まったく居室の環境形成が行われていないわけではない。(本章の冒頭であげたグラフを見ると、おそらく4床室の特養での私物の持ち込みは、ADLの高い人であってもそこまですら及ばないと思われる。)

5) 「施設」入居の意識と物の持ち込み

全体的に、これまでに使い慣れた家具などを持ち込んで居室の環境をダイナミックに構築するという例は少なく、皆も持ち込んでいる手軽な収納やTV・冷蔵庫などを後から買い足すような形で居室の環境形成が多く見られた。自宅からの入居者であっても、自宅を処分して入居してきた人は別として、そうでない人の場合、家具類の持ち込みはそれほど多くない。

ここには「施設への入居」ということに対して入居者がどのように認識しているのか、ということが大きく関わっているようである。入居者はただ個室が与えられたからと言って最初から個室として認識するわけではない。入居してまださほど時間が経たないうちは、施設が自分の住処であり自分の空間であるとは認識されておらず、施設に私物を持ち込むことをためらったり、あるいはあえて私物を持ち込まないようにしている。それが、施設での生活をおくっていくうちに、他の入居者の様子や職員らの反応を見ながら居室に少しずつ手軽な物から持ち込んでいくようになる。たとえ手軽な家具であっても自ら居室に持ち込むことによって、そこが次第に個室としての認識を高めていき、その結果さらに物を持ち込むようになる。このような相互作用の結果として、次第に居室の環境が形成されてきている。

3. 居室内の家具・物に見る領域形成

1) 家具・物の意味の4側面

一口に居室の領域形成といっても、そこには人によってさまざまな意味付けがなされているはずである。居室が自分の空間として認識されるされ方は、居室の環境をどのように形成していくのか、ということと密接に関係しており、それは一人一人が長い年月のうちに蓄積してきた固有の生活スタイルが反映されたものとなっているだろう。ここでは、前節で量的に捉えた居室の環境形成を、より質的に掘り下げていくことを試みる。居室内のpersonal物の使われ方や意味について入居者から得られたインタビューのコメントをここでは重要なデータとして用い、入居者による領域形成にとって居室内の物が果たす役割を意味のレベルで捉えることを目的とする。

居室内の家具・物を人の行為との関係で機能的に細分類していく試みはこれまでになされている(たとえば、建築設計資料集成、日本建築学会、1991など)。行為と物とを一对一対応させることは明快ではあるが、そこからは、高齢者が長い年月を掛けて形成してきた物に対する意味が見えてこない(もともと物と行為を対応させる場合でも、人の行為自体をどのように分類するかというところで、似たような問題にぶつかると思われるが。)Csikszentmihalyi and Rochberg-Halton (1981)は、物を機能ではなく意味から分類し、思い出、つながり、経験、物の本来の質、スタイル、有用性、個人的価値の7項目に分類し、それをさらに20項目に細分類した上で、人と物との相互関係を非常に多面的かつ細かく分析している(表3-3)。ここで言うこととするアプローチも、物自体を分析対象とするのではなく、人のコメントに含まれる人と物との関わり方や、そこに含まれる意味を分析対象とする点で、共通している。その際、物の意味を細分化して捉えることよりも、居室の環境形成という側面において、物を介して人が環境にどのように働きかけ、環境との関係性を創り出しているか、という点に注目し、より広義な物の意味・役割の分類を試みた。

入居者から得られたインタビューのコメントを分析することによって、物の意味・役割に4つの側面が見いだされた。すなわち、I.空間的働きかけ・II.個人的活動・III.社会的関係性・IV.時間的関係性である(表3-4)。これらの4側面から、物を持

(表3-3) Csikszentmihalyi and Rochberg-Haltonによる物の意味の分類

I. Field		
A. Moments	1. Moments	3. Ritualization
B. Associates	2. Ritualism	4. Sincerity
	5. Hat in time longterm	7. Religiosity
	6. Ethnic	8. Call
	8. Call	
II. Personal Future		
A. Experience	10. Enjoyment	11. Ongoing Occasions
	12. Release	
B. Intrinsic-Qualitative Object	13. Craft	14. Uniqueness
	15. Physical description	
C. Style	16. Style	
D. Utilitarian	17. Utilitarian	
E. Personal Values	19. Embodiment of an Ideal	
	19. Accomplishment	20. Personalization

(図3-4) 物の意味・役割の4側面

I. 空間的働きかけ
1. 環境のコントロール—居室の温度や光などの調節、居室の清掃、収納を持ち込んだでの私物のコントロール、居室空間の環境を自分で管理する。
2. 空間のディスプレイ—人形、置物や花などによって空間を飾り付けたり、自分の好きな物を重ねる。より個人的な空間に対する働きかけ。
3. スタイルに合わせてセッティング—自分の趣味、起居スタイルにあわせて家具などの購入、居室空間での過ごし方に合わせて環境を形成する。
II. 個人的活動
4. 時間のコントロール—テレビ、ラジオ・新聞など、ちょっとした飲食物の持ち込みにより、自分のしたい時間に行うことができる。自分の都合に合わせて時間のコントロール。
5. 自己の管理—掃除・洗濯・身の回りのことなど、自分のできることを自分で。
6. 個人的な趣味・作業—自分の趣味や大事な作業など、自分にとって意味のある活動を行う。
7. 生物の世話—動物・植物など生き物を持ち込んで、自分で世話をする。
III. 社会的関係性
8. 他者のコントロール—居室空間に対する他者の視線や侵入などをコントロールする。
9. 他者との関係の構築—居室に人を招くことを前提としたセッティングや対応の物。他者を意識した居室環境のコントロール。
10. 社会的結びつき—家族や友人からの贈り物や喜貨、手信りの物など、自分との関係性の表示。
IV. 時間的関係性
11. 過去との結びつき—過去の思い出を示す物。過去からの生活の連続性を維持する物。

ち込むことよって行われる居室内の環境形成と、そこに含まれる入居者にとっての意味を、入居者のコメントと対応させて分析する。(コメントの後の数字は入居者Noを示す。)ただし、同じ物であっても入居者によって意味する側面が異なることは多い。また一人の入居者にとってさえも、ある物の意味が多側面から捉えられることもある。

2) 持ち込まれる家具・物の意味

I.空間的働きかけ



(写真3-1) 衣装ケース

a.環境をコントロールする

何も持ち込まれていない居室の収納は、施設から貸与された収納家具(抽斗タンス)が一つあるだけであり、入居時の案内には、季節によって服などの荷物を入れ替えるよう指示されている。しかし荷物が増えてきてそれだけでは入りきらない場合、自分で新たな収納家具を購入したり、自宅から持ち込むことによって、私物をコントロールするということは、ほとんどの部屋で行われている。ただし、後から購入された物多くはプラスチック性の衣装ケースが多く、恒久的な環境形成というよりは、一時的な環境のコントロールを目的にした物である。



(写真3-2) 洋服掛け



(写真3-3) 家から持ち込んだタンス

- 以前は風呂敷を積んでおいたが、タンスを持ってきてもらった。ばあちゃんのは使っているから、といって新品を買った。2
- 床頭台の上の棚は、サンブラザで買った。それをUYさんが見て、いいなと言ってまねして買った。37
- 洋服掛けも自分で買った。
- 小さな引き出しを家から持ってきた。中身はいろいろあけてしまった。44
- 家から持ってきたのは、カゴ・帽子掛け。13

居室には雪見障子の障き出し窓に加え、部屋によってL字の窓がついている。この窓は素通しガラスの羽目殺し窓であり、部屋の向きによっては陽の光や夜の街灯の光などが射し込むことになる。この窓に自分でカーテンやブラインドを付けて(あるいは家族の人に付けてもらって)外部からの光をコントロールする。また、入り口の扉の窓に対する遮光もよく行われるが、この場合は、外から覗かれないように目隠しを付けて、視

線をコントロールするという意味が強くなる。



(写真3-4) 窓のカーテンと目隠し

- 窓ガラスはまぶしいから、娘に膜してもらった。レースだけの駄目で、カーテンも。膜のガラスは気になる。男の人とかが入るとやだなー。18
- 窓にはまぶしかったので、お母さんがレースを付けてくれる。43
- 部屋のカーテンは家のものに言って買ってきてもうた。正月すきてから。もっと緑のがほしかった。23
- まぶしいので、部屋ではバスタオルをカーテン代わりにしたり。膜の窓から夜の外光が入るのだけが気になる。女童の水銀灯もまぶしい。目に悪いんではなからうか。23
- 窓の目隠しは、上の方は夜ベッドの方に明かりが射すのでまぶしいため、下の方は外から見られるのがいやだから。痴呆の人でどこでも覗き込む人がいる。25



(写真3-5) 遮光カーテン

入居者の身体的な原因などによって、温度がなかなか体感できない場合がある。部屋の温度のコントロールを直接自分ですることは難しいが、温度計を持ち込んで室温を計ることで、コントロールの目安としている。

- 温度計は、部屋の温度を見て毛布を何枚と決める。これがないと寒さがわからん。19

部屋の掃除は自己管理とも関連するが、居室の環境を自分でコントロールする作業である。部屋の掃除は基本的に施設職員が毎日一部屋ずつ回って行っているが、何らかの形で部屋を片づけたり掃除することもよく見られる。細かいところまでは人任せにできないからと自分で掃除することは、居室環境のコントロールの主体が自分であることを認識していることを示している。



(写真3-6) 温度計

- 箒とちりとりを家から持ってきたが使わない。今はちりとりだけ残っている。家にいるときと比べると、施設と極楽？一人部屋で家でいい。18
- 掃除機の小さいのを持ってきている。見えるごみは自分で。今は掃除しない。43
- 掃除は一日一回してくれるけど、細かいところまでは自分で掃除機を買ってきてやる。流しのところなども、お掃除の人が来ても恥ずかしくないように拭いてしまおう。27
- 自分の部屋は掃除のおばさんが来るが、子供がカーペット掃除機を持ってきてくれたので、リハビリでしている。2

b. 空間のディスプレイ

居室に花や人形を飾ったり、殺風景な窓にレースカーテ

ンを付たりして、居室空間を飾り付けるといったことは、かなりの居室で見られる。正価では世話できないので、造花が飾られることも多い。ディスプレイは、部屋が寂しいので彩りを添えようという視覚的な意味だけではない。自分の好きなものや思い入れのあるものを飾り付けることで、他ならぬ自分の環境であることを自分に対して表示するといった、環境の専有化(personalization)としても意味も大きい。自分だけでなく他者の目を意識して飾り付けがされることもあり、居室がまさに自分の部屋であり、他者を招くことのできる空間であるという認識につながる。ディスプレイは、自ら環境に働きかけて、さまざまなレベルで環境の質を変化させていくひとつの方法である。



(写真 3-7) 花を飾る



(写真 3-8) 造花などによって飾り付ける

- ・タンスの造花も自分で買ってきた。これならほめることはない。37
- ・シクアメンは、冬は雪で寂しいから、友達に買ってきてもらった。2
- ・人形も飾りたいと思って家から持ってきた。27
- ・壁の色紙や提綱などは、楽しいかと思って自分で貼った。6
- ・自分の作品を褒めてもらって飾る。正月の俳句ははずして別のをかけようと思って。2
- ・壁の紙は浦山の小学生の送ってくれたもの。自分で書いて壁に貼った。23
- ・部屋には若のなかったので、貴の花のポスターを貼っている。犬の写真も好きな。東京にいたときは飼ってたんだけど。44

c. スタイルに合わせたセッティング

始めから与えられた家具とその配置を自分で変えることなく過ごしている人は多く、それは変えてはいけないものと見なされているかのおようである。そんな中で、自分の身体状況に合わせて寝具や椅子などのセッティングを変化させたり、自分の使いやすいようにベッドやタンスなどの家具の配置を変化させる入居者も見られる。これは環境を自分でコントロールしているという意味に加え、環境を自分にフィットさせるために自ら環境を変化させようという、直接的な空間への働きかけがある。



(図 3-9) ベッドをどけて布団で就寝

- ・配置は自分で都合のいいようにした。13
- ・ベッドの場所は自分で決めた。23
- ・並べ方は自分で布団した。仏壇持ってきたかったが、持ってこれないので、心で謝ってお祈りしている。21
- ・床頭台は自分で斜めにした。使いやすいもん。3
- ・ベッドは以前に3回ほど落ちましたので、のけてもらいました。43



写真3-10 カーペットを敷いて床座で過ごす



写真3-11 ベッドに合わせてテーブルを作ってもらった



写真3-12 作業のための机を持ち込む

単なる身体レベルへの対応や使いやすさといった機能的なレベルを超え、自分のこれまでの生活スタイルに合わせたセッティングの構築が見られるようになった。これは新環境への移行に際して、それ以前に自分の作り上げてきた生活との連続性・一貫性を維持させようとする行為であり、居室空間を他ならぬ自分自身の環境としてダイナミックに構築する手段である。

- ・部屋替えは娘たちが来てやってもらった。テーブルなど置いて。セツかく洋間なんだから。47
- ・ベッドの横に布団を敷いている。菓も味噌も一緒じゃいやだから、寝床と分けてる。壁はここでごろっとしたり、テレビみたり。44
- ・藤の座椅子は息子に持ってきてもらった。持ってきていいと言われたので。23
- ・ベッドのところにテーブルはちょうどあうように友達に作らせた。舟見の木工所の息子に作ってもらった。材料費だけだから、3000円していない。ベッドの上で胡座をくんで本を読んだり。47

※I.に見られた家具・物の例

- タンス・衣紋掛け・
- カーテン・窓の目隠し・温度計・箒・ちりとり・掃除機・
- 造花・花・人形・色紙類・折り紙・ポスター・
- テーブル・椅子・布団・座布団・お茶セット

II. 個人的活動

d. 時間のコントロール

施設の生活では、食事・入浴・おやつ・体操など、日常の基本的な生活行為は決まった時間にプログラムとして与えられており、これらによって1日のリズムが人為的に作られている。しかしその合間の時間を次のプログラムまでの待ち時間とみなしてただ何もせずに過ごすわけではなく、ある程度自分で時間をコントロールしながら過ごすためにある種の物が持ち込まれる。お菓子や果物などの食べ物是非常に簡単に持ち込まれる物だが、好きなものを食べられるという点と好きな時間に食べられるという点において、二重の自己決定を可能にする。TVやラジオなども同様の役割を果たしており、他人に気兼ねなく、見たいときに見ることができるという意味で、時間をコントロールしていることになる。

- ・コーヒーの前は、子供が持ってきてくれた。お菓子入

れ。ベッドサイドのケースの中もお菓子。何でもお菓子。23

- 7時ころには、ラジオ付けたまま寝てしまう。49
- TVも、持ってっていいというから、持ってきた。27
- テレビはたまに、運動とか行かないでみている。44
- 俳句のヒントになるので、ニュースが見たいが、みんな見ないから、外では見ない。2
- 新聞を取っている。自分で取ると部屋まで運んでもらえる。25

e. 自己管理

自己管理とは、自分の身の回りのことは自分ですることである。特養の入所資格は要介護高齢者であり、入居後の生活においては、入居者の身の回りの細かいレベルの世話まで職員がサポートすることになる。しかし、それらを完全に職員にゆだねてしまうことはきわめて身近なレベルでの主体性を失い、日々の生活の中で受動的な存在とならざるを得ない。たとえ施設側がしてくれることであっても、自分の部屋の掃除、簡単な洗濯物、出かけるための準備、自分の体に気を使うことなど、自分の意志によって自己を管理することは、自分の身の回りに責任を持つことであり、自立した主体として行動することになる。

- 掃除は一日一回してくれるけど、細かいところまでは自分で掃除機を買ってきてやる。流しのところなども、お掃除の人が来てもらえずかしくないように拭いてしまう。27
- 洗濯は、調子のいいときは洗濯機を使う。たまーに。43
- 洗濯物は洗濯する場所で、自分の石鹸を使って自分で行っている。6
- タオル掛けは、こっちに買って買った。自分で洗濯する。できる間は自分でする。46
- 鏡は、眉毛を書くときに使う。44
- 帽子は、出かけるときまぶしいから一つはいいと行ったら、子供が4つ持ってきてくれた。鏡の前であわせていたら、お母さんに笑われた。2
- 前は靴なんてなんでも良いと思っていたが、4月の土砂降りの雨の日に靴に穴があいて足中血だらけになって以来、なんでも新しいものを買うようにした。47
- 電気ポットは、自分でお茶を飲めるように。
- 冷蔵庫はあるといい。目薬もいられるし。23
- 巾着袋は自分で縫って作ったがず。食事の時には何か入れて持っていく。納豆とかミカンとか、体にいいようなものを持って。20

f. 趣味・作業

自分で明確な目的・目標を持って行う活動であり、個人の性格や嗜好によって多様な活動が行われる。これらの活動に



(写真3-13) TVの下のコーヒーの缶も冷蔵庫の上の入れ物もお菓子が入っている



(写真3-14) TV



(写真3-15) 冷蔵庫

よって、日々の生活の拠り所や生きがいで、今後とも続いていくであろう施設での生活の中に目標を見いだすことができる。入居以前から趣味としていたことを継続的に行うことは、過去の自分との連続性を保つことになる。入居してから始めた新しい活動が、施設という新しい環境と自分との新たな関係を作っていくきっかけになることもある。そして、他人に気兼ねすることなくこういった活動が行えることは、まさに今現在の自分が自分らしくあることを確認する機会である。また、自分で手を加えた物を部屋に飾ることによって、空間自体に自分の痕跡を残し、それを自分で再確認することになる。



(写真3-16) ベッド周りに本やノート、筆記具など



(写真3-17) 趣味の編み物



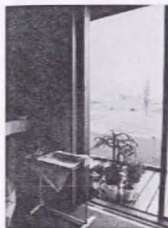
(写真3-18) 手作りのリハビリ運動器具

- ・部屋では日記を毎晩付ける。自分でちよっころ思い立って、去年から大学ノートに付けている。床には足が痛くて置れない。椅子に置けることもある。4・俳句は書いて4年。まだまだ新米。楽しみにしている。生きた証を残したい。俳句は心の支え。玄関横の右側の部屋で句会。枕元に郵便を置いておく。いい句を思いついたら、すぐに書き込む。新築の俳句の簿も毎日書き移して勉強している。左手だから大変。2・俳句を毎日日記代わりに書く。毎日1句か2句。おらはうすに来てから始めた。息子が確認を持ってきてくれる。椅子を机代わりにして、実際のあがってきた生活上のことを書いている。20
- ・枕元に俳句書と仏教書。釈我良人先生の歌異抄の本を取り寄せた。死ぬまでに読み返そうと思っている。2・床消台の仏教の本は思いついたときに読む。本を机下にしなように物の中に入れてある。11
- ・こちらでは、何をやる時間もないので、作ろうかなーと思って、編み物を始めた。編み物はベッドに座って。はうすの人にホチキスを借りて、紙で運動機を作っている。37
- ・TVは長い間見られない。チョウチョづくりの方が好き。23
- ・切り絵は窓から見える景色をつくっているが、なかなかうまくできない。お母さんも見せてねという。20
- ・(手の運動は)運動だけで1時間半やっつた。40分やっつて5分休み。また25分やる。最近では10分くらいしか出来なくなって、(重りの彩を)400gとった。これまでは右手の方には2kg200g入っていたが、今は1kg500g。19

6. 世話

身体的能力の低下しつつある特養の入居者は、基本的に世話される側の存在となりがちである。しかしこれまでの生活ではたいてい世話する側の存在であったはずであり、施設に入居したことによって全く正反対の立場に転換されてしまうことは、精神的に大きなギャンプを生み出す。何人もの入居者が、造花ではなく生きた花や植木、人によっては金魚などを持ち込む

ことによって、全体的な変化の少ない施設生活において、居室に直線的な動き・変化を与えることに加え、毎日をゆったり世話したりすることで、どちらかといえば受動的な生活の中で、自分が直接手をかけているという感覚を得ることができる。それを積み重ねることで、自分が世話をしている主体であることが再確認される。



(写真 3-19) テラスで植木の世話

- ・床置台の植木は子どもが持ってきてくれた。毎日をやる。
- ・家から持ってきた花。つばみだったのが開いた。37
- ・花瓶のススキは買ってきて自分で水を換えている。20
- ・バラの造花は自分で持ってきた。外の花やらは娘が持ってきた。毎朝洗面器に一杯水をやる。
- ・サボテンはほとんど世話しなくて良いが、自分で水をやっている。43
- ・正月に家に戻って、アロエを持ってきた。2年ぶりでもちゃんと生きていた。毎日1時間眺めている。25
- ・9月の末にはうすの雀して屋台が出て、孫が金魚を5匹すくった。今では2匹になったがちゃんと泳いでいる。23
- ・金魚は2カ月くらい生きている。ちょっと入れ物小さいが。金魚は、何か飼うてないと、気遣いになっちゃう。金魚はあまり餌やらん方がいい。もう一匹入れた方がいいが。46



(写真 3-20) 自宅から持ち込んだ金魚の飼育

II. に見られた家具・物の例

- ラジオ・テレビ・菓子・ポット・新聞・雑誌・冷蔵庫・掃除道具・洗濯用具・物干し・帽子・履・化粧品・巾着袋・本・日記・ノート・俳句・仏教書・扇み物・折り紙・切り絵・リハビリ器具・植木・花・金魚・

III. 他者との関係形成

h. 他者のコントロール

多くの居室で、扉の窓に、外から中を覗かれないように、他人の視線をコントロールする意味で目隠しがされるようになってきた。痴呆の人に覗かれないため、また頻繁に訪れる見学者に覗かれないため、といった直接的・具体的な視線に対する対処だけでなく、近くの入居者の人に覗かれないため、という仮想的な視線に対してのコントロールもその理由としてあげられている。ここには、居室が自分の空間であり他者の視線の侵入から守るべき空間であるという意識の高まりが見受けられる。単に紙やタオルで隠してしまうだけの人もいるが、レースのカーテンやスタンドグラスを付けて、外側に対して



(写真 3-21) のぞき窓に紙で目隠し



写真 3-22 窓にステンドグラスを貼る

も気を遣う人もいる。また職員によって見られることは安心感につながるという意識から、窓の下半分だけ隠すことでバランスをとるという例も見られる。

- ・今年の3月から4月ごろ、どっかの婦人会が3日か4日来て(部屋の中を)覗いていってたまらなくて、窓に(目隠しを)貼った。貼ったら窓下の電気がまぶしくなくなるのが良かった。今までも窓下の電気がまぶしかったが、気にしないようにしていた。19
- ・窓の目隠しは覗かれるから自分でした。37
- ・窓の目隠しは外からのぞかれそうで。前に男の人がいるから。44
- ・窓ガラスはしょっちゅう壊れたりするのがいやじゃけん。(窓にタオル) 46

視線のコントロールだけではなく、自分が外出しているときに他人の侵入を物理的に阻むように、入り口を経て縛るといふ例が見られるようになった。これらのプライバシーに関する意識は、個人の中で自然と高まってきただけではなく、他の部屋の様子を真似るなど、他者によって高められる側面がある。



写真 3-23 他人が入らないように紐で縛る

- ・(入り口のところに紐は) 痴楽の人で何でも開けてイタズラするので、ひもを付けてしぼる。開かないように。9
- ・入り口の紐は用心のため。あやさんもしているから。57

④ 他者との関係の構築

他の人の居室に遊びに行ったり、誰かが遊びに来るようになると、接客用のしつらえがなされることがある。自宅に人を招き入れるようなセッティングは無理だが、接客用の座をしつらえておいたり、訪問者の目を意識した飾り付けや環境のコントロールがなされるようになる。個室はもはや施設の一部というより入居者自身の空間であり、そこには他者に対する入居者の意識が映し出されている。その空間内では他者に対して入居者自身がコントロールする主体として働きかけていくことになる。



写真 3-24 椅子・テーブルによる接客空間

- ・TMさんがよくくる。部屋に丸椅子は、TMさんの来たときのために。足が悪くて座れないから。44
- ・座椅子は接客用。自分はその時ベッドに寝る。23
- ・丸椅子は友達か遊びに来たとき座らしたり。
- ・隣の人がかならず7時頃までここにいる。TVを見て座っている。自分はラジオを聴いている。目が悪いので。顔も見えないくらい。18
- ・UYさんは毎日来る。来る時ソファに坐んで腰掛ける。他にNIさんとかもいらっしやる。UYさんと一緒に寝も横んでいる。37

・村の人とかちよいちよいと来る。花は友達がくれたもの。6

・掃除は一日一回してくれるけど、細かいところまでは自分で掃除機を買ってきてやる。流しのところなども、お掃除の人が来ても恥ずかしくないように拭いてしまう。25

社会的結び付き

家族や親しい友人など、自分に非常に近い関係にある人からの贈り物や手作りのもの、写真や手紙など、本人に直接会うことはできなくても結び付きを感じることができるような物が、直接目に見えるところによく飾られている。誰かからの贈り物のように直接その人を映し出す物だけでなく、一緒に何かをしたり、何かしてもらったりといった出来事にちなんだ物や、あるいは人とお揃いのものによってつながりを得ることがある場合もある。居室でとくに多く見られるのは、子供や孫（あるいは曾孫）などの写真や、彼らが入居者のために描いた絵などである。手紙はさらに思い入れが深いものだが、目に見えるところに飾られるというよりは抽斗の中などに大事にしまわれることが多い。

・娘が布を買ってきて、手紙入れを作ってくれた。便利。2

・帽子は一つほしいと行ったら、子供が4つ持ってきてくれた。2

・父ちゃん（息子）に買って買った座布団・皿花。孫が作ってくれた千羽鶴。9

・電灯のひもにぶら下がっている人形も、父ちゃんが持ってきてくれた。9

・色紙は越野荘でもらった。越野荘にいたときはいろいろもらえた。アルバも越野荘でもらった。6

・俳句の先生にもらったカレンダー。2

・テレビの上は、曾孫の写真。長男の息子の子供。23

・孫の誕生日のため、忘れないようにメモ。25

・床置台の上の暖は、TNさんが持っていたので、同じものを買ってきた。クリアケースは、TNさんの娘さんに乗せて買って買ってきた。ごみ箱もTNさん製。25

・本棚は妻母さんたちが何か喜ぶかと思ってくれしゃったですが、中の確認は子供や友達が行ってきてくれる。29

III.に見られた家具・物の例

窓の目隠し・入り口の柱・掃除用具・飾り付け・椅子・ソファ・テーブル・テレビ・手紙・贈り物・写真・お揃いの物・



(写真 3-25) 子どもや孫からの手紙を壁に貼る



(写真 3-26) 以前の建設でもらった色紙や友人にもらった人形などを枕元に飾り付ける

IV. 時間的関係性

k. 過去との結び付き

以前から使い続けてきた家具などには、さまざまな思い出や経験が刻み込まれ、また長年使ってきたことにより自分の生活スタイルの一部ともなっている。こういった物が持ち込まれることによって、これまでに結び付いていた自分と物との関係が維持され、生活スタイルに連続性と一貫性をもたらす。

過去の思い出の品・記念の品などは、直接の生活行為と関わらないためか、持ち込まれる例は少ないが、過去の実験・思い出と向き合うことによって自分のアイデンティティが確認され、新環境への適応の際の一つの礎となる。



[写真 3-27] 香港みやげの思い出深い家具や置物



[写真 3-28] 長い間飾ってきた人形



[写真 3-29] 仏壇と鏡台

- ・家から家具を持ってきた。お茶道具とか、家にいろいろあったので。持ってくるものには気を遣う。香港から持ってきた家具。ベッドのマットも香港みやげ。娘が香港に18年行ってたので、10回は行った。25
- ・椅子はこれじゃなく駄目なんです。49
- ・部屋の鏡はお嫁入りの時のもの。あと下駄箱もあったが、大きいのでやめた。49
- ・タンスは何十年も。タンス2本と茶ダンス1本、10年まじめに働いてもらったもの。44
- ・(こけし人形) 前に飾り棚にいっぱい置んでいたが、これ(2つ)だけとって、後は全部捨てた。前はさらっていっぱいあったんよ。娘は前任でた家から送ってきた。娘はあるだけ。使うことはない。46
- ・棚はうちから持ってきた。6

過去の人との結び付きを示す写真などは、当時の関係性を呼び起こし、当時の自分自身とも向き合うことで、自分のアイデンティティと密接に関係している。非常に大事な物として持ち込まれ、中には棚に飾られ毎日拝む対象になることもある。

- ・息子の写真。最近亡くなった。62歳。23
- ・夫の写真。23年前になくなった。25
- ・写真はじいちゃんか。44
- ・写真は息子の写真。若いときに心臓麻痺で亡くなった。6
- ・夫の写真は娘が持ってきてくれた。10年くらい前の写真。朝晩拝んでいる。家にいるときには仏壇があった。37

VI. 見られた家具・物の例

昔からの家具・人形・写真・仏壇・位牌・

3) 各側面からの環境形成過程

入居者の持ち込んでいる家具・物を側面ごとに分類し、カウントを行った。各側面の一人当たり点数の推移を図3-14に示す。全体的に増加傾向ではあり、入居開始から96年2月の時点まではややS字のカーブで上昇を続けている。やや頭打ちとなった96年2月～6月の間に全体規模の大きかりな部屋替えがあり、その影響もあるためか、96年6月には減少気味で、とくに社会的関係を示す物に関して大きく減少していることが見られる。部屋替えによって居室の位置が変化することだけではなく、居室内空間の環境も影響を受けていることが窺われる。

各側面ごとに、物を居室に持ち込んだ入居者の割合と、持ち込んだ人ひとり当りの家具・物点数の時間的変化を図3-15～3-22に表す。以下では、これをもとに、物との関わりによって居室が自分の生活の拠点として安定した空間となる過程を側面ごとに分析する。

I. 空間的働きかけ (図3-15、16)

居室空間に様々な家具や物を持ち込んだり、環境に対して自ら働きかけることによって、自分にとって居心地のいい空間を形成する過程である。

環境コントロール及びディスプレイを行っている入居者の割合は、時間とともに次第に増加して9割以上、あるいは100%となった。入居者一人当たりの持ち込み点数も増加し、環境コントロールが5点近く、ディスプレイが8点以上と、かなり高い値を示している。入居者は、居室空間を管理する過程によって空間のコントロールの主導者が自分であるという意識を高める。また、空間を飾り付けたり自分の好きな物を持ち込むことによって、他者とは違う自分の領域であることが確認される。

生活スタイルに合わせたセッティングは、点数こそ2点前後では変わらないが、入居者割合は増加しており、ほぼ9割に達している。これにより自分に適合した環境が形成されることになり、この居室空間が他の誰でもない自分にとっての空間であることが意識されるようになる。

このような空間的働きかけによって、居室の環境を入居者に適合させるという物理的な環境の形成がなされるだけでなく、入居者自身がその空間のコントロール主体であることを見出すことになる。

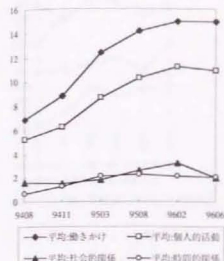


図3-14 各側面の持込物一人当たり点数推移

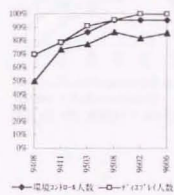


図3-15 「空間的働きかけ」持ち込み人数割合

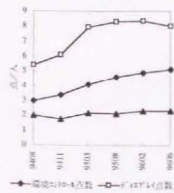


図3-16 「空間的働きかけ」一人当たり点数

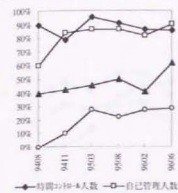


図3-17 「個人的活動」持ち込み人数割合

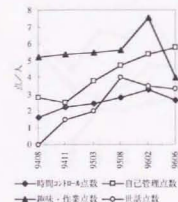


図3-18 「個人的活動」一人当たり点数

II. 個人的活動 (図3-17, 18)

居室空間というプライベートな空間の中で自分を管理し、他者に気兼ねなく行動したり自分らしい活動をするための環境形成である。

時間のコントロールに関わる物は、初期の段階から割程度の入居者が持ち込んでいる。居室空間に飲食物が持ち込まれたり、テレビやラジオなどが持ち込まれることで、自分の好きな時間にちょっとした欲求を満たすことができる。それは自分で自分の時間がコントロールできることであり、居室における生活の主体が自分であることが確認される。

自己管理に関する物も9割程度の入居者が持ち込んでおり、持ち込み点数もかなり増加している。自分の服の洗濯、化粧や身繕いあるいは外出の支度など、自分でできることを自分で管理する機会が増えていることであり、責任のある自立した主体としての自分が見いだされる。

趣味・作業については、入居者割合はほぼ3割前後で一定しており、特定の入居者に限られているようであるが、その人たちの中では持ち込み点数がかなり高い値を示すようになってきた。趣味・活動に携わる場としての居室が次第に充実しているのである。居室内で他者を意識せずに自分なりの趣味や活動を行うことによって、自己という一人称と向き合い、今確かにこのような活動をしている自分が確認できる空間となる。96年6月では、人数は増加しているが持ち込み数は激減している。これが部屋替えの影響を受けたためかどうかは定かではない。

動植物を持ち込み世話をしている人も、少ないながらも次第に増えている。入居者が世話をされるだけの存在ではなく、世話する側として関わる機会を提供する。

これらの個人的活動によって、居室が自分の活動をする場所として認識されると同時に、自立した活動の主体としての自分を見出す。

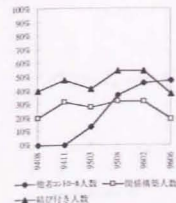


図3-19 「社会的関係」持ち込み人数割合

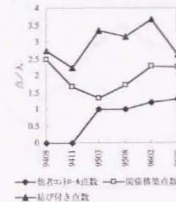


図3-20 「社会的関係」一人当たり点数

III. 社会的関係性 (図3-19, 20)

居室における他者との関係を入居者自ら選択し、関係をコントロールしたり、あるいはディスプレイすることによって、社会的なつながりを保つための環境形成である。

他者の侵入や視線をコントロールする物は、一人当たり持ち込み点数はさほど高い値を示さないが、入居者割合は顕著に増加しており、94年11月まで0だったものが96年6月の時点では半数以上の人に見られるようになる。これは居室における他者に対する意識が変化していることを表し、自分の空間のプライバシーを守るべく、不特定の他者から覗かれたり他者の勝手な侵入を阻むような工夫がなされている。

特定の人の訪問を想定した持ち込みを行う入居者は3割強でほとんど変わっておらず、招く招かれるという関係を持つ入居者は限定されている。その場合、居室が自分の空間であるという意識の高まりと平行して、特定の他者に対しては居室が「訪問する・される」場であるといった感覚が強くなり、訪問者に対して恥ずかしくないように掃除をしたり飾り付けをする、また訪問者に対する応対のためのセッティングや道具が持ち込まれるようになる。居室が不特定の人を排除し、特定の人と二人称としての付き合いがなされる空間として認識される。

家族や友人からの贈り物や写真など、親しい人との結び付きを示す持ち込みは96年2月の時点まではやや増加傾向で、入居者の6割近くとなった。自分をとりまく人々との結びつきを示す物が持ち込まれることによって、居室にいながらそのような人々と結びついている自分、社会的関係性の中に位置づけられた自分を確認することができる。

社会的関係を示す物のうち、他者コントロール以外の、他者との関係構築および社会的結び付きに関する物は、部屋替え以降人数割合が減少している。必ずしも部屋替えが原因であるとは言えないが、環境が大きく変わったことにより、人間関係などにも影響を与えることは考えられる。



図 3-21 「時間的関係」 ち込み人数割合

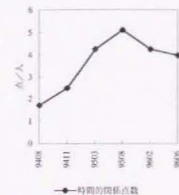


図 3-22 「時間的関係」 一人当たり点数

IV. 時間的関係性 (図 3-21、22)

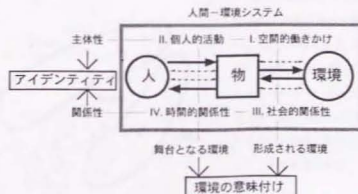
過去とのつながりを示す物の持ち込みは、5割程度で一定しており、およそ半数の入居者が過去とのつながりを居室に持ち込んでいる。一人当たりの持ち込み点数は増加傾向を示している。昔から使っている家具や思い出深い物など過去との結びつきを示す物が持ち込まれることによって、以前の生活との連続性が保たれ、環境の変化に伴うギャップをそれほど受けずに新環境の中で生活が続けていくことができる。と同時に、思い出を呼び起こすことにより過去との関係性の中で自分を位置づけ、現在の自分とのすりあわせの中で自己を確認するという心理的な側面にも大きな役割を果たす。また、孫や曾孫の写真など、次世代とのつながりを示す物によって、自分だけで終わらない未来の時間との連続性の中に自分を位置づけることができる。

4) 物を媒介とした個人的領域形成

物を媒介とした居室における個人的領域形成の過程をモデル的に表すことを試みる。人は物を通して物理的・社会的環境に働きかけ、また環境から物を通して(あるいは直接)フィードバックされるというサイクルによって、その人にとって意味のある環境が形成されていく。このモデルにI-IVの側面を位置づけると、図3-23のようになる。この図から、環境および自己の意味の二重性が浮かび上がる。

環境は、I空間的働きかけとIII社会的関係性のサイクルによって人と相互にかわり合いながら形成されていくという側面と、人のII個人的活動とIV時間的関係性のサイクルの行われる舞台として働くという側面とによって、二重に意味付けされる。一方自己は、I空間的働きかけとII個人的活動によって働きかける主体としての自分を見出すとともに、III社会的関係性とIV時間的関係性によって社会的・時間的つながりの中に関係づけられる自分を見出すという側面があり、自己はこの「主体性」「関係性」の二重性によってアイデンティティを確立することができる。

これらの側面は切り離されたものとして存在するわけではなく、同時に起こりながら互いに強化していく関係にあり、このとき、人と環境とは物を媒介としつつ一つのシステムを形成していると言える。個人的領域形成の過程とは、人と環境とがそのような分ちがたいシステムとなり、個人によって環境が意味付けられ、同時に個人のアイデンティティが確立されることによって、空間が自分自身の安定した身の置き所となる過程を示す。この過程においては、物を介した環境への働きかけとそのフィードバックが不可欠であり、それを可能にするという意味で、個室の果たす役割は大きい。



(図3-23) 居室の個人的領域形成モデル

4. 居室の領域形成過程の事例

1) 環境形成のバリエーション

前節で述べたように、I.空間的働きかけとII.個人的活動とは、自ら環境に働きかける主体としての自分を見出す過程に関する物であり、これに対しIII.社会的関係性とIV.時間的関係性とは、社会的・時間的つながりの中に関係づけられる自分を見出す過程に関する物と言える。そこでIとIIとをまとめて「主体性」、IIIとIV.とをまとめて「関係性」とする。「主体性」「関係性」それぞれに関わる物の点数をそれぞれ横軸・縦軸にとり、対象とした22とは人の入居者の各居室を調査時期ごとに位置付けた(図3-24~28)。ここから、各入居者の全体の中で位置づけと、変化の過程を見ることができる。

96年2月時点の居室の様子をもとに、入居者による居室の環境形成を4タイプに類型化した。1.主体型、2.関係型、3.中間型、4.プログラム型、である。主体型は、空間に対して主体的に働きかけるとともに、居室での個人的な活動が積極的に行われているグループである。関係型は、居室で活動を行うわけではないが、社会的結び付きや過去の思い出などを多く持ち込んでいるグループである。プログラム型は、持ち込み物による居室の環境形成があまり積極的になされずprogram物が相対的に多くを占めるグループであり、中間型は全体の中間的な位置付けである。

これらの類型は数量的に厳密な意味を持つものではない。入居者が居室に物を持ち込むという形で環境に対して働きかけた結果、居室において居室環境をどのように意味づけているのかということについて、人による違いを大づかみに表そうとしたものである。必ずしも持ち込み物の数量的な多少が環境に対しての働きかけの程度を直接表しているとは言えない。しかし少なくとも、はじめに何もない空間に対して次第に物を持ち込んでいく過程において、どのような物が持ち込まれるようになってきたかということは、居室における人間-環境の関わり方と密接に関係している。おり、プライベート空間における自己確認のしかたを表す指標となりうるものと思われる。

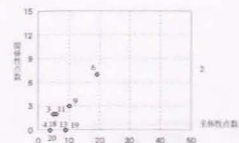


図3-24) 94年8月

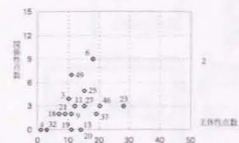


図3-25) 94年11月

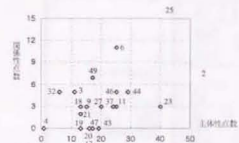


図3-26) 95年3月

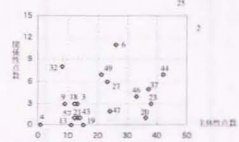
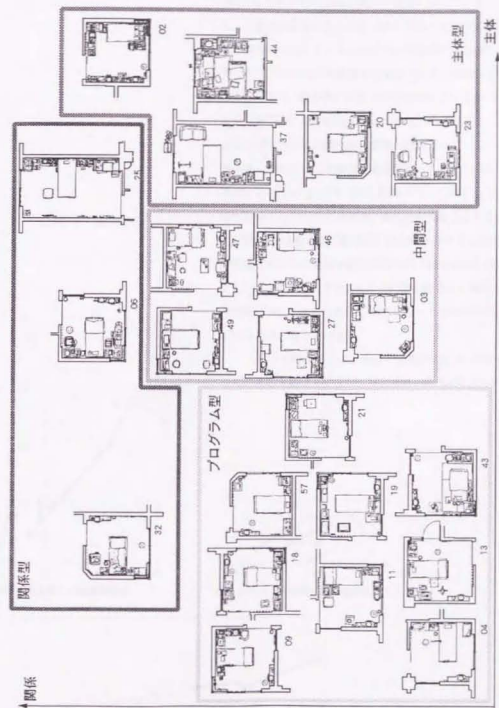


図3-27) 95年8月



図3-28) 96年2月



(図3-29) 96年2月時点での居室の環境形成のタイプ

2) 環境形成タイプの時間的变化

プログラム型以外の3タイプごとに、各居室のこの2軸上での変化を追ってみたものが図3-30～32である。関係型と主体型が、それぞれ対照的な変化の過程を示していることがわかる。主体型は関係性を示す物があまり増えずに主体性に関わる物が急激に増加しているのに対し、関係型では主体性に関わる物に比べて相対的に関係性を示す物が大きく増加しているのである。つまり、最終的にどちらの型を示しているかは大きく差が見られるが、最初の時点ではそれほどの差はなく、入居後の生活の中で次第に特徴のある環境が形成されていったことを意味する。中間型は、主体型・関係型のどちらとも決めかねるものを、あるいは主体性・関係性のバランスのとれたものをグルーピングしたものであるが、変化の過程を見るとその動きに「主体型」的な動きと「関係型」的な動きがあることがわかる。中間型にはさらに複雑な動きが見られ、No.49ははじめはどちらかといえば関係型寄りであるがその後の動きは主体型的であり、対照的にNo.47ははじめは主体型であったものがその後の動きが関係型的になっている。

これらのグラフによる各入居者の位置づけや変化のプロセスの特徴を踏まえた上で、次に具体的な事例について考察を

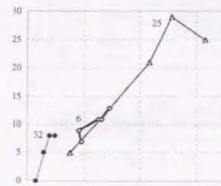


図 3-30 「関係型」の時間的变化

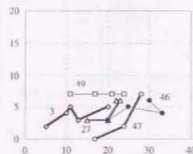


図 3-31 「中間型」の時間的变化

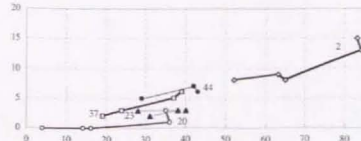


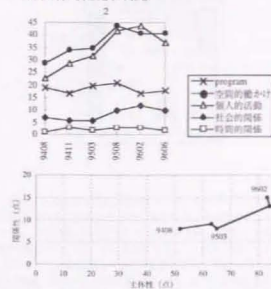
図 3-32 「主体型」の時間的变化

行う。

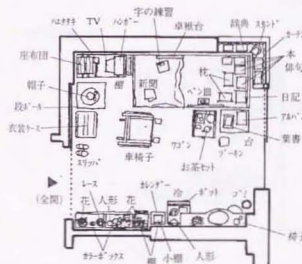
事例1 (No. 02)

- ・属性 81歳女性
- 3) 具体的環境形成 主体型
- ・ADL B
- ・痴呆 1
- (車椅子)

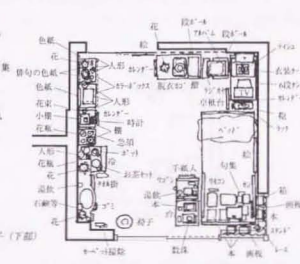
家具・物の持ち込みの推移



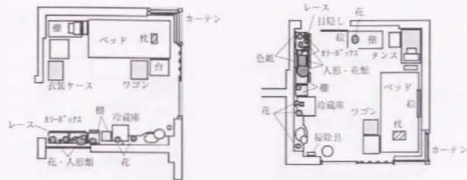
94年8月 (W06)



96年2月 (E08)

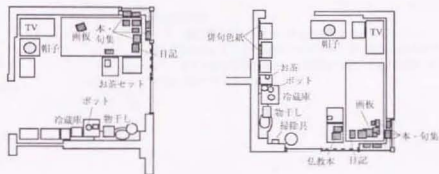


空間的働きかけ

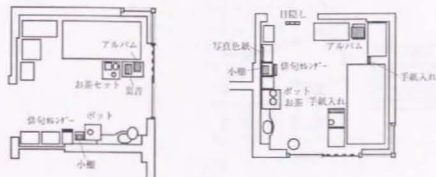


様々な取柄を持ち込み、窓にはカーテンをつけ、また居室の掃除もリハビリがてらにするなど、居室の環境をかなり自分でコントロールしている。入り口際には自分で多くの人形や色紙、花束などで飾り付け、自分の部屋のオリジナリティを出すとともに、他人に対してディスプレイとなっている。これらの人形や色紙は次第に増加しているばかりでなく、季節に合わせて人形を置いてみたり、俳句の色紙を替えてみたりと、空間への積極的な働きかけであるとともに、社会とのリアルタイムなつながりを意識している。家具の配置も自分で決めており、ベッドを隅に寄せ、ベッドサイドに床頭台とワゴンを並べて置く、カラーボックス類はディスプレイにも役立つような入り口脇に置くなど、自分の生活スタイルに合わせたセッティングを工夫している。

個人的活動



TV・ラジオ・冷蔵庫・ボット・お茶のセット等が持ち込まれ、居室の機能が高められている。施設スケジュールとは別に自分の好きなときにお茶を飲んだり、好きなテレビを見たり(実際にはあまり見ないと言うが)できるようになっている。部屋の掃除や自分の好きなお茶を入れることなど、自分でできることは自分でやっている。外出のための帽子も子供用に用意してもらった。これらのコントロールの段階を越え、もっと積極的に関わっているのが、趣味の俳句活動である。俳句は単なる楽しみを越え自分が生きている証としての活動であり、なるべく多くの時間を俳句に費やそうとしている。枕元には俳句関係の本や雑誌、句集などが並び、俳句をすぐに書き留めるためのノートや画板、筆記用具なども揃えており、ベッド上が俳句の活動場所を形成している。自分で作った俳句の色紙にしてもって飾ってあり、今、活動している自分を確認できるものとなっている。俳句を投稿して掲載された雑誌などは、まさに自分が活動し、しかもそれが社会に認められたという証として、自己存在の確認となっている。

社会的関係性
時間的關係性

社会的関係性

入り口の窓には目隠し布が貼られるようになり、自分自身の居場所としての居室が他者の視線に侵入されることを防ごうとしている。居室には人の出入りがあり、外部からは家族の他、俳句関係の先生や友人など、また施設内の友人にも時折訪問される。それらの人にお茶を入れたり、冷蔵庫の中身でもてなすこともある。また、入り口の飾り付けはそういった他人の目をも意識したものともなっている。

俳句関係の色紙や道具などは、自分が施設だけに閉じこもっておらず、外部の俳句の人たちとのつながりがあることを示すものもなっている。俳句の先生にもらったカレンダーも飾ってある。ワゴンの上に掛かっているのは、娘のつくってくれた手紙入れであり、そこには家族からの手紙などが取られており、家族とのつながりを確認できるものとなっている。

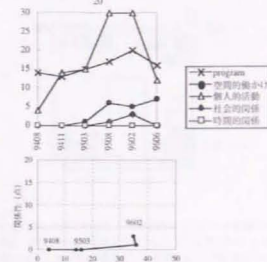
時間的關係性

家具類は昔から使っているものというよりもここに入ってから買ったものがほとんどで、過去とのつながりを示すものはあまり見られない。そんな中で2冊のアルバムは過去の思い出を呼び起こすものとなっているのかもしれない。

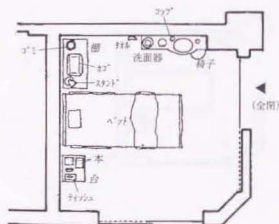
事例2 (No.20)

- ・属性 75歳女性
- ・環境形成 主体型
- ・ADL A
- ・痴呆 2

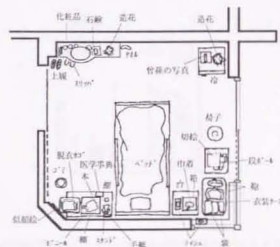
家具・物の持ち込みの推移



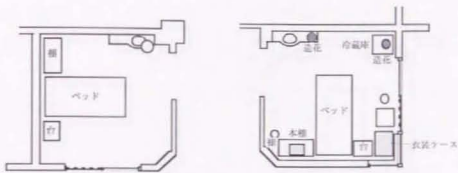
94年8月 (W16)



96年2月 (E14)

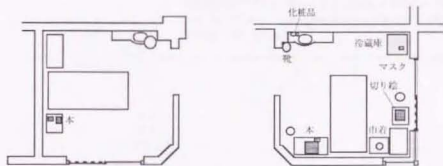


空間的働きかけ

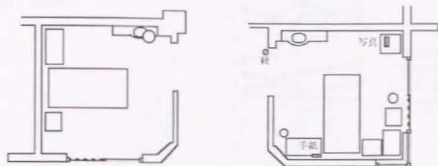


自宅が近くに残っており、いつかは帰りたいという意識があるためか、居室へ自宅から家具を持ち込むということは見られない。期間とともに物が増えてきたため、衣装ケースを持ち込んだ後、鞆目から小さい本棚をもらい増えてきた本を整理できるようになった。冷蔵庫も持ち込まれ居室の機能を高めたり、花や造花などで飾り付けもするようになり、自分の空間としての意識が高まっていると思われる。

個人的活動



冷蔵庫が持ち込まれ、その中に自分の好きな物や体にもいいものを入れておいたり、それを食事の時にもっていったりと、自己管理に役立っている。また周りの人から風邪などをうつされないようにマスクをしたり、健康医学に関する本を持ち込んだりするなど、自己の管理という意識が高くなってきている。本を読むのが趣味のため家族らに持ってきてもらった本が増え、職員にももらった本棚に整理して置かれている。(はじめはかなり乱雑に置いてあったが、次第に整理して置かれるようになった。) 自分のよく読む本を手前に置くなど、意味付けもなされている。最近始めたきり絵とその道具が味に置かれ、居室での新たな活動となっている。床頭台の引き出しにはノートがあり、毎日日記代わりに俳句を作って書き留めている。自分と向き合う機会を増え、活動している自分を確認できる物となっている。

社会的関係性
時間的關係性

社会的関係性

商業の人で、他人の部屋に入ってイタズラする人がいるという話を聞いて、自分の部屋に入ってこれないように、外に出るときは扉を締めて閉めないようにする。訪問者は家族の他にも地域の友達がよく来てくれる。せっかくなってきたのにお茶の準備もできないことを残念に思っている。冷蔵庫の上に曾孫の写真が置かれるようになり、家族とのつながりを思い起こさせる物となっている。

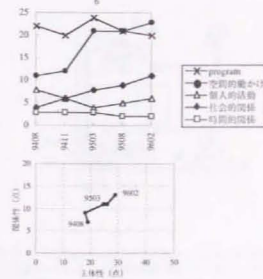
時間的關係性

いつか自宅に帰りたいという意識の表れか、これまでの生活との連続性を示すような入居したときに自宅から持ち込んだ物はほとんどない。ベッドのカバーは自宅から持ち込んだ物であり、数少ない過去とのつながり示す物である。

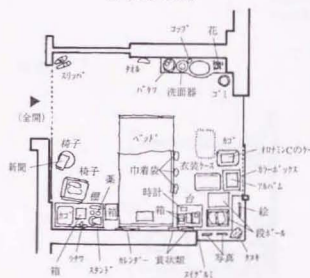
事例3 (No.06)

- ・属性 86歳女性
- ・環境形成 関係型
- ・ADL A
- ・痴呆 2

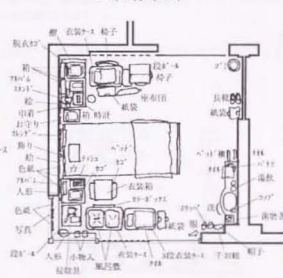
家具・物の持ち込みの推移



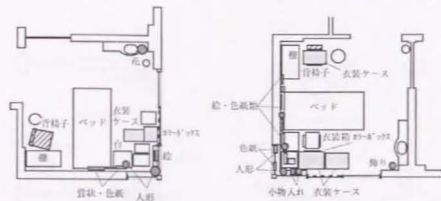
94年8月 (W07)



96年2月 (E09)

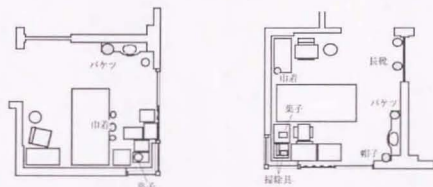


空間的働きかけ



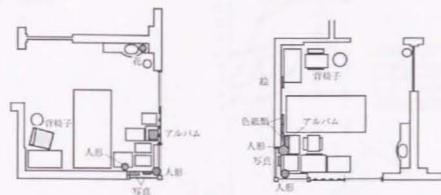
段ボールや風呂敷包みそのまま出しているものも多いが、カラーボックスや衣装ケースなど、収納関係の家具が増えている。ベッドの枕元には以前の特集の時にもらった色紙や賞状、アルバムなどを飾り付けたり、友達にもらった花、家から持ってきた狸の人形などを置き、居室が自分のスペースということを表示している。これらの飾り付けは、時間を流うごとに増加しており、自分の居場所らしさを強めている。部屋には施設の丸椅子の他、背の着いた椅子を施設から借りており、訪問者が来たときに座る椅子となっている。

個人的活動



枕元に近いところに菓子箱がいくつも置かれており、施設のスケジュールとは別に自分の好きなときにちよっと食べられるようになっている。自分の服の洗濯は、自分の石鹸を使って自分でしており、列の手すりに干している。洗濯用具一式もバケツに入れたまま机に置いておくことが多い。居室での趣味・活動などは特にない。

社会的関係性
時間的關係性



社会的関係性

近くに住んでいる親や友達がよく訪問する。施設から借りた椅子はその向の応対用として、訪問者が来たときに座る。以前の特養にいたときにもらったアルバムや賞状、色紙などを枕元に飾り付けてある。その当時、施設の中で自分が一員として認められていたことを表示している物であろう。友人の持ってきてくれた花や人形なども飾っており、自分の社会的つながりを表している。

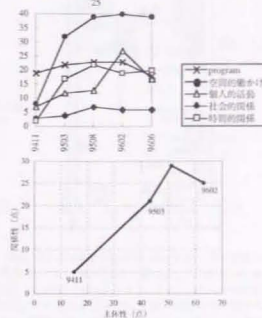
時間的關係性

親の人形は自宅にいたときから持っていた物で、過去の思い出あるいは連続性を示す物となっている。窓際に飾られた写真は若いときに亡くなった息子の写真である。

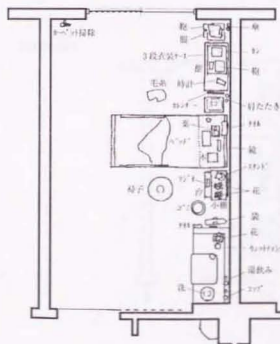
事例4 (No. 25)

- ・属性 85歳女性
- ・環境形成 関係型
- ・ADL A
- ・痴呆 1

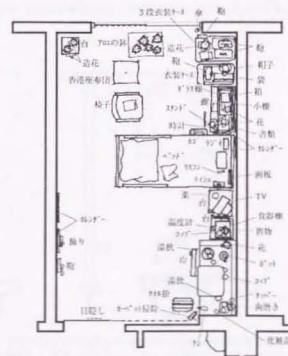
家具・物の持ち込みの推移



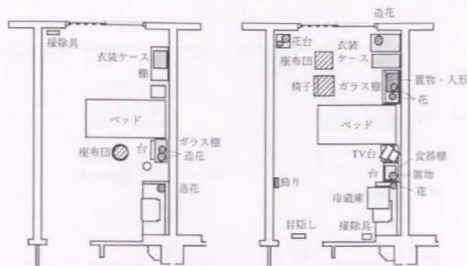
94年11月 (E26)



96年2月 (E26)

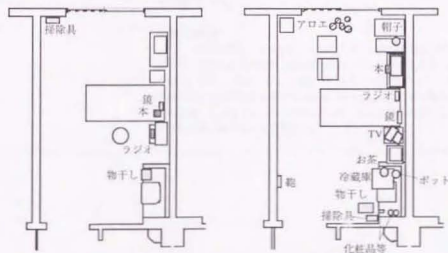


空間的働きかけ

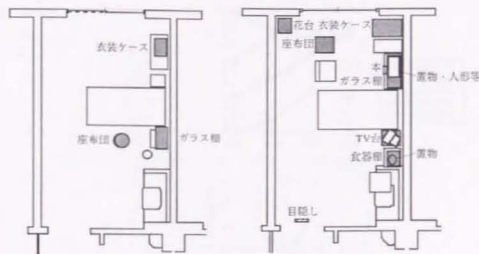


入居後、隣の人の部屋で使っているのを見て、同じ衣装ケースとガラス棚を買ってきた。その後さらに買い足したほか、昔から使っている食器棚や台を自宅から持ち込むようになった。部屋の模様は自分で掃除機を買って行い、また入り口の窓に目隠しを貼って外の明かりを防ぐなど、居室の環境のコントロールを行っている。ディスプレイも、はじめは造花が飾られている程度であったが、自宅からこれまでにいろいろな人からもらった置物などや人形などを持ってきて、ガラス棚に飾っている。これまでに何度かいったことのある香港や他の国の置物が目立つところに置かれ、部屋のオリジナリティを高めている。椅子に座る生活のため、抱っこ丸椅子に加え、背の着いた椅子を持ち込んでいる。

個人的活動



TV・ラジオを持ち込んで、自分の好きな時間に好きな番組を見ることが出来る。置物も持ち込まれ、ちょっと食べたい要求を満たすことができる。新聞は自分で取っており、他人に気兼ねなく好きなときに読むことができる。洗濯・掃除などは自分でできることはなるべく自分でしようとしている。電気の漏洩がしごットを持ち込んで、自分のお茶は自分で好きなものを入れて飲めるようになっている。部屋ではちょっと本を読んだり棚入れをしたりしていたが、最近では特にしていない。自宅からアロエの鉢を持ち込んできて、毎日世話しながらアロエの成長を眺めている。

社会的関係性
時間的關係性

社会的関係性

入り口の窓には、痴笑の人などに覗かれるのがいやなので、目隠しをつけた。窓の上には視線を防ぐのではなく、外からの光をコントロールするためにつけてある。子供はちよちよく塵を出す。施設内の友達も、染でも染るところがないので、相手の部屋に行つて話さずかきかきが多い。また掃除のおばさんの目を気にして、見られても恥ずかしくないように部屋の中をきちんと拭いておく。早い時期に持ち込んでいた衣装ケースとガラス棚は、隣の人が使っているのを見てお揃いで買ったもの。手作りのごみ箱も、隣の人の作ったものを見てお揃いでお揃いのメモはさみを使っていたりと、二人の結び付きを示すものがいくつも見受けられる。

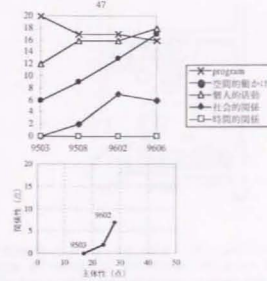
時間的關係性

娘が香港にしばらく行っていたため、10回は香港に行き、その時に持ってきた家具や置物、座布団などが、これまでの生活との連続性を保つと同時に、香港に行って来たという思い出を呼び起こし、またその時の娘との関係性をも示すものとなっている。ガラス棚に飾られた多くの置物や人形などは、思い出の品として、これまでの経緯や人とのつながりを呼び起こすことに役立つ。

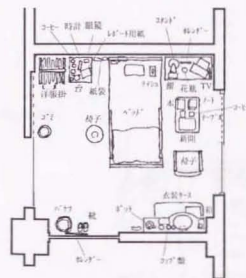
事例5 (No. 47)

- ・属性 71歳男性
- ・環境形成 中間型
- ・ADL C
- ・痴呆 2

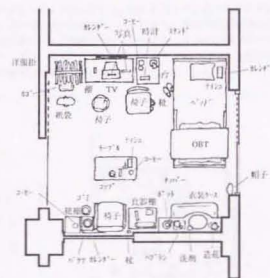
家具・物の持ち込みの推移



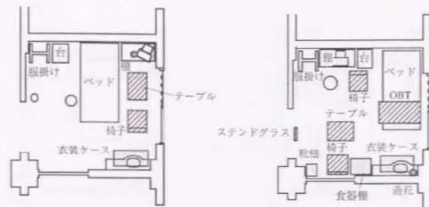
95年3月 (E12)



96年2月 (E12)

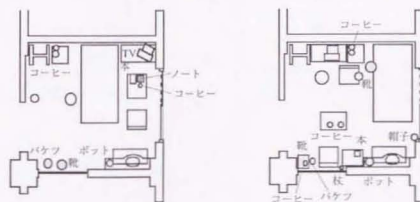


空間的働きかけ

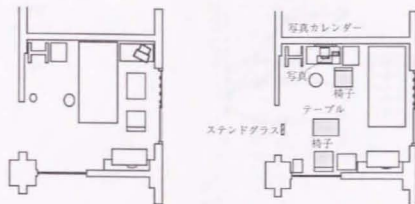


靴が結構あり、洋服掛けの他、衣装ケースを一つ持ち込んでいた。その後、靴をいれる箱と食器棚を子供が買って持ち込んだ。部屋の飾り付けもはじめはほとんどされていなかったが、(これもおそらく子供の人形や造花などを持ち込んだり、また窓にスタンドグラスシーンを貼り、外からの視線のコントロールとともに居室内外に対するディスプレイともなっている。自分のスタイルに合わせたセッティングがかなり積極的になされており、(部屋がもともと洋間なこともあり)テーブルと椅子を持ち込んだ洋間セッティングとし、部屋の中もスリッパのまま入りにしている。はじめ真ん中にあったベッドを端に寄せ、入り口に逆い方にテーブルを配置し、接客可能な環境を実現している。またベッドの手すりにちょうど合うようなOBT(オーバーベッドテーブル)を知り合いに作らせて作業用のスペースを確保するなど、環境を積極的に自分に合わせて手を加えている。

個人的活動



TVは共用空間で皆と一緒に見るようなことはせず、はじめから持ち込んだTVを自室で見る。コーヒーが好きなので、湯沸かしポットとコーヒー、カップなどを持ち込んで、自分で入れて飲んでいる。毎日リハビリで建物の外周を、自分でノルマを決めて何周も回っている。そのため靴は何足も買い、新しく持ち込んだ靴箱に置いてある。また、杖も数とよみの必需品であり、今使っている杖に加え、これまでに使っていてかなり短くなってしまった杖も、自分の活動の記録として置いてある。

社会的関係性
時間的關係性

社会的関係

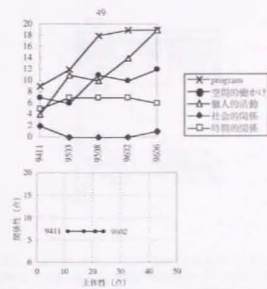
入り口の窓には、スタンドグラスのシールを貼り、部屋の中が直接はのぞき込めないが、完全には遮断されないような居室内外の関係を作り出している。はじめテーブルと椅子はベッドの奥に置かれていたが、レイアウトを変更して手前側に置かれるようになり、もう一組の椅子を持ち込んで、訪問者を呼び込んで応対できるセッティングとした。それに伴い、それまでは家族が来ては食堂などの共用空間であったものを、ダイサービスで来る地域の友人たちなども部屋に呼び込むようになった。

入居当初は家族との関係を示すようなものは特に置かれていなかったが、家族で撮った写真や孫の写真で作ったカレンダーなどが飾られるようになった。家族とのつながりが確認でき、将来につながる時間の中で自分を位置づけることができる。

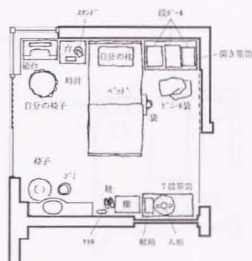
事例5 (No. 49)

- ・属性 71歳女性
- ・環境形成 中間型
- ・ADL A
- ・痴呆 1

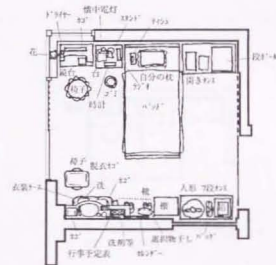
家具・物の持ち込みの推移



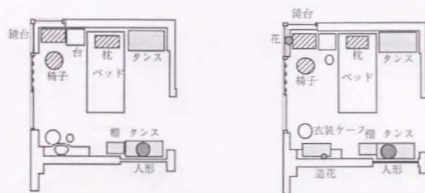
94年11月 (E06)



96年2月 (E06)

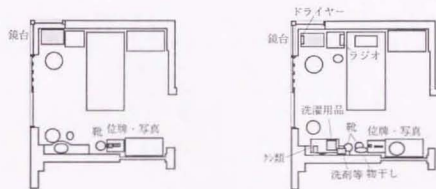


空間的働きかけ



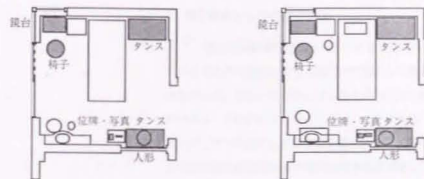
自宅から使い慣れたタンス2本と箱を持ち込んでいる。その他、自分で衣装ケースを買い足した。部屋の掃除や片づけは自分でしている。昔から持っているフランス人形がタンスの上に置かれ、自分の空間のディスプレイになっている。それ以外には特に飾られるものはなかったが、その後施設の生活に慣れて来るに使い、意図に花が置かれるようになった。セッティングに関して、椅子も施設の丸椅子では駄目で、使い慣れた椅子を持ち込んで使っている。

個人的活動



自分の部屋にすることが少ないためか、TVや飲食物など、部屋でちょっと何か要求を満たすようなものはほとんど置かれていない。鏡台やドライヤーなどが持ち込まれ、自分の身繕いが自分でできるところ。洗濯や掃除も自分でしているが、これについては他の人の部屋の掃除や物の洗濯もしており、自己管理を越えた、施設の中で自分の役割となっている。それはお乾き箱、お掃除箱など。

社会的関係性
時間的關係性



時間的關係性

今まで使っていたダンス2本、球入りの時の観台、座り慣れた椅子、昔から持っている人形など使い慣れた家具や思い出深いものが持ち込まれ、これまでの生活との連続性を保った環境が形成され、部屋にいることは少ないもの自分らしい落ちついた空間と感じられるようになった。小さいときに亡くなった子供の写真と位牌を持ち込んで仕度代わりに棚に並べ、お供えなどしている。

5. まとめ

1) 相互作用としての環境形成

個室型特別養護老人ホームへの新入居者は、入居後ただちに与えられた個室をすぐに自己の空間として意識するわけではなかった。生活の中で少しずつ物を持ち込み、空間をコントロールし、それが自分にフィードバックされるという過程を経て、少しずつ自家としての意識を高めていく。持ち込まれたそれぞれの物には自分なりの意味付けが与えられ、それがさらに自分にフィードバックされることで、他ならぬ自分の空間として認識されていく。そのような相互作用的なプロセスの中で、次第に自分の生活スタイルを反映した環境が形成されていく。

2) 個室の役割

個室は単に個人のプライバシーを守り一人になれることに意義があるのではない。Westin (1970) や Rapport (1977) の定義にも見られるように、プライバシー自体も「引きこもり (withdrawal)」の視点だけからは捉えられず、他者との相互作用および、空間に対するコントロールという視点から捉えていく必要がある。調査結果から見えてきたように、個室があることによって、その空間をコントロールすることや自分自身を管理すること、他人に気兼ねなく自分らしい活動ができること、人間関係のあり方を自分で選択できるなど、自分が生活の主体となり、それを再確認できることに大きな意義があるとと言える。

同時に、個室における物や人との関わりを介して、自分をとりまく現在・過去・未来のさまざまな関係の中に自己を定位できることも重要である。持ち込まれた物を媒介として、現在の社会的関係を構築し、自他に対して社会的なつながりを表示し、社会的関係の中に自己を定位できること。過去の生活との連続性を保ち、これまで長い期間かけて作り上げてきた自分との一貫性の中に自己を定位できること。自分の次世代に託した未来への連続性の中に自己を定位できること。Erikson (1986) は、老年期のアイデンティティの感覚について、「これまでの人生の道筋にそって行ってきた過去の選択を承認し受け入れること」という現在と過去との統合、および「これまで長い人生において自分だった自己の感覚と、これから老年期において自分とな

〈表3-5〉 プライバシーの定義

Rapport によるプライバシーの定義 「相互作用をコントロールし、それを選択して、希望する交流を得ることのできる能力」
Westin によるプライバシーの定義 「個人・グループまたは組織が、自己に関する情報を、いつ、どのように、またどの程度、他人に伝えるかを自ら決定できる権利」

るかもしれない自己の、絶えず新しく変化する感覚とを、融和]させるという現在と未来との統合の重要性を述べている。

3) 個人的領域の形成

居室における個人的領域の形成過程とは、人が物を媒介として環境に対して働きかけることから、居室環境が意味付けされるとともに自己アイデンティティが「主体性」「関係性」の両面から確立される、この相互作用の循環プロセスによって、その空間が自分の居場所として安定した環境が獲得される過程である。

人が普通に自宅に生活しているとき、人と環境の間には長い時間をかけて生活の中で形成された安定した関係が出来上がっている。その人間-環境の関係が安定しているときには、環境自体はほとんど意識されないものであり(Lawton, 1973)、その状態こそ人が環境に適応している状態であると言えるだろう。しかし、そこからまったく新しい環境の中に移行する(させられる)ことによって、人と環境との安定した関係は壊れ、そのギャップが大きく意識されるようになる。そのギャップが大きいほど、そこから新しい人と環境との関係を再構築するプロセスもまた、意識され、目に見える形で行われることになる。つまり、人が自ら環境に対して意識的に働きかけ、目に見える形でフィードバックされるというサイクルが重要なのである。これは個人にとって固有のプロセスであり、自らコントロールしうる環境によってようやく支えられるものである。個室であることの重要性は、そのような個人的領域形成の過程を支えることにあると言えるだろう。

4) 施設全体の広がりへ

生活は居室だけで完結するものではなく、施設全体に広がっている。居室環境も施設全体の生活の中で位置づけてみるのが重要であろう。居室を拠点としつつも施設全体空間の中で、入居者が生活主体として安定した環境をどのように獲得していくかという視点から、施設全体の個人的領域形成に注目していく必要がある。

第4章 場の形成

施設全体空間における行動の広がり

1. 施設空間の個人的領域形成
2. 施設空間のゾーニング
3. 場所における入居者の行動
4. 施設に展開する場
5. 個人の形成する場
6. まとめ

第4章 場の形成

—施設全体空間における行動の広がり

1. 施設空間の個人的領域形成

個室化による問題点として言われることの一つに、各人が安心感のいい個室を持つが故に個室に閉じこもりがちになり、また入居者同士のコミュニケーションの機会が減少するのではないか、ということがある。実際に個室化されている養老老人ホームにおいて、入居者はやはり部屋に閉じこもりがちになり、共用空間はほとんど利用されずに閑散としていることが報告されている。しかしこのことは個室化自体の問題と言えるのだろうか。結論から言って、それは必ずしも正しくない。共用空間が利用されるかどうかということは、個室の外側に広がる共用空間における物理的・社会的環境の質が大きく影響を与えている。

このことは、個室化を考えたときに個室のみを対象として見るだけでは不十分であることを意味する。普通の人がちみ中々で過ごすときのことを考えれば、たとえ快適な自宅があるからといって決して自宅だけに留まって生活しているわけではない。それと同様に、個室という拠点を得た上で、その外側のさまざまな空間に行動をどう広げていき、自分の認知した空間としてどのように領域化していくかを考える必要がある。とくに、入居者自身の心身の状況や、施設側からの管理上の規制によって、生活が施設空間内に完結せざるを得ないことの多い特養では、施設空間の質の重要性はますます高いものと考えざるを得ない。

そこで、施設空間における入居者の生活の質を見る上で、施設空間の個人的領域形成という視点を導入する。

個室における個人的領域形成は、物を媒介として直接空間と応対し、自分自身と環境との関わりを反映した物理的環境を形成していくことを通して領域化されるという、個別的・直接的な過程であった。

これに対して、施設全体空間における個人的領域形成は、空間のさまざまな場所を利用するという形で行われる。直接環境に対して働きかけ、自分に合わせて物理的に変化させるということはないが、自分で場所を選択し、場所の使い方やそ

の場所における人との関わりなどを通して、場所の意味や価値を自分なりに構築していくことで、安定した生活環境を作り上げていく過程として捉える。ここでは施設内のさまざまな場所で、何をするか・誰といるか・どのように居るか、といったことに注目し、個々の入居者にとっての場所の意味を見いだしていくことが、この章での焦点となる。

2. 施設空間のゾーニング

1) 施設空間と領域

Sandra Howell (1984) は高齢者居住施設的生活空間において、「private zone」「semi-private zone」「semi-public zone」「public zone」の4段階を適用できることを見いだした。これはもともと Oscar Newman(1979) が住宅の外部空間の領域性を守りやすい空間という視点から記述するときに用いた概念であるが、Howellはそれを居住施設の内部空間に適用することによって、ヒエラルキーのある空間構造の重要性を明らかにしている。

その後、李京浩 (1994) や外山義ら (1995) によって、単に平面上のプランによるだけでなく、その場における相互の認知関係や空間に対するコントロール主体の要素を取り入れて定義し直された。ここではそれを用いて private~public の4段階に領域分けして分析を行い、領域ごとの意味を再構成する。

a. private zone

入居者個人の所有物を持ち込み管理する領域
入居者本人によってコントロールされる

b. semi-private zone

複数の入居者により自発的に利用される領域
そこを利用する複数入居者によってコントロールされる

c. semi-public zone

基本的に集団的かつ規律的行為が行われる領域
(プログラム空白時には個人の自発的行為も行われる)
養母らの施設スタッフによりコントロールされる

d. public zone

内部居住者と外部社会の双方に開かれた施設内領域
施設の管理スタッフによりコントロールされる

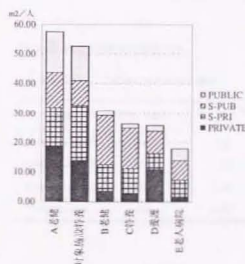
この領域分けによる各領域の面積は、private: 840m², semi-private: 1127m², semi-public: 506m², public: 698m² となる。これを他のいくつかの居住施設・長期療養施設と一人当たりの面積によって比較してみる。これを見てわかることは、この施設の特徴として、privateの面積的には多人部屋主体の施設(B老健、C特養、E老人病院)に比べれば当然広いものの、個室が確保されている他の施設(A老健、D養護)とはそれほど大きな差はなく、それよりもsemi-private空間の面積が断然大きいとい

(表4-1) S. Howellによる領域分けの定義

領域別	特徴者	活動
Private zone	居住者本人とその友人・家族	居住者によって支配される管理される領域。居住者管理される。居住者管理される。居住者管理される。居住者管理される。
Semi-Private zone	コアの居住者とその友人・家族	居住者によって共有される空間。居住者管理される。居住者管理される。居住者管理される。居住者管理される。
Semi-Public zone	施設内の居住者とその友人・家族	居住者管理される。居住者管理される。居住者管理される。居住者管理される。
Public zone	施設からの訪問者、観光客、近隣の住民	日常的に人の子供する空間。近隣の住民。近隣の住民。近隣の住民。

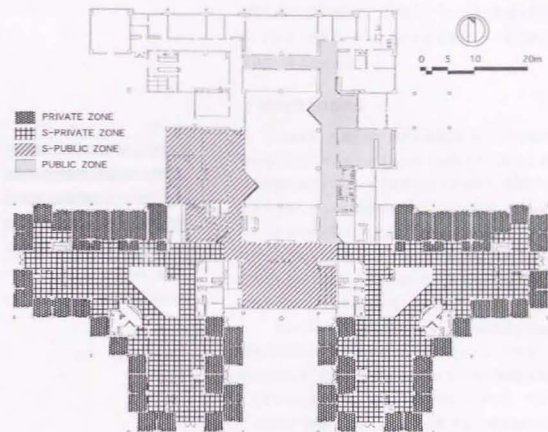
(表4-2) 外山らによる領域分けの再定義

領域別	定義	領域のController
Private zone	入居者個人の所有物を持ち込み管理する領域	入居者
Semi-Private zone	Private zoneの範囲において、複数の入居者により自発的に利用される領域	複数の入居者
Semi-Public zone	基本的に集団的かつ規律的行為が行われる領域(プログラム空白時には個人の自発的行為も行われる)	職員(養母)
Public zone	内部居住者と外部社会の双方に開かれた施設内領域	職員(管理スタッフ)および施設職員



(図4-1) 各種高齢者居住施設における領域ごとの一人当たり面積の比較

- A: B: 老人保健施設
- C: 特別養護老人ホーム
- D: 養護老人ホーム
- E: 老人病院



(図 4-2) 調査対象施設の領域分け

(表 4-3) 領域ごと面積と一人当たり面積

領域	面積 (m ²)	一人当たり面積 (m ²)
Private zone	841	14.01
Semi-Private zone	1127	18.78
Semi-Public zone	506	8.44
Public zone	698	11.64

(表 4-4) 調査対象施設の領域分けと対応する空間

領域	空間
private	居室
semi-private	居室前アルコーブ リハビリ空間、共用広間テーブル、 共用広間畳 廊下、電話コーナー
semi-public	食堂、食堂カウンター 浴室、浴室前の待合い
public	玄関、玄関前コーナー デイサービスセンター、 在宅介護支援センター 外部空間

うことである。それに対し、集団行動の場となる semi-public 空間は、他の施設とは同等か、かえって少なくなっている。すなわち、private・semi-private といった個人あるいは複数の入居者によってコントロールされるような、入居者主体の領域が広く確保されているのである。A 老健とともに public 面積が広いのは、デイサービスセンター・在宅介護支援センターなどが併設されていることによる。

2) 領域と滞在時間割合

図4-3は、各調査時における各領域における滞在時間割合の変化を示したものである。(9時～19時まで。ただし、東棟の入居者のみによるデータである。) これを見ると、時間の経過とともに決して private の滞在が増加してはおらず、どちらかという減少気味であり、これに対して semi-private 空間で過ごす時間が長くなっている。つまり全体的に見て個室に閉じこもって過ごすというよりも、その外側に広がる semi-private 空間に出てきて過ごす傾向が見られる。

図4-4～4-7には、各調査時における施設内のさまざまな場所の利用され方を頻度で示したものである。ここからも、共用広間や広間の周囲といった semi-private 空間の利用頻度が増加していることが分かる。施設の運営上のプログラム、つまり日々の食事や体操、遊園などによる行事が主に semi-public 空間で提供されることを考えると、semi-private の利用は各入居者の自発性によるところが大きい。入居者の日常生活の中で、private 空間だけではなく semi-private 空間もまた、そこに滞在して時間を過ごす場所として、その重要性を増しているのである。

そういった意味からも、居室という private から semi-private, semi-public, public へと外側に広がっていく連続した空間の中で、入居者の行動とそれに伴う交流の様子がどのように展開されているかを捉えることは、入居者にとっての施設空間の果たす役割を捉え、施設の空間計画に結びつけていく上で重要な課題と言える。

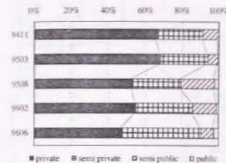


図4-3) 領域ごとの入居者滞在割合の推移

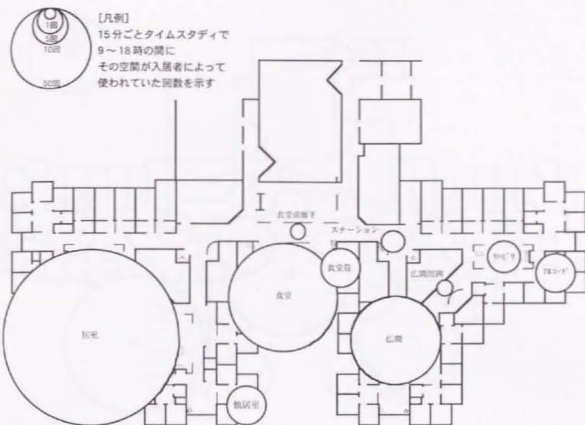


図4-4) 94年11月の空間の使われ方頻度

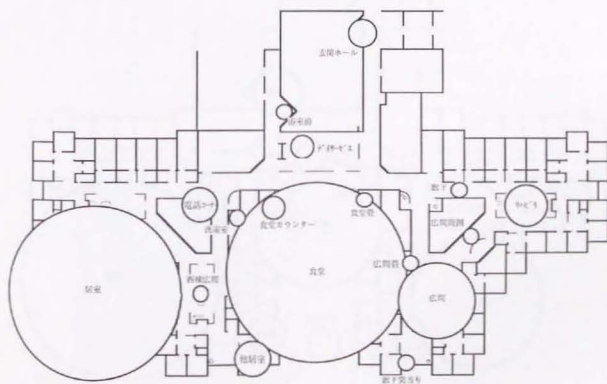
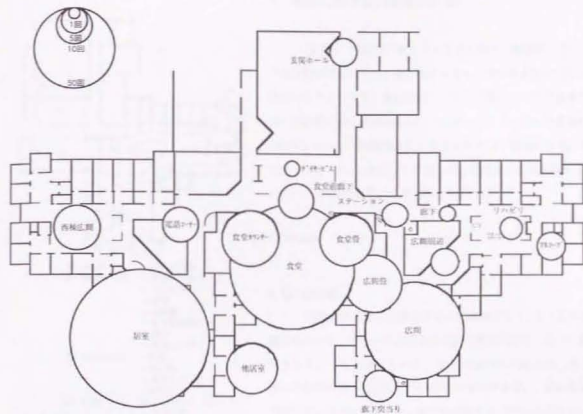
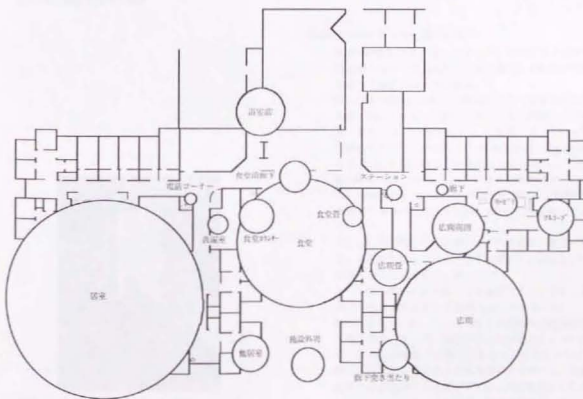


図4-5) 95年3月の空間の使われ方頻度



(図4-6) 95年8月の空間の使われ方強度



(図4-7) 96年2月の空間の使われ方強度

3. 場所における入居者の行動

まずは、施設内のさまざまな各空間で、具体的にどのような行動が行われたり、人と関わったりしているのかについて見ていくことにする。自室空間における行動については前章で持ち込み物を介して考察を行ったため、ここでは主に自室以外の空間について、観察調査およびインタビュー調査から得られたデータをもとに、場所ごとに見られる居住者の行動を捉える。(コメントの後の数字は入居者 No. を示す。)

1) private

a. 他人の部屋

居室空間はそこに居住する人の領域として、はっきり認識されている。仲のいい人同士の場合、部屋に遊びに行って話をすることが見られる。そうでない人場合は、気を使って訪問しない、訪問したいがなかなかできない、始めから訪問しないようにしている、などと訪問をばはられることが多い。

仲のいい人のところに遊びに行く

- ・俳句や宗教などお互いやっている人は「かなり限られた人だけであるが」、自室に招いたり相手の部屋を訪ねて話をすることがある。2
- ・はじめ隣の部屋にいた人は隣の村の人でときどき様子をみに行っていた。夜から入居してきた同姓の人と仲良くなり、「よくいらっしゃる。これ食べろっていつて何か持ってきてくれたり、こっちから行くこともある」とお互いに距離を行ったり来たりしている。3
- ・隣の部屋の人は自室にいたときから家が近かったので、昔から知っている。夜8時から7時まで、毎晩TVを見せてもらいに行っている。自分でTVを持っていないから。4
- ・もともと部屋の近くには家の近い人を集めており、仲良く4人組となっている。とくに隣の人はお互いの部屋を行ったり来たり。18
- ・とくに隣の部屋の目の悪い人は頼りしていて、お互いの部屋を行き来してお喋りしたりする。21
- ・隣の部屋の人は、ここに入居する以前の老健施設で一緒に仲良くなった。部屋を行ったり来たりしているが、こちらの部屋では来てもらえないところが多いので、向こうの部屋に行くことが多い。もう一人、老健施設で仲良かった人がいて、少し距離を見たりしている。たまに来ることもある。「90歳だけど、すごく若い。」25
- ・部屋の隣の人や、同姓の人は、同じ村の出身同士な



図4-B) 施設空間内の場所



〔写真4-1〕仲のいい人の所へ遊びに行く

ので仲がいい。「行ったり来たりしますよ。」57

他人の部屋には行かない

「4人で部屋に集まることはあまりなく、「みんな自分自分のTV見ているから、じゃまになるかなと思った。」18

「他の人の部屋には遊びに行くような付き合いはない。」

「はうすの中では友達はおらん。まだ大分出ない。」6

「入居者同士の交流としては、お互いの部屋を訪問するような密度の高い付き合いは全くない。」9

「他の入居者のところには遊びに行かない。」11

「他の部屋に行くことはあまりない。「新しく入ってきた人はいるけど、付き合ってる人もないから。」37

「同じ村じゃない人のところへはあまり行かない。」21

「時に仲良しはしません。仲良くしないようにしています。他の部屋に行ったり来たりすることはありませぬ。」43

「部屋の行き来をするような付き合いはしない。「個室になっているので、他の人の所を踏んで良いやら悪いやら。」「それが好きな人もいるが。お友達になるのは難しい。一人でぼさーとしたいものから、お茶のみが好きな人から。私はあまり親しくするのは好きでない。」46

「誰かの部屋に上がり込むようなことはほとんどない。」47

「あんまり他の人のところへ遊びに行くのは好きじゃないです。」49

2) semi-private

b. 居室前アルコーブ

2~4室のクラスターを形成する居間は、そこを共用する人たちの仲がいい場合、部屋への出入りに際しての一時的なコミュニケーションの行われる空間として機能している。semi-publicなどへ一緒に出かけていくときの待合わせたり、一緒に帰ってきて部屋に戻る前にちよつと立ち話したりする。また、居室の連続として、一人で何かの活動をすることもあり、より公的な空間に対しての緩衝地帯としても機能していると思われる。

共用する人たちのコミュニケーション

「部屋の近い人たちと仲良し4人組であり、食事の時や入浴の時など、互いに声を掛け合って一緒に行くことが多い。話しながら歩いてきて、居室の前で立ち話することもある。」4

「居室の戸を出たところで立ち話することも多い。」25

「部屋の隣同士の人と話す機会が多い。居室すぐ外のスペースで世間話をしたりする。」43



(写真 4-2) アルコーブで会話



(写真 4-3) アルコーブで会話

一人で作業する

- ・自分の部屋を出たところで立つ練習をしている。恥ずかしいから、誰も見ていないときにしている。孫や子はひっくり返ったら危ないから歩かんでもいいと言うが、1年半も経つと、歩きたくってしようがない。ときどき運動のときも使う。11
- ・居間の腰壁よりかかって広間を眺めていたり、雑誌を読んだりする。25



(写真 4-4) リハビリ器具で運動

c. リハビリ

リハビリ機器の置いてある空間では、誰も居ないときに一人で運動をしたり、また仲のいい入居者たちが皆の集まるオープンな場を避けて仲間だけで集まって話をすることがある。

一人で運動する

- ・一人でリハビリ器具のところで散歩などの運動もしている。27
- ・居室外の共用空間はリハビリ空間になっており、「道屈になったらリハビリのところで少し体操する。」18
- ・仲間が集まって話す。
- ・施設のパログラムで室で一緒にいるときの他、ベンチとかでちょっと話したりはする。仲良く4人組ではあるが、お互いに部屋を歩きまわってお喋りするということあまりしない。23
- ・居室外側の共用空間は、近くのリハビリ室の方ではときおりベンチに腰掛けて話をすることもある21
- ・部屋だけでなく「いつもあそこ（リハビリの椅子）で話すよ。あそこの方が腰掛けて喋りやすい。」18



(写真 4-5) 二人で玉交遊び

d. 広間

共用広間のテーブルは、何となく人が集まってくる空間であり、そこに来ればTVを見たり新聞を読んだりと思いの行為をしながら、居合わせた人と話をする。ときには一人だけで過ごしていることもあるが、間もなく誰かやってきて集まりを形成する。参加の自由度の高い空間ではあるが、この広間に面していない入居者の場合、用がなければ行かないという人も多い。施設側のプログラムとして、検温やおやつ、習字教室などの若い事などが行われることもある。

居合わせた人と会話する

- ・居室前の共用空間に出ていったときには居合わせた人と話をする。ただ何となく集まると言うことは少なく、検温やおやつなどで人が集まったときや、出かけるついでに居合わせた人に声をかけることが多い。

2



(写真 4-6) 広間で居合わせた人と会話

・一日のうち、比較的長い時間を自分の居室前の共用空間で過ごしている。ここでは新聞を見たりTVを見たり、居合わせた人と会話したりして過ごしている。「TV見ながら喋ってる」6

・一日の時間のうち、比較的長い時間を居室前の共用空間で過ごしている。ここで新聞を読んだり暇があればテレビを見たり。町の公報を読むのも好き。はじめのうちはテーブルのところに座って、新聞や公報を読んだりテレビを見たり、また居合わせた人たちとちょっと会話したりしていたが、次第にテレビの最前列に椅子が並ぶようになり、そこに座ってテレビを見るようになった。そこに座る人はいつも決まった人なので会話の相手も限られるようになったようである。9

・[外のテーブルにはちよいちよいと行く。]居合わせた人と「話をしに行く。居場所は、食堂とここくらい。」11

・[人と話すときにはその卓球台のところに行けば、誰かいる]ので、寂しいこともなく「結構楽しん過ごしている。」この人たちは特別仲良しというわけではないが、音で洗濯物を畳みながらお喋りしたりして、友達になってくる。共用空間ではじめテーブルについていたが、その後テレビの最前列に陣取るようになった。27

・はじめは居室内にこもりがちであったが、次第に居室外の共用空間で過ごす時間がかなり長くなった。共用空間では日中ほとんどTVの最前列の椅子に座って、隣の人と話をしながらTVを見ている。46

・自室外の共用空間で過ごすことが多いので、いつもここに集まるメンバーとは、TV見ながら、新聞読みながら会話したりする。57

一人何か作業する

・一日のうち、比較的長い時間を居室前の共用空間で過ごしている。昼間は真ん中で新聞見たり、TV見たりしているが「新聞は3紙来るし、TVもあるし、部屋にいらなくても良い。」TVは7時頃まで残っている。27

・日中はほとんど居室前の共用空間などで過ごすことが多く、居室での滞在時間がかなり短い。共用空間では新聞を読んだりTVを見たり、時には自室から本を持ってきて読むこともある。誰か居合わせれば会話することもあるし、誰もいなくても一人で座っている。20

・仕事が終わったあと居室外の共用空間でTVを見たりする。49

プログラム

・居室外の共用空間で過ごすことは、施設のプログラム（横遊・おやつ・善道教室など）以外にはほとんどない。37

・広間にはあまり行かない

・皆の集まる共用空間にはほとんど行かない。「ホールでは(耳が遠いので)ばあちゃんたちが怒鳴っている。テレビもうるさい。」テーブルで音とお喋りするようなどとはしない。47

・居室前の共用空間ですごすことはほとんどない。23



(写真 4-7) 広間で集まり



(写真 4-8) 広間で一人で居る



(写真 4-9) 広間で体操 (プログラム)

- ・南側には検温のとき以外はあまり行かない。21
- ・南側の共用空間には、検温やおやつの時からいであまり行くことはないで「向こう側の人とはあまりしゃべらない。」18
- ・テーブルのある共用空間には、用がない限りあまり行かない。25
- ・時には共用空間の方についてTVを見ることもあるが、あまり長時間いることはない。テーブルの集まりに積極的に加わることはしない。3
- ・居室前の共用空間では、新聞を読んだり、時にはテレビを見ることもあるが、若と見たいものが違うので、テレビを見ることは少ない。2

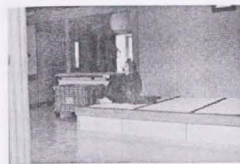


写真 4-10 広間の畳に一人で行っている

e. 畳

共用広間の畳は、通路に面しており、通り道でちょっと腰を下ろして休むような場所である。その時に隣に誰かが座れば話をする。また、通りすがりに軽く声をかけやすい場所でもあり、そのような軽いコミュニケーションが行われている。施設側からのプログラムとして、検温が行われたりおやつ（水分補給）がなされ、そのついでに洗濯物置きが行われたりする。

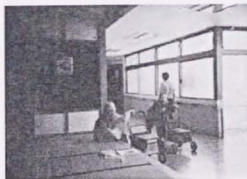


写真 4-11 広間の畳で通り返り合わせた人と会話

居合わせた人と会話する

- ・部屋から出てくると、まず畳に腰掛ける。畳に座ってほっと広間を眺めていたり、誰かが隣に座れば、話をする。6
- ・食堂の方から自室に戻るときには大抵共用空間の畳みのところにいったん腰掛ける。「自分の部屋ばかりじゃなく、こういうところ（畳）も気楽やわー。」隣に誰か腰掛ければ会話することもある。3

プログラム

- ・南側の共用空間には、検温やおやつの時くらい。18
- ・「最近では、畳のところで洗濯物をたたむの。」21

f. 廊下突き当たり

居住棟の最も突き当たりであり、中庭を除き、semi-privateで直接外部に面している唯一の空間である。自分の部屋から見る景色とは違う景色を眺めながら、広間などの集まりから少し距離を置くことのできる場所となっている。



写真 4-12 廊下突き当たりで一人で行っている

一人で居る

- ・共用空間の人の集まりから少し離れたところに自分専用の席があり、そこに座ってTVを見たり煙草を吸って過ごしている。「この場所は職員に言っておきました」47

g. 廊下

廊下は基本的には目的地までの通路であるが、それだけでなく、一人でリハビリのために歩く空間であったり、また仲のいい人たち同士で移動する際にはコミュニケーションの行われる空間でもある。

一人で運動する

- ・朝は5時頃おきて廊下を歩く。他にも歩いている人がいる。37
- ・朝は5時から廊下を向こうからこっちまで行ったり来たり。夏は4時から。往復10回すると、これだけで2キロになる。18



(写真 4-13) 仲のいい人同士で廊下を移動

仲のいい人で一緒に移動する

- ・近くの部屋の人たちは出身地も近いところで、仲よし4人組となっている。食事の時なども皆で声を掛け合ってお揃いで行く。目と腰が悪いので、誰かに手をつないでいてもらう。23
- ・隣の人は、食事や入浴の時なども声をかけて一緒に行く。目が見えないので、食事の際におかずの位置なども教えてもらう。「あの人は目も耳も近いし面白い。ご飯のときも近くにいってもらわないと。」18
- ・隣の部屋の目の悪い人とはとくに親しくして、一緒にいて移動するときや食事の際など、いろいろお世話している。21
- ・隣の部屋の人とは、ここに入居する以前の老健施設で一緒に仲良くなった。食事や入浴の時など、声を掛け合って一緒に行く。25
- ・食事や入浴の時など、車椅子を押して歩いてあげることが多い。43



(写真 4-14) 電話コーナーで一人で電話

h. 電話コーナー

電話コーナーは皆の集まる広間からちょっと離れており、皆からちょっと離れて一人で過ごしたり、仲のいい人と二人で専有することもある。ただし、よりpublicに近い皆の通る場所にあるので、孤立した空間ではなく、通りかかった人と話をすることもある。

一人で過ごす

- ・電話コーナーでのよくタバコを吸っている。47
- ・毎日朝から夕方までお手伝いで使われている。洗濯室の隣の電話コーナー「こうして洗濯機が終わるのを待っているときに、一番のんびり出来ます。」49



(写真 4-15) 電話コーナーで喫煙

居合わせた人と会話する

- ・施設内のいろんな場所でもタバコ吸ってるので、運動しているとよく会う。会うと20分くらい話す。その人に言われて自治会の副会長になった。「後できん言っ

とったけど、やってみんと出来んと言う奴があるか言われて。うんと言ったわけではないが、やれて。」19

仲のいい人と会話する

・毎日朝から夕まで一緒にお手伝いしている仲間が一人でいて、その人ともっとも仲がいい。食堂で仕事をしながら話したり、洗濯機の前のコーナーで洗濯の合間に雑草を吸いながら話したりしている。44
・いつも一緒にお手伝いをしている人と話す機会が多い。洗濯を待つ間に監の電話コーナーで話したり、洗濯物を積みながら話したりする。49

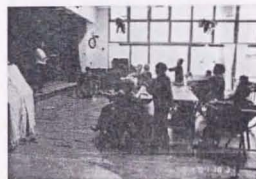


3) semi-public

(写真4-16) 電話コーナーで通り合わせた人と会話

1. 食堂

食堂では全員集まって食事をするほか、朝の体操やゲーム、季節行事や外からの慰問など、ほぼ全員を対象としたプログラムが提供される。こういったプログラムのはざまで、一人で作業したり居合わせた人と会話するようなことも見られる。



(写真4-17) 食堂で朝の体操 (プログラム)

プログラム

- ・朝の体操や施設行事など、施設のプログラムにはなるべく参加する。57
- ・外からの慰問や施設の催し物、朝の体操やゲーム、俳句教室・書道教室など施設側のプログラムには積極的に参加している。2
- ・朝の体操やゲーム、施設の行事など、施設の提供するプログラムには一通り参加する。3
- ・施設のプログラムにはとどろみ参加しているが、それほど積極的ではない。4
- ・朝の体操やゲーム、施設の行事など、施設のプログラムにはなるべく積極的に参加している。6
- ・施設のプログラムには必ず参加し、朝の体操やゲーム、慰問や施設の催しなどのイベントがあるときなどは積極的に参加している。9
- ・朝の体操やゲーム・施設行事など、施設側からのプログラムには比較的積極的に参加している。21
- ・朝の体操・ゲームや施設行事など、施設のプログラムには積極的に参加している。施設のプログラムやお手伝いの時などに居合わせた人と話す。25
- ・施設のプログラムにはたいてい参加している。37
- ・施設のプログラムにも、あまり積極的に参加しない。ただし雑祭りのイベントの時には紙の花をちょうど3月3日に咲かせるように調剤するという形に参加した。47



(写真4-18) 食堂で食事

一人で作業する

- ・食堂では自分の出来ることをしようと思いついて、一人でテーブルを拭いたり、お手伝いをする。18
- ・昼間は食堂よりも廊下にいることが多い。「動くのが好き

だから」朝から、おしほり・牛乳配り・おやつ配り・お茶配り・前掛け置んだりとお手伝いをして過ごしている時間が長い。「きちんとするのが好き。ちゃんちゃんと仕事する。みんなには負けない。」44

- ・自分の部屋にいることは少なく、食堂での滞在時間が多くになっている。朝から食事前のお茶配りに片づけ、他室の掃除、みなさんの洗濯・洗濯物置みと、休む暇もなく施設のお手伝いをし続けている。「はーっとしてられない。性分なのでつい動いてしまう。」49
- ・仕事の合間に食堂でTVを見たり。49



写真4-19) 食堂で一人で作業

居合わせた人と会話する

- ・食事時間のかなり前から食堂に来て、そこで誰か居合わせた人と話すことはある。13
- ・時には食堂で話をすることもある。「居場所は、食堂とここくらい。」11

食堂へはあまり行かない

- ・食堂などで過ごすことは少なく、「食堂はよそ行きという感じ。アトラクションは特別のことという感じ。」27

j. 食堂畳

食堂前の畳のステージで行われる洗濯物たみのお手伝いは、体操やイベントなどのプログラムに引き続いて施設側から与えられるプログラムの一種である。



写真4-20) 食堂で居合わせた人と会話

プログラム

- ・食堂でのお手伝いに積極的に参加しており、だいたい決まった人と「洗濯物置みの時に喋ったりする。」18
- ・食堂での洗濯物置みには参加している。「体の動く人はやらないといかんし。」46
- ・皆で洗濯物を置むときにはお手伝いすることもある。45
- ・仲のいい人と食堂などで洗濯物置みのお手伝いをたまにするようになった。4
- ・食堂でおしほり置みや洗濯物置みを手伝うこともある。前の施設では全員分の洗濯物を置む係になっていたため、お手伝いは当然のこととして受けとめており、「こっちは50人分をみんなやるので、ウーンびりやってます。洗濯物が少ないので、係は楽。太ってしまった。」9



写真4-21) 食堂畳でお手伝い

一人で作業する

- ・食堂の仏壇には毎朝お参りしておつとめる。43

k. 食堂カウンター

食堂後方のカウンターには流しがあり、食事の後かたづ

けやおしほり飲みなどのお手伝いが必要とされる空間となっている。おしほりたみは毎日およそ決まった時間に行われ、参加メンバーも少人数で固定している。



(写真 4-22) 食堂カウンターでお手伝い

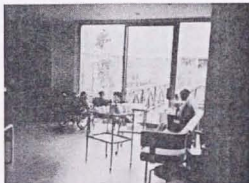
グループで仕事しながら会話する

- ・食堂でのおしほり飲みや洗濯物置きなどのお手伝いにも積極的に参加している。お手伝いに来る人はだいたい決まっていて、みんなでお喋りしながら仕事している。21
- ・食堂でタオル置きなどのお手伝いをすることもある。みなの洗濯置きもする。25
- ・おしほり飲みなどのお手伝いにも、積極的に参加している。お手伝いをする人はだいたい決まっているので、置き物をしながら喋ったりする。37
- ・食堂と一緒におしほりを置む人たちはある程度決まっており、食堂のカウンターのところでおしほりを置きながら会話している。49

l.浴室前コーナー

一人にいる

- ・共用空間では、玄関ロビー・浴室前・電話コーナー・廊下の突き当たりなど、さまざまな場所を転々として喫煙していた。「この三角コーナーにいるのが落ち着きます。眺めがいいので好きですね。一人で部屋にいるより、ここはちょっと方がいい。」47



(写真 4-23) 浴室前コーナーで喫煙

4) public

m. デイサービス

デイサービスでは地域の人が定期的に訪れ、中には同じ村の友人と会っていろいろ話をする機会となることもある。

親しい人と過ごす

- ・入居当初は施設に話し相手がおらず、「ここは退屈。デイの人が来るのが楽しみ。」昔から知っている地域の人やデイサービスで来ると、会話したり将棋を打ったりする。47
- ・もともとデイサービスを利用してから入居したので、今でもデイサービスで来る村の人には加わりが多い。デイサービスの方へ加わって一緒に話したりする。57



(写真 4-24) デイサービスの人に挨拶

デイサービスへは行かない

- ・デイの人と交流はない。「あの人たちは何をしているのかと思う。」25

n. 外部空間

施設の外部空間で過ごす人は少ないが、毎日リハビリで

運動したり、やり慣れている畑仕事をしている人がいる。基本的に個人的な作業であるが、これがきっかけでお互い親しくなることもある。

一人で作業する

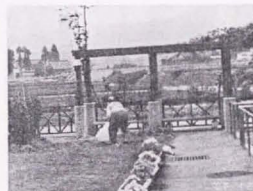
- ・小さいもんどか、ちよこちよこと洗濯しとる。外にずらっと干すんぞ。6
- ・外の庭で昔からやり慣れている畑仕事をする。「単に連なって里子やジャガイモやらうわったの。ナスビや茄子ややいっいなって、みんな食堂に並んだ。夏は朝飯前に肥やしやったり。外のプランターの鉢、私、全部世話してた。」27
- ・朝8時ころに娘が来て車椅子に乗せてもらい、午前中3時間は施設の外周を回る。「暑くなる前は3時間で大体15、6回まわったんぞ。今は2度ほど回るともうあつうてあつうて。」雨の日は外に出られないので、施設内を回る。19
- ・朝タリハビりで、毎日施設の外周を10回回るのをノルマとしている。1周40分くらいかかる。朝は4時ころから。10～15センチくらいの雪なら出る。自分でスコップ持って道をあけておく。47



(写真4-25) 施設外周を一人で散歩

仲のいい人と話す

- ・一緒に施設の外周を回っている男性と次第に話すようになった。「彼とはよく話す。彼の部屋へも行って話すが、お茶もタバコもダメなので、10分くらいで退散してくる。」47
- ・施設の外を車椅子を漕いで運動しながら、一緒に回っている男性とよく話す。「まともに話せるのはあの人ぐらいだもん。部屋にはそんなに来んでも、外へ出たらしょっ中喋るとるから。」19



(写真4-26) 外部での作業

外には行かない

- ・外には行かない。あんまり好きじゃない。3
- ・外にはめったに行かんぞよう。57

o. 在宅介護支援センター

仲のいい職員と話す

- ・他の入居者と話しているよりも、職員と、とくに訪問看護婦は自宅にいたときから親しかったので、話すことの方が多かった。46

4. 施設に展開する場

1) 場の概念

ある場所で人が何らかの行為をしていたり誰かとコミュニケーションをとっていたりするとき、そこでの人・場所・行為・人同士の関係などをすべて含んだ状況を「場」という言葉で示す。

R. Barkerは、物理的環境とそこで行われる行為とをセットにした「行動セッティング (Behavior Setting)」という概念を用いることによって、実際の生活行動の中に見られる人間と環境との関係を捉えている。そこには人間の行動と物理的環境とが切り離すことのできないシステムとして機能しているという考えがある。「行動場面」が明確に境界づけられた環境の中での(代替可能な)人の定型行動を物理的セッティングとの関係を記述しようとしたのに対し、ここで用いる「場」は、より個別的なアプローチであり、特定の個人個人が実際に経験している状況自体を捉えようとするものである。

人々がある場所・ある状況で何らかの行動をしたり、そこで社会的関係を構築したりすると、そこに場が形成される。人は自分から行動することで自ら場を形成したり、あるいは既存の場や与えられた場に参加する。これらの場がどのように構築されるのかは、そこに参加している人やそこで行動が決定要因となるが、それは施設のさまざまな空間の性質によって大きく影響を受ける。あるいは逆に、そのような場が施設の中に多様に展開されることによって、施設の空間が意味づけられていくこともある。ひとつと言えることは、空間の性質は完全にそこに形成される場を決定するものではないが、そこにどんな場が形成されるのかということに対しては大きな規定力を持つということである。そしてその場がさらに空間の質に影響を与えるというように、場と空間とは、どちらが原因でどちらが結果ということではなく、互いに意味を強化し合う循環の中にある。ここではその因果関係に目を向けるのではなく、それぞれの空間において、そこで展開される場との対応関係を見ることによって、人の生活行動によって関係づけられた施設内空間の意味を捉えることを目的とする。

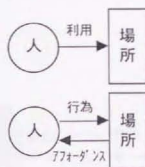
(表4-5) R. Barkerによる「行動セッティング」の定義

行動セッティング (behavior setting) は、活動と場所の安定した組合せであり、以下のものから成り立つ。

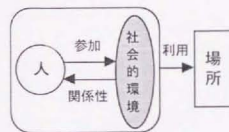
1. 繰り返される定型的行動 (a standing pattern of behavior)
2. その行動をとりまく特定の環境要素 (milieu)
3. の二者間の一致した関係 (synomorphy)
4. 特定の時間帯 (a specific time period)

(表 4-6) 場の分類

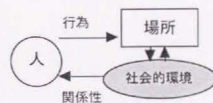
a. 個人的活動	personal activity
b. 親しい集まり	close relation
c. 目的的集まり	group working
d. 自然的集まり	open community
e. プログラム	program
f. 一時的	temporary



(図 4-9) 個人的活動 personal activity



(図 4-10) 親しい集まり close relation



(図 4-11) 目的的集まり group activity

2) 場の類型化

「場所における入居者の行動」で示した一つひとつの記述は、それぞれ一つひとつ（あるいはそれ以上）の場の質を表している。そこには人・場所・行為・人同士の関係などの要素が含まれている。それらの要素のうち、いくつかを組み合わせて、ここで得られた場をその性質から以下のような6種類に分類した。

a. 個人的活動 personal activity

主に、ひとりで何らかの活動を行いながら過ごしている場。自分で意味を見出す能動的・主体的な行動であれば、趣味活動のようなかなり能動的なものから、リハビリの運動や読書などちょっと思いついてする活動、TV・新聞などを読む、喫煙するといった身近で手軽な活動、あるいは一人で外を見ているというもまで含めている。どこにどのような個人的活動の場が形成されるかは、その場所自体の持つ性質によるところが大きい。単に場所の持つ機能に個人の目的が合致して利用するという一方的な関係だけでなく、その場所がある行為をアフォードし、アフォードンスを知覚した人がその場所において行為を行うという、相互作用的関係によっても場が形成される。

b. 親密な関係 close relation

施設内でのかなり親しい友人（しよって中部屋を行き来したり、一緒に活動するような関係）と過ごす場。あるいは外部の親しい家族や友人と過ごす場。関係が完結しており、それ以外の人がそこに加わるのに、相応の手続きが必要となる。親しい集まりの場は、場所自体の性質よりも先に人と社会的環境との完結した関係がまずあり、場所としては、その関係を維持するという要求を満たす空間が選択される。

c. 目的的活動 group activity

ある目的を共有する人が集まって、その目的を達成するために活動する場。メンバーは比較的少数で固定的。目的を達成するための場所と行為が重要であり、特定の場所以外で同様の人が集まって場を再現することはほとんどない。目的を達成する場所と社会的環境が一一対応しており、その場所における行為を選択するにしろ、社会的関係を選択するにしろ、もう一方の要素も選択することになる。

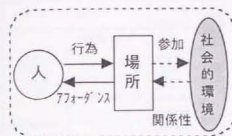


図 4-12) 自然発生的集まり open community

d. 自然発生的集まり open community

ある場所に人がそれぞれ勝手に集まったり離れたりしていることによって自然発生的に出来上がった場。全員が単一の行為をする必要はなく、また場へ参加したり離れたりすることが自由ができる。メンバーはある程度特定されるが、ある状況ごとには異なっている。常にその場所において核となるような人が存在する。自然発生的集まりの場では、人はその社会的関係自体を選択するというよりも、個人がその場所に来て何らかの行為を行っているうちに、場所を媒介として社会的環境と間接的に関わる。そうしようと思えば直接的な関係を選択することもできるし、そうしないこともできるといった、人と場所と社会的環境との完結していない、緩いつながりが場の特徴である。

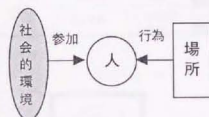


図 4-13) プログラム program

e. プログラム program

施設側の運営によって提供されるプログラム。人は半ば(あるいは心理的に)参加を強制され、場所と行為が一方的に人を規定する場である。

・強プログラム

基本的に全員が参加することを求められるプログラム。最も強制的なものとして、3度の食事、おやつ、入浴、不定期に行われる各種のイベントなど。

・弱プログラム

施設側から提供されるが、全員は参加せず、ある一部の想定された人たちの参加するプログラム。なかなか定期的には行われませんが、お茶・お花・書道などの習い事など。

f. 一時的 temporary

入居者同士の偶然の出会い、施設職員とその場限りの会話、など、反復性のないと思われる、一過性の場。

fの一時的に対し、a～eは比較的定型的な場である。ただし定型的であるように見えても実際には一時的が重なっていることもある、あるいは一時的が積み重なったものが定型的であると言うこともでき、その差は決して明確にあるわけではない。この定型的な場のうち、eが外から与えられた受動的な場であるのに対し、a～dは入居者による自主的な場と言える。

(表 4-7) 空間と場との対応

zone	空間	場
private	居室	personal close
	居室前7K27	close
semi-private	リハビリ空間	personal close
	共用広間7K27	open program personal
	共用空間群	personal open program
	廊下突き当たり	personal
	電話コーナー	personal close
	食堂	program personal
semi-public	食堂サロ	group
	7K27エレベーター	close
public	外廊空間	personal close

3) 空間と場との対応

これらの場の概念を用いて、施設内の各空間の意味を再整理すると以下ようになる。

a. private

personal activity, close relation

自分が他人に気兼ねせずに活動を行える場であるとともに、他者に気兼ねせずに個人的に親しい人と時間を共有できる場である。そこまで親しくない人には心理的に立ち入らないという関の高さがあり、その結果親しいのみが選別されることになる。

b. semi-private

居室前アルコーブ

close relation

その居間を共有する入居者たちによる close relation の場が見られることがある。居室の延長として、あるいは特定の人たちだけで共有される空間として、あるいは居室から semi-public などの空間へ行くときに一緒に待ち合わせる準備空間として、意味付けがなされている。

リハビリ空間

personal activity, close relation

誰も居ないときに一人で運動をする personal activity の場となったり、また仲のいい入居者たちが皆が集まるオープンな場を避けて仲間だけで集まる親密な場を作ることがある。semi-private であるが、皆に共有される空間というよりも、皆からちょっと離れていたときに用いられる。

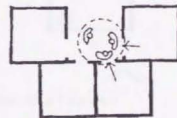
共用広間テーブル

open community, personal activity, program

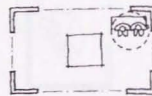
みな自然と集まって、それぞれTVを見たり新聞を読んだりといった思い思いの行為を行いながら会話したりすることで、出入りの自由な open community の場を形成する。その間には、一人で本を読んだりTVを見たりといった personal activity の場が出現するが、場合もすくなく誰かが集まってくることを前提とした潜在的な open community と言える。またこの場



(図 4-14) 居室



(図 4-15) 居室前アルコーブ



(図 4-16) リハビリ

所では、接客・おやつ・習い事など、東棟の入居者や比較的元素な人を対象としたprogramが行われることがある。ここでこの集まりに参加している人にとってはそのままopen communityに移行していくが、そうでない人たちにとってはprogramの意味合いの強い場となっている。この空間でclose relationの場が出現することはない。

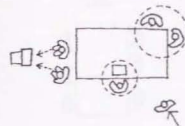


図 4-17) 共用広間

共用空間量

personal activity, open community, program

広間のテーブルの隣にあり、空間の意味合いは似ているが、テーブルにおけるより中心的な集まりに比べ、周辺の傍観的な位置づけをとることができる。廊下に直面していることから、場への参加・離脱はより容易である。たまたま通りかかった職員とtemporaryな場を形成することもある。一人で座ってテーブルの集まりをみているという、personal activityでありながら間接的にopen communityと関わりを持つこともできる。テーブルの集まりに普段参加していない人がprogramにより広間に集められた場合に、テーブルよりもよりアクセスしやすい場に集まり、programの場が展開される。このほか、洗濯物置みという形でprogramが提供されることもある。

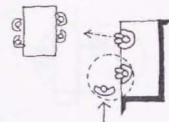


図 4-18) 共用空間量

廊下突き当たり

personal activity

広間の集まりからちよつと離れて一人で外を見ていたり、喫煙したりするといったpersonalな場が見られる。中には固定的なpersonalの場を物理的に構築して、TVを見ながら喫煙する専用の場所になっている例もある。

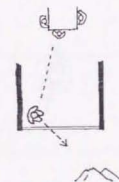


図 4-19) 廊下突き当たり

電話コーナー

personal activity, close relation

広間の集まりからちよつと離れており、電話を掛けるという機能以外にも、喫煙しながら一人で過ごすpersonalな場として、あるいは仲のいい人と二人で過ごすclose relationの場として用いられることがある。空間として独立しているが孤立しているわけではなく、よりpublicな人の動きを感じることで間接的な関わりを持ちながら居られる場所とである。通りかかった人と会話するなどtemporaryもしくはopen communityの場が展開されることもある。

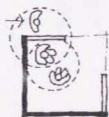


図 4-20) 電話コーナー

c. semi-public

食堂

program, personal activity

基本的に全員を対象とした規模のprogramが提供される空間である。すなわち参加が前提となるかなり規定力の強いprogramの場である。このようなprogram以外では行かないという人も多く、その人たちにとってはprogramの提供されている時間だけが意味を持つ空間となっている。そのほごまで、semi-privateの広間の集まりを避けて一人で過ごしたり、あるいは個人的に(自発的に)お手伝い作業をするなど、personal activity場が見られることもある。

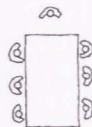


図 4-21) 食堂

食堂カウンター

group activity

ここでは参加メンバーの固定したグループによって特定の時間に、洗いやおしぼり畳みなどのお手伝い作業が行われる group activityの場が展開される。お手伝いという目的を共有したグループである。ときにはsemi-privateの広間の集まりを避けて一人で過ごすpersonal activityの場が見られることもある。

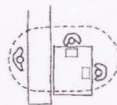


図 4-22) 食堂カウンター

d. public

デイサービスセンター

close relation

デイサービスは常に地域の(すなわち施設外部の)人と出会う機会を与えているが、入居者は誰でもオープンに話をするわけではなく、結局交流のあるのは昔からの知り合い・友人ということになる。そのようなclose relationを定期的に提供している。



図 4-23) デイサービスセンター

外部空間

personal activity, close relation

外部空間は何となく気の向いたときに使われると言うことは少なく、かなり明確な意図と意志のもとに個人的に利用されており、personal activityの場が展開されている。そこで個人的に親しくなって、close relationへとつながることもある。

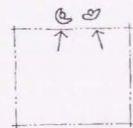


図 4-24) 外部空間

4) 領域の意味の混在性

これらの考察から、どちらも同じ中間領域として捉えられがちな semi-private と semi-public では、空間の意味がかなり異なることが分かる。semi-public が主に施設全体の program の空間として使われているのに対し、semi-private は入居者によって共有され、生活の中のさまざまな場面で人によって多様な使われ方をしている空間である。どちらの領域でも一人の作業による personal の場が見られたが、semi-private の場合は他の集まりとやや距離を置きながらも間接的な関わりを持っているが、semi-public の場合には semi-private の集まりから物理的にも心理的にも離れているようである。

また、一つの領域の中にも場所によって使われ方・意味が多様に存在していることも分かる。とくに semi-private zone は、入居者によって共有されているという点では共通しているが、場所によってその使われ方にはかなりのバリエーションがあり、さまざまなレベルの共有のされ方を見ることができる。固定したメンバーによって強くシェアされたり (close relation)、場への出入りが自由な比較的緩いつながりであったり (open community)、集まり自体からは少し距離を置いて間接的な関わりを持ちながら (personal activity)、通りがかった人と一時的に会話を交わす (temporary) など、その役割は場によって異なっている。

さまざまな人がさまざまな意味付けを空間に対して行うことで、そこには多様な意味がもたらに混在する環境が形成されている。その結果、また別の人はその空間に対し、自分なりに意味づけながら自らの行動環境に取り込むことが可能となる。それは、人の意味付けの多様性と、意味づけられた空間の多様性が相互に支え合いながら形作られた環境の質である。

5. 個人の形成する場

1) 各個人に対する視点

入居者の生活の積み重ねによってさまざまに意味づけられた施設空間において、実際の一人一人の入居者は、その中から場所を選択し、そこで自分にとって意味のある行動をしたり、何らかの社会的関係を構築したりしながら、その空間に対してさまざまに関係付け・意味づけを行って行く。そのような日々の生活の積み重ねによって次第に安定した環境との関係が形成され、各人が個別に認知し構造化した環境である個人的な行動環境が形成されていく。これを施設全体空間に対しての個人的領域の形成と考えると、それは個人が環境に適応していく上で非常に重要な側面である。次には、入居者の側に視点を移し、各人の一人一人に固有な行動環境の形成に注目し、施設空間との対応関係について考察する。

2) 領域滞在時間による類型化

それぞれの入居者の行動環境の大きな特徴をつかむために、領域分けされた空間の滞在時間割合から分類してみる。図4は、東棟入居者の95年8月～96年2月にかけて、各個人の領域滞在時間の割合である。ただし、それぞれの特徴をより際立たせるために、全員参加型のプログラム（食事・体操・イベント・入浴など）に使われた時間は除いてある。そのため全体的に、主に semi-public の滞在時間が実際に滞在していた時間よりも少なくなっている傾向にある。

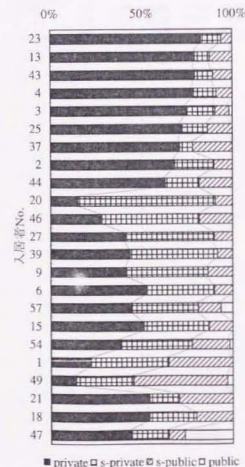
ここから、人によって日常生活をおくる場所に大きな違いがあることがわかる。各入居者はおよそ次の4種類に分類された。なお、類型の境界としているパーセンテージの値は恣意的なものであり、実感として入居者のタイプが分かると思われる数値をあえて採用しているもので、他のケースには原則として当てはまらないものである。

a. private 滞在型

private の滞在が60%以上。日中、プログラムされた時間以外、自室で過ごす時間が長い。23例中9例。

b. semi-private 滞在型

semi-private 滞在が35%以上で、かつ semi-public + public



■ private □ s-private ◻ s-public □ public
(図4-25) 95年8月～96年2月における東棟各入居者の領域滞在割合

(表4-8) 領域滞在時間による類型化

private型 : private が60%以上
 s-private型 : s-private が35%以上
 s-/public型 : s-/public が20%以上
 領域間移動型 : s-private が35%以上かつ s-/public が20%以上

	No	private	s-private	s-public	public
private滞在型	23	82.6%	11.6%	5.8%	0.0%
	13	79.4%	7.9%	12.7%	0.0%
	43	79.1%	10.4%	10.4%	0.0%
	4	78.8%	12.1%	9.1%	0.0%
	3	74.6%	15.9%	7.9%	1.6%
	25	71.7%	15.0%	13.3%	0.0%
	37	71.2%	6.8%	22.0%	0.0%
	2	67.8%	22.0%	10.2%	0.0%
	44	62.9%	18.6%	18.6%	0.0%
	20	14.5%	75.8%	9.7%	0.0%
s-private滞在型	46	27.8%	53.7%	18.5%	0.0%
	27	40.7%	49.2%	10.2%	0.0%
	39	43.1%	48.6%	8.3%	0.0%
	9	41.7%	45.9%	13.3%	0.0%
	6	52.5%	37.7%	9.8%	0.0%
	57	44.4%	36.5%	12.7%	6.3%
	15	50.8%	36.1%	13.1%	0.0%
	54	37.9%	39.4%	21.2%	1.5%
	1	22.0%	42.4%	35.6%	0.0%
	s-public/public滞在型	49	13.4%	51.3%	52.2%
21		53.7%	16.4%	29.9%	0.0%
18		53.8%	26.2%	20.0%	0.0%
47		43.7%	21.1%	8.5%	26.8%

の滞在が20%未満。自由な時間を主に共用広間などのsemi-privateで過ごすことが多い。23例中8例。

c. semi-public / public滞在型

semi-public + publicの滞在が30%以上で、かつsemi-privateの滞在が35%未満。プログラムのされていない時間でも、頻繁にsemi-publicあるいはpublicを利用する。23例中4例。なお47の事例のみ、public滞在型として独立させることも可能である。

d. 領域間移動型

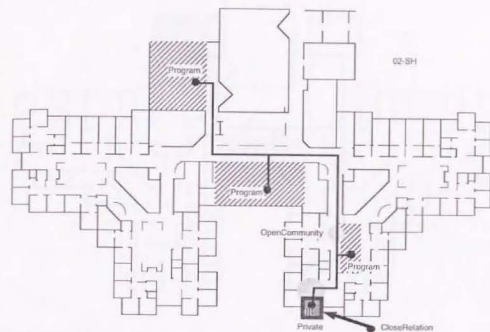
a. - c.のどれにもあてはまらない、すなわち、semi-private滞在が35%以上あり、かつsemi-public + public滞在も20%以上ある。居室にとどまる時間が少ない上に、ある場所に安定した場としてとどまることが少なく、領域間を頻繁に移動している。

これらの類型化を踏まえた上で、各個人が施設空間にどのように場を形成しているかを、以下で具体的事例から考察する。

3) 具体的事例

事例1

81歳女性、private滞在型。片麻痺で車椅子。

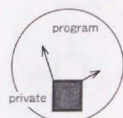


Zone	Where	What	Who	When	場
Private	自室	俳句創作・練習	一人	いつでも「母親がもつたなくて」	personal 生きた証を残したい
S-Pri	居間	俳句の会	俳句仲間・先生	月1回	group 俳句をしているので楽しい
	広間+グランド	会話 検温 書道教室	隣室の人 東棟の人 比較的元気な人	居合わせたとき 9:30ころ 不定期	temporary program program
S-Pub	食堂	読書物読み	比較的元気な人	10:30ころ	program
	教室	体操	全員	10:00	program
		食事	全員	7:30、12:00、17:00	program
		イベント	全員	不定期	program

共用空間に出ることもあるが、それよりも自室で過ごす時間が多い。俳句を趣味にしており、自分で俳句を作ったり、新聞の俳句を書きうつしたり、仏教の本を読んだりと、忙しく過ごしている。「時間がもたないで、だれかの部屋に集まって話をする時間もない。」俳句は習い始めて4年であるが、心の支えとなっており、「夜は眠れなくても、俳句をしているので楽しい。」部屋には自分の作品を装飾してもらって飾っている。俳句の句集に投稿して載ることもある。施設で句会を聞くとときには参加するが、参加者はそんなに多くない。俳句の先生や友人が直接部屋を訪ねてきて、俳句教室のようになることもある。

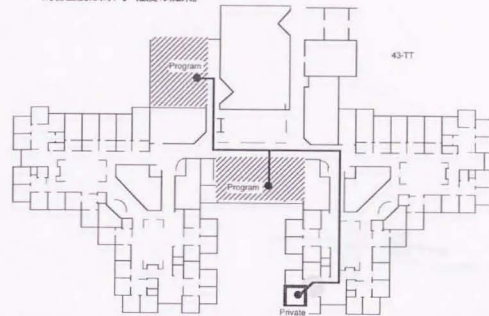
居室前の共用空間では、新聞を読んだり、時にはテレビを見ることもあるが、音と見たいものが違うので、テレビを見ることは少ない。外からの憩いや施設の催し物、朝の体操やゲーム、俳句教室・書道教室など施設側のプログラムには積極的に参加している。

居室前の共用空間に出たときには居合わせた人と話をする。ただ何となく集まると言うことは少なく、検温やおやつなどで人が集まったときや、出かけるついでに居合わせた人に声をかけるということが多く、俳句や宗教などをお互いに行っている人とは（かなり限られた人だけであるが）、自室に招いたり相手の部屋を訪ねて話をすることがある。娘や孫が来てくれて、手紙入れを作ってくれたり、カーテンをつけてくれたりした。



事例2

87歳女性、private滞在型。身体的自立度は高い、軽度の痴呆。

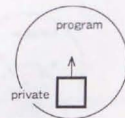


Zone	Where	What	Who	When	場
Private	居室	思ったことを書き留める	一人		personal
	サポテン		一人		personal
S-Pri	居室	訪問、会話	隣の人SH	洗剤がないときとか	close
	居間	会話・一緒に移動	隣の人SH	洗濯・掃除などへの行き帰り	temporary
S-Pub	居室	体操	全員	10:00	program
	食事		全員	7:30、12:00、17:00	program
	イベント		全員	不定期	program

一日のうち、暮役は主に自分の部屋にいる。イベントなどにも積極的に参加しない。皆で洗濯物を畳むときにはお手伝いすることもある。食卓の仕立には毎朝お参りしておつとめる。部屋で寝たり起きたり。思ったことを書き留めたり。目が見えにくいこともあって「外をぶらぶら歩くのは好きじゃないんです。もう年ですから。」部屋には自宅からサポテンを持ち込んでおり、自分で水をやっている。「ほとんど電話しなくて良いんです。」サポテンを見ながらぼつと過ごすこともある。入居当初は、掃除機の小さいのを持ってきていたので、自分でも掃除していたが、今はしない。洗濯は、調子のいいときは洗濯機を使う。「たまーに。」

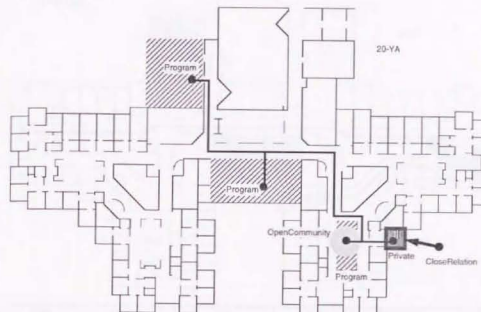
施設のプログラム以外で共用空間で過ごす時間は少なく、どちらかと言えば、部屋の隣同士の人と話す機会が多い。居室すぐ外のスペースで世間話をしたり、隣の車椅子の人の部屋に行って話したりする。食事や入浴の時など、車椅子を押して行ってあげることが多い。

家族は黒猫に息子がいるので、よく訪ねてきてくれる。病気の時は息子が病院へ連れて行ってくれた。家具や衣類の準備、部屋のカーテンなどは、お嫁さんにやってもらった。



事例3

75歳女性、semi-private滞在型。
身体的自立度は高い、軽度の痴呆。

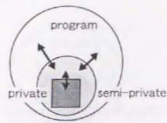


Zone	Where	What	Who	When	誰
Private	居室	読書・録音・趣味	一人	夜間	personal
		面会 面会	息子 村の友人	週に2回ほど ちよくちよく	close close
S-Pri	広間・PTA	新聞・読書	一人、誰か	日中かなりの時間	personal
		会話 検査 言語療法	広間周囲の人 東棟の人 北村院長気な人	居合わせたとき 9:30ころ 不定期	open program program
S-Pub	食堂	食事	全員	11:00	program
		イベント	全員 全日	7:30、12:00、17:00 不定期	program program

日中はほとんど居客前の共用空間などで過ごすことが多く、居室での滞在時間かなり短い。共用空間では新聞を読んだりTVを見たり、時には居室から本を持ってきて読むこともある。誰か居合わせれば会話することもあるし、誰もいなくても一人で座っている。居室で過ごす時間は他人に比べて少ないが、家族が持ってきてくれる本を読んだり、雑誌をまとめて巾着袋をついたり、折り紙で窓から見える景色をちぎり絵でつくったりと、さまざまな趣味活動を行っている。本は始め床頭台の上に乱雑に置かれていたが、職員から贈られた本棚にきれいに並べられるようになり、「読みたいものだけ外に置く」ような秩序が出来てきた。また、ここに入居してから始めた録音を大字ノートに毎日一句か二句書いている。「実型のがあったら生活のことを書いている。」「録音は日記みたいなもの。死ぬときの学問。」

友達は下立、愛本、浦山など、地元で大勢いて、よく遊びに来るので「村の様子に村にいないけど手取るように分かる。昔、無駄口たいて帰る」風邪の予防にマスクをしていたら、それを伝え聞いた友達が「昨日も4人はど入れ替わり立ち替わり来てくれた。」

下立にいる息子が週に2回ほど来て、「たびたびいろんなものを持ってきてくれるがす」。家が近くに就いて子供が迎えに来てくれるので、定期的に帰宅している。「帰るときは、みな応接間で、息子やお嫁さんたちがみんな待っていてくれます。待っているから離ださなき+悪いと思って。」



事例4

77歳女性、semi-public/public
滞在型、身体的自立度は高いが目
が不自由。

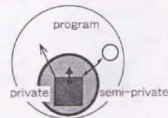


Zone	Where	What	Who	When	品		
Private	居室	読書	娘	月1回くらい	close	来たときには部屋に入る	
	TV 会議 個室	TV 会議 会議	入居者HC 入居者IC、NS 娘のABC	毎日5~7時 朝昼 朝昼	close close close	耳遠くてあまり喋らん	
S-Pri	居間	会議	一緒に移動	居間以外の人	食事・休憩などへの打 き取り	close	仲良く4人組
	リハビリ	会議	入居者IC、NS	一人	「いつもあそこで話す よ」	close	黙掛けて喋りやすい
	廊下	運動	一人	退屈になったら	一人	personal	誰にも何人が散歩している
	広間堂	検温	東棟の人	9:30ころ	毎朝5時	program	（南棟広場）あまり行か ない
S-Pub	食堂	体操	全員	10:00	program		
	食事	食事	全員	7:30、12:00、17:00	program		
	食堂外の お手伝い・会話	イベント お手伝い・会話	全員 手伝い仲間	不定期 昼食・夕食後	program group	お喋りしながら仕事する	

居室・リハビリ室・食堂など、施設のさまざまな空間を使い分けている。朝は5時から廊下を向こうからこっ
ちまで行ったり来たり。夏は4時から。往復10回すると、これだけで2キロになる。それから着替えて、運動のた
めにトイレの掃除。それから顔洗ってお参りする。

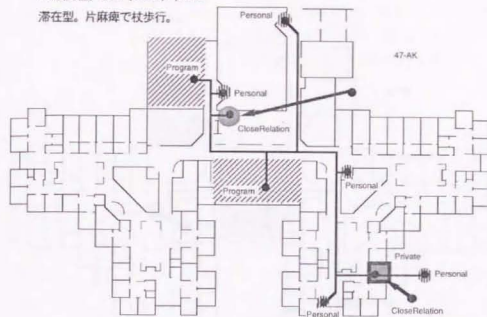
居室外の共用空間はリハビリ空間になっており、「退屈になったらリハビリのところで少し体操する」ベンチ
に腰掛けて会話することも。前開きの人の集まる共用空間に対しては「誰のところで体温計はかるときだけは行くが、
あまり向こうには行かない。」食堂では自分の出来ることをしようと思いい、一人で早めについてテーブルを拭いたり、み
んでおわつやおしほり飯んだり、お手伝いをする。

廊下の近くには家の近い人が集まっており、仲良く4人組となっている。とくに隣の人はお互いの部屋を行っ
たり来たり、食事や入浴の時なども声をかけて一緒に行く。目が見えないので、食
事の際におかずの位置なども教えてもらう。「あの人は目も耳も近いし頭もいい。
ご飯のときも近くにいってもわらないと。」もう一人の人は夕方3時になるとテレビ
を見るけれど、耳遠くてあまり喋らんし。」4人組で部屋に集まることはあまりなく、
「みんな自分自分のTV見てるから、じゃまになるかなと思ったり。」このほかに、
よくやって来てお喋りする人がある。「向こうの家には減少は行かない。行ったら
いろいろ世話してもらわにゃ。向こうから来るばっかり。」部屋だけでなく「いつ
もあそこ（リハビリの椅子）で話すよ。あそこの方が腰掛けて喋りやすい。」



事例5

71歳男性、semi-public/public
滞在型、片麻痺で杖歩行。



Zone	Where	What	Who	When	道
Private	居室	テレビ、TV	一人		personal 椅子に座って ここは退屈。デイの人が来る のが楽しみ
	個室	面会、会話 訪問、会話	デイの友人 入居者YT	週に1回くらい たまーに	close close
S-Pr	突き当り	喫煙、TV	一人	喫煙	personal 職員に言ってお喫煙コーナーを 作らせた か-4ではばあちゃんたちが怒 鳴っている
S-Pub	電話コナ 浴室前	喫煙	一人、誰か		personal 眺めがいい、落ちつく
	食堂	喫煙 食事	一人 全員	7:30、12:00、17:00	personal program
Public	デイ	会話、散歩	デイの友人	週に1回くらい	close ここは退屈。デイの人が来る のが楽しみ
	リハビリ廊下		一人、YT、KS	朝は4時頃から、雪の日 でも	personal 毎日10回をノルマ

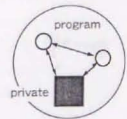
朝タリハビリで、毎日施設の外周を10周回るのをノルマとしている。1周40分くらいかかる。朝は4時ころから、10-15センチくらいの雪なら、自分でスコップ持って道をあけておく。外を回るのは、他に男性入居者が2名いる程度。共用空間では、はじめ玄関ロビー・浴室前・電話コーナー・廊下の突き当たりなど、さまざまな場所を転々として喫煙していた。「三角コーナーにいるのが落ち着く。眺めがいいので好き。一人で部屋にいるより、ここでは一っという方がいい。」その後施設の職員に申し出て、自分専用の喫煙場所を廊下の突き当たりにつくってもらった。他の場所を転々せずに、この定位置に座って外を見ながら煙草を吸うようになる。共用空間のテーブルで皆とお喋りするようにはしない。施設のプログラムにも、あまり積極的に参加しない。

部屋にいるよりも外を回ったり喫煙場所で煙草を吸っていることが多い。居室にいたときにはTVを見たりコーヒーを飲んで過ごしている。せっつくの洋間なので、椅子とテーブルを置いてスリッパのまま入って座っている。

運かの部屋に上がり込むようなことはほとんどしない。はじめのうちは「男の人同士で寝ることはない。女の人のように、あまりべちゃべちゃ寝れないし、それよりも寝、ベッドにいる人が多い」と言っていたが、一晩に施設の外周を回っている男性と次第に話すようになった。「彼とはよく話す。彼の部屋へ行っで話す。お茶もタバコもダメなので、10分くらいで退散してくる。」

皆の集まる共用空間にはほとんど行かない。「ホールでは「耳が悪いので」ばあちゃんたちが怒鳴っている。テレビもうるさい。」

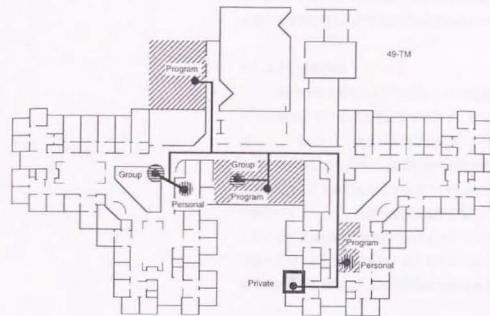
「ここは退屈。デイの人が来るのが楽しみ。」昔から担っている地域の人がデイサービスで来ると、会話したり将棋を打ったりする。「[デイの友達] デイに来るのはあなたに会えるのが楽しみなんだと言ってくれる。外に出ているときには探してくる。」はじめはデイのスペースで会話をしていたが、自室に客用の椅子を備えて環境が整うと、自分の部屋に置いて話すようになった。



事例6

71歳女性、semi-public/public

滞在型、身体的自立度高い。



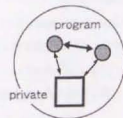
Zone	Where	What	Who	When	場
Private	居室		一人		目が覚れたら眠たいんです
S-Pri	広間・フア	TV	一人	仕事が終わった後	personal
	廊下 共通敷室		家族の人 比較的元気な人	9:30ころ 本定期	program program
S-Pub	食堂	体操	全員	10:00	program
		食事準備・後かたづけ	全員	7:30、12:00、17:00	program
	食堂・お 手伝い・会話	食事	NSなど	食前食後	personal
		お手伝い・会話	手伝い・仲間	昼・夕食後	group
電話コナ	喫煙、会話	手伝い・仲間NS	昼・夕食後	group	

自分の部屋に居ることは少なく、食堂での滞在時間が多くなっている。朝から食事前の準備お茶配りに片づけ、他室の掃除、みなの洗濯・洗濯物置みと、休む暇もなく施設のお手伝いをし続けている。あまり自由になる時間はない。「ほーっとしてられない・性分なのでつい動いてしまう。本当は部屋の家具とか磨きたいんですけど。部屋の掃除したりとか。」はじめのうちはかなり疲れており「倒れたこともあるけれど、できるうちは何でもやります。」洗濯コーナーの脇で「こうして洗濯機が終わるのを待っているときに、一番の人びり出来ます。」時間が経って次第に施設になじんでくると、「ここへ来て、大分元気になりました。慣れたせいか、元気になったせいでしょか。」

仕事の合間に食堂でTVを見たり、仕事が終わったあと居室外の共用空間でTVを見たりする。それからようやく部屋に戻る。「目が覚れたら眠たいんです。7時ころには、ラジオ付けたまま寝てしまう。」

いつも一緒にお手伝いをしている人と話す機会が多い。洗濯を待つ間に居る電話コーナーで話したり、洗濯物を積みながら話したりする。このほかにも、お手伝いをするメンバーはある程度決まっており、食堂のカウンターのところでおしほりや遊びながら会話をしている。

居室外の共用空間の集まりに加わって話をすることもあるが、それほど積極的ではない。全体的に他の入居者とは淡々とした関わり方をしている。「部屋に行って話したりもしますが、でも深入りはない。あまり関わりたくない。恐いです。大阪とは全然考え方が違いますよ、冗談をいつまでも根に持っている人もいます。難しいですねえ。」「あんまり他の人のところへ遊びに行くのは好きじゃないです。」



4) 個人的領域展開の空間的特長

施設空間のさまざまな使い方は、各個人が日々の生活の中で徐々に形成していった個人的な領域の展開を示している。これらの事例に見られた領域展開の空間的特長を以下に述べる。

ベースとしての居室

居室は単に閉じこもりの空間としてのみ機能しているわけではない。そこでは他者に気兼ねなく、自分だけの活動を行ったり、親しい人と密度の高いコミュニケーションがなされたりしている。それに加え、施設内の空間に行動を広げていく拠点として、そこから出発していつでも帰ってこられるような行動のベースとして、居室は重要な機能を果たしている。安定した自分の居場所が確保されていることによって、その外側へ行動を広げ、そこで他者とのさまざまなコミュニケーションを通じて関係を広げることが可能になっていると思われる。

パuffaとしての居室前アルコーブ

居室前のアルコーブは、一部の人を除いて人の居る場としてはあまり使われていないようである。それでも居室が直接人の集まる広間と接するのではなく、アルコーブがパuffaとしての役割を果たしているために、居室が安定した環境を確保できるとともに、広間に人が気兼ねに集まることのできる空間となっているようである。

多様な意味付けの semi-private

semi-privateは人によってさまざまな使われ方がされており、人によって異なる意味付けがなされている。それぞれの人が自分なりのしかたで場を形成し、自分にあった居方・コミュニケーションによって関係を広げていく拠点としている。

段階構成と領域の広がり方

semi-privateの広間は、ほとんどそこを囲む入居者のみによって利用されており、隣に面した部屋の入居者や、まして他棟の入居者にはあまり使われていない。入居者の領域の拡大のしかたは、private→最も近い semi-private→semi-public→となっており、最寄りの semi-privateへの領域化は行われやすいが、それ以外の semi-privateへの展開は、行われにくくなっている。これは施設の明確な段階的空間構成が大きく影響を及ぼしていると思われる。

図4-9) 施設空間の環境形成から見た分類

- a. 自己充足型
- b. 閉鎖的コミュニティ型
- c. 開放的コミュニティ型
- d. 自家外活動型
- e. 閉じこもり型

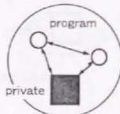
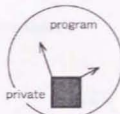


図4-26) 自家充実型

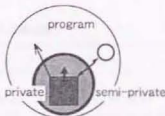


図4-27) 閉鎖的コミュニティ型

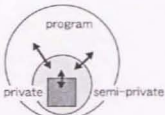


図4-28) 開放的コミュニティ型

5) 施設空間の環境形成から見た入居者の類型

ここで見てきた事例を、施設内空間における場の作り方から、自家充実型・閉鎖的コミュニティ型・開放的コミュニティ型・自家外活動型・閉じこもり型の5種類に分類した。この分類は見てわかるとおり、領域の滞在時間割合による分類とは対応していない。領域滞在割合は各人の行動パターン・量的特性からの分類であるのに対し、ここでは施設の空間に対する意味付けの違いからの分類を試みたものである。

このそれぞれの型によって、個人個人の作り上げた行動環境は異なるものであり、これは一つの居住施設においても個人によって体験している環境の質が異なるものであることを意味する。

a. 自家充実型 (事例1、5)

private空間を、自分の安定した居場所として、個人的作業の場として、また親しい人たちとの個人的なつながりを持つ場として、充実した環境を形成している。一方自家の外の空間は施設によってprogramされた空間とみなされ、private空間との間には意味的に大きな壁がある。privateに閉じこもっているわけではなく、外に出るときにはprogramに参加するものとして、意味の差をはっきりと認識しながら空間を使い分けている。事例5のように、自家の外に自分の居場所が高のように形成される場合もある。

b. 閉鎖的コミュニティ型 (事例4)

private空間につながるsemi-private空間の一部が、そこを共有する人たちとのclose relationの場として、かなり密度の高いコミュニケーションの場となっている。それ以外の場所はprogramの場としてみなされており、意識の上ではこの共有されたsemi-private空間と、その外側との間に壁がある。自家充実型と同様に、外に出ていくときにはprogramに参加するか、あるいは高状に形成されたpersonal activity・group activityの場に赴くことになる。

c. 開放的コミュニティ型 (事例3)

private空間につながるsemi-private空間が、比較的出入り自由なopen communityの場となっており、自家とsemi-privateを頻繁に往復したり、semi-privateでの滞在時間がかなり長い、private

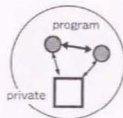


図4-29 自室外活動型

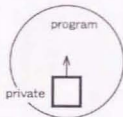


図4-30 閉じこもり型

表4-10 入居者の類型

類型	人数	入居者 No.
a 自室充実型	3	02, 03, 47
b 閉鎖的コミュニティ型	6	04, 18, 21, 23, 25, 37
c 開放的コミュニティ型	7	06, 09, 11, 20, 27, 46, 57
d 自室外活動型	2	49, 44
e 閉じこもり型	2	13, 43

と semi-private との間にそれほど大きな意識的ギャップはない。open communityの場の外側の空間は、やはり programの場としてみなされているが、前の2類型に比べて、programの空間に至る際の心理的なギャップは少ないようである。すなわち、形成された環境において private から public に至る空間が比較的緩やかにつながっている。

d. 自室外活動型（事例6）

自室の private に対してその外側が programの場としてみなされていることは自室充実型と同様であるが、自室での滞在時間が短く、自室における活動や交流はほとんど見られない。semi-privateにも安定した居場所を形成しておらず、おもに semi-public空間に自分の拠点となる場を持って活動している。個人的な作業や他者との交流ということよりも、semi-publicで与えられる役割を遂行することに大きな意味を持っている。

e. 閉じこもり型（事例2）

自室内での個人的活動も他者との交流も少ないことから、自室の環境形成はさほどなされず、また自室外への行動の広がりもあまり見られない。自室での滞在時間が長く、外に出るときは施設で提供される programに参加するとさくくいである。

対象とした20人の入居者を、それぞれこの5類型に当てはめると表4-10のようになる。privateもしくは semi-public空間において自ら積極的に働きかけて自分の場を構築していく必要のある自室充実型・自室外活動型に比べ、semi-private空間における関係性の中に自分を定位することのできる開放的・閉鎖的コミュニティ型の入居者が多数を占めている。居室の環境形成が積極的になされている自室充実型は、個室化の恩恵を受ける典型として、また環境形成のあまりなされていない居室にこもりがちとなる閉じこもり型は、その逆の典型として、取り上げられやすいタイプである。実体としてはその中間的とも言える両コミュニティ型が多く見いだされた。このことは semi-private や semi-publicといった中間的な共用空間が、より重要な役割を果たすべきであることを意味する。

6. まとめ

1) 共用空間の重要性

高齢者居住施設、とくに身体機能の落ちてきた特別養護老人ホームにおける個室化は、入居者の個室への引きこもりを促し、施設内の活動を停滞させ、同時に高齢者の孤立化につながるのではないかと指摘は、必ずしも正しいものではなかった。実際に滞在時間の系時的な変化を見ると、居室のprivate空間の滞在率はむしろ減少気味であり、その外側に広がるsemi-private空間の滞在率が増加している。個室化を進める上で、むしろその外側に広がる共用空間の重要性が高まっている。

2) 施設空間の多様な意味付け

施設空間のさまざまな場所は、入居者によって多様な使われ方をし、多様に意味づけられている。とくにsemi-private～semi-publicにいたる空間には社会的関係の上でいくつかのレベルの異なる場が展開されており、それぞれの入居者はこれまでの生活歴や自分のパーソナリティに契打ちされた自分の生活スタイルに合わせた場を選択している。このような入居者による空間の意味付けは、必ずしも（そして大抵の場合）施設的设计者や管理者によって設定された機能とは一致しない。

3) 入居者の生活の多様性

入居者一人一人はそれぞれ固有のやり方で環境を認知し、環境と関係を作りだし、環境を意味づけながら生活している。とくにこれまでの生活歴も現在の心身状況も異なる高齢者が集められた居住施設では、入居者の生活も本来多様であるべきである。また、ある人は新しい環境に対して積極的に意味を見出し新しい人間-環境システムを構築できるが、ある人はなるべく以前のシステムを維持するか、あるいは維持できないときには施設に身を任せるだけの受動的な存在となってしまうといったように、高齢者のコンピテンスにもばらつきがある。

ここでは、施設内空間における場の形成のし方、つまりその場所で行う行為や人との関わりなどの違いから類型化を試みた。それぞれの類型にとって、施設空間における物理的環境および社会的環境との対応の仕方自体がかなり異なっている。機能を細分化して空間に割り当てていくといった一対一対応主

義ではなく、施設内の各空間がそのような多様な生活スタイルを持つ入居者による多様行動環境の形成をどのように支えていくかが、施設的设计・管理を考える上で重要な課題であると思われる。

4) 多様性を許容する空間

多様な入居者の生活スタイルを支えているのは、単に個室の存在のみにあるのではなく、多様に意味付けされる semi-private の空間が大きな役割をしている。そこでは各入居者が自分に合わせた居方を選択可能であり、また、さまざまなレベルのコミュニケーションを選択できる。これに対して private 空間では他では取り得ない密度の高いコミュニケーションが可能であるが、それはレベルの限定された、特定の人のみとのコミュニケーションである。この両者、すなわち密度の高い限定されたコミュニケーションを行える場と、さまざまなレベルから自分なりのコミュニケーションを選択できる場とは、両者ともに必要不可欠なものとして存在することによって、各個人が自分らしさを保ちつつも施設環境に適合して安定した関係を形成することが可能になっていると考えられる。

このことは実は、普通の人にとってふつうの日常生活の上では当たり前に行われていることであろう。しかし、高齢者が居住施設に入居することで選択の幅が急激に抑えられ、この普通のことが実現できなくなっているとすれば、そこを自分の「住まい」として適応していくことは難しくなっていく。しかも身状況の低下によりますます選択の幅が狭まっていく施設入居者にとっては、なおのこと重要な問題である。

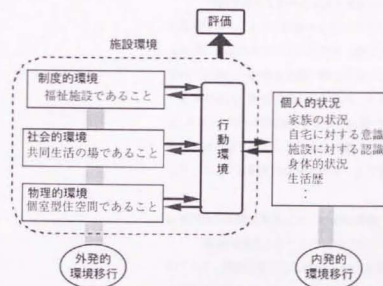
第5章 評価

—入居者の評価を通してみた施設環境

1. 入居者の評価の構造

前章まではおもに、入居者による物理的な痕跡や行動とそれともなう意味を通して、実態としての入居者の環境形成の様子を捉えることに主眼を置いてきた。つまり実際に施設内で行われていることのうち、何らかの形で目に見える部分を記述し考察を加えてきた。

本章では、入居者によって施設環境がどう評価されているのか、という、より心理的側面を捉えることを目標とする。入居者が施設の生活の中で、施設の環境とさまざまに絡み合いながらどのように生活を組み立て、行動環境を形成し、それを評価しているのか、インタビューから得られたコメントから考察する。その際、個人的行動環境の評価に影響を与える側面として、1.施設環境、2.個人的状況、3.入居以降の環境移行、という異なる3つの側面から見ていくこととする。



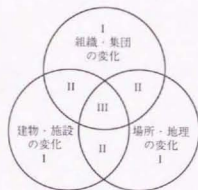
(図5-1) 入居者の行動環境の評価に影響を及ぼす要素

1) 施設環境

高橋 (1991) は、生活場面としての構築環境に関わる移行の型を次の3タイプにまとめている。

1. 属する組織・集団の変化
2. 建物・施設の変化
3. 生活・行動の地理的な場所の変化

これらの移行は組合せにより、各環境が単独に変化する一次的移行から、すべてが同時に変化する三次的移行に分けられる。居住施設への移行というのは、これらすべての環境がダイナミックに変化する三次的移行である。入居者の環境への適応は、これらの移行に対する対応である。このうち「3. 場所・地理的变化」に対しては入居者に選択の余地はほとんどなく、日常生活がほぼ建物内に完結してしまうことを考えると、「1. 集団組織」「2. 建物・施設」への対応が重要な問題となる。



(図6-2) 構築環境移行の型 (高橋, 1991)

施設環境の特長として、施設側の提供するソフト(ケア・サービス・プログラムなど)などが生活の中で重要な意味を持つことがある。ここでは「1. 集団組織」「2. 建物・施設」を再編成し、制度的環境・社会的環境・物理的環境の3側面から捉え、各側面ごとに居住者の評価を分析していくことから、入居者にとって施設環境がどう捉えられているのかを考察する。

a. 福祉施設であること：制度的環境

特別養護老人ホームは老人福祉施設に位置づけられた居住環境であり、そこには様々な形でケアやサービスが与えられる反面、生活のスケジュールが画一的に決められ、さまざまな規則や行動上の制限も実際に存在する。それらはすべて入居者の日々の生活に密接に関わっており、大きく影響を及ぼしている。それらは社会的環境のひとつに位置づけることもできるが、とりわけ施設であることによる影響力の大きさを含んだ表現として、ここでは制度的環境と呼ぶことにする。

b. 共同生活の場であること：社会的環境

特別養護老人ホームの定員は50~100人程度の物が一般的である。調査対象とした施設も50人定員であり、それまで自宅で家族とともに、あるいは一人で生活を送ってきた人にとっては、そのような大人数で一つの空間の中で生活するということは、大きな環境の変化である。これまでの社会的環境とはまったく異なる、「共同生活」における社会的環境が個人の生活に与える影響もまた大きいと言える。

c. 個室型居住空間であること：物理的環境

特別養護老人ホームの居室は現在のところ、2人室～4人室が一般的である。本研究の調査対象とした特養は全個室を目指した先駆的な例であり、そのもとも特徴である「個室であること」がどれだけ入居者の生活に影響を及ぼしているのかという点に注目するために、また最もその点に関して入居者の評価が現れてきているため、物理的環境の特徴として「個室」とりあげる。

2) 個人的状況

入居者が施設的生活を評価する場合、それらの施設環境自体の質だけでなく、個人個人のそれまでの生活歴や現在の家族との関係、自宅（すなわち帰ることのできる場所）の有無など、入居以前からの個人的な状況が大きく影響を及ぼしていると思われる。ここでは施設環境に影響を与える背景的要因として、家族との関係・自宅に対する意識・施設に対する認識の3側面について考察する。なお、これらの個人的状況は、完全に施設生活のバックグラウンドとして変わらぬものとして一方的に影響を与えているわけではない。時間的流れの中で、入居者が施設環境の中で生活していくに連れて、これらの個人的状況も影響を受け次第に変化する性質のものである。

3) 居以降の環境移行

時間の流れの上で考えると、施設環境や個人的状況は次第に変化していくものである。それは入居者の適応過程の際の相互作用・相互浸透によるゆっくりとした変化もあるが、それだけではなく何らかの出来事をきっかけとした急激な変化も起こる。それはたとえば入居者の心身状態の変化といった人間の側における変化（内発的環境移行と呼ぶことにする）であったり、施設の大規模な部屋替えという環境の側の変化（外発的環境移行と呼ぶことにする）であったりする。これらの変化はどちらも人の行動環境に影響を与えるものであり、その変化が急激でダイナミックであるほど、入居者と施設環境との関係も大きく変化せざるを得ない。ここでは入居以降の環境移行としてそれらの要素を捉え、入居者に与える影響について考察する。

（表5-1）内発的環境移行と外発的環境移行

内発的環境移行：	高齢者自身の身体状況の変化など、人的原因により、人間・環境の間わり方が変化する。
外発的環境移行：	高齢者をとりまく周辺環境の変化という外的原因によって、人間・環境の間わり方が変化する。

2. 施設環境

1) 制度的環境：福祉施設であること

a. 主体性の制限

自分は施設に面倒みられている、管理されている、世話してもらっているという意識が見られる。実際に行動が規制される経験や、自分の生活に関わる重要な決定に自分の意志が反映されないことなどから、さまざまな側面而自己決定権が制限されていることを実感する。また、もともと世話をされるといふ受動的な立場から行動を自制することもある。そういったことから、規則を守って生活しなくてはいけない、言われるとおりに行動しなければならない、といった施設に対して受動的な存在であることを受け入れるようになっていく。それは施設に入れてもらったことと引き替えにした、ある種のあきらめの感情である。

施設の実質的な規則によって、実際にある種の行動は規制されることがある。これは入居者全員を一律に規制するものであり、個人的にはその行動が可能な人でも、あきらめざるを得ないという状況が起こる。

- ・ここは一般浴が週2回しかない。ここに来てから間もなく、裏の老人センターで風呂浴びようと思って出てたら、職員が飛び出してきて戻つかまされて引き戻された。47
- ・買い物も行かれなんちゃ。行くと思えばどこでもいけるが。なかなか自由にならんもんで。風呂ちゅうのがあるがや。連れてってやる言わんどもも行けませんちゃ。46

施設にお世話になっているのだから、職員に迷惑を掛けるはいけない、迷惑を掛けるくらいであれば、自制し、あきらめ、気を付ける、といった形で、明確な規則によって規制されるわけではないが、ある種の行動に対して自己規制が働くことも多い。

- ・私はおばさんだからいつ死んでもいいけど、この人に迷惑かけちゃいかん。57
- ・午前中は3時間運動。家にいたときは5時間のとった。11時すぎると寮母さんに悪いと思って。19
- ・寮母さんは忙しすぎて、もの頼むのも悪くなるほど。あまりべちゃべちゃ喋るのも。46
- ・（雷見障子を下げたままなのは）下手したらすぐ外れる。人に頼むのも嫌だし、自分で始末できん。冷房も嫌いやけどいちいち言うのもいややし46
- ・ベッド横は自分で取って落ちたりしたらなに言われる

(表5-2) 制度的環境：福祉施設であること

福祉施設であること	
主体性制限	規則 一方的決定 自制
ケア	要求 受動的享受 自己管理
プログラム	期待 不必要
役割	仕事 個人的介助 習書き

か分かりませんので、気を付けております。20

次のコメントでは、非常に身近なレベルの行為でありながら、決して自分勝手にしているのではなく施設側の了承を得た上でやっていることを強調している。

- ・洗濯物は洗濯する場所で、自分の石鹸を使って自分でしている。その辺で洗濯したりはしない。6
- ・家具は最初からこの位置に置いてあった。動かしていない。自分で持ってきた物は、自分で並べている。ここから買った物は何もないぞ。この椅子は施設の人にちゃんと買って、ちゃんと手拭きをして借りている。いけなかったのか？ 6

b. ケア・サービス

施設側から提供される生活援助/介助のケア・サービスは、本来それらの恩恵を被るために施設に入居する要因となるべきものであり、施設での生活を評価する上で、かなり本質的な部分の一つであろう。

入居前の生活で、一人暮らしで自分の身の回りの世話に不安を覚えていたり、家族に世話してもらっていることの心理的負担がかなり大きかったりした場合、施設で基本的な面倒を見てもらいケア・サービスを受けることに対して、きわめて肯定的な評価がなされている。これは在宅では満たされなかったニーズが施設によって満たされたという、要求と機能が一致した部分と言える。

- ・自分の家だったら何でも自分でしとったけど、ここでも何でもしてくれる。妻とちりとりを家から持ってきたが使わない。今はちりとりだけ残っている。家にいるときと比べると、地獄と楽楽？ 18
- ・掃除もしない。みなしてもらおう。ばあちゃん寄りだからしね。洗濯も皆、その日のうちにしてくれる。ここは本当にいいところ。21
- ・家に居たけれどもここが出来ましたから入れてもらったの。うちにおったら、風呂入るがとおしこあるでしょ。それが面倒なの。看病人が一人だけでは聞かれたらそればかり心配して。お父さん一生懸命やってくれたけど。ここに入ったら毎日毎日感謝してる。心から喜んで嬉しいが。32

施設の提供するサービスがあることによって、自分でやろうと思えばできることであるが、施設にやってもらおうという例は多く見られる。

- ・掃除はしなくてもいい。20
- ・部屋の掃除はしてもらっただけ。おばさんに恥ずかしいから。ほりくりははらう。23

(表5-3) 施設より提供されるケア

ケアのレベルは次の6段階で考えることができる。

Self Care	趣味・サークル活動/コミュニケーション/援助・見守り相談など
Residential Care	掃除・洗濯・食事などのサービス
Personal Care	起居・移動・着替え・洗濯・入浴などの身務
Nursing Care	看護婦による看護・介護
Medical Care	医師による治療・施設・リハビリ
Terminal Care	死に時の世話

表章におけるケアはSelf Care ~ Personal Careがほとんどである。この章においては次の言葉はそれぞれ

プログラム Self Care
サービス Residential Care
ケア Personal Care
に該当するものとして使用している。他の章においてはその二つをまとめてプログラムと言うこともある。

・部屋の掃除は職員がしてくれる。娘たちが孫つれて遊びに来たときなどに、1回くらい掃除機をかけたが、

47

一方で、施設のサービスに頼らずに自分のことは自分でするといった自己管理も、比較的自立度の高い入居者のなかでは少なからず行われている。受動的になりがちな施設生活の中で、あえて施設側のサービスに依存しないことにより、(部分的にはあるが)主体性が確保されるという結果になっている。

・シーツ替えは自分でやる。自分でできるものは自分で洗濯する。洗濯機もあるが、毎日するから、洗濯機の流しで自分で手で洗っている。自分の部屋も掃除には来てくれるが、こまごましたところは掃除機借りてきて自分でやる。27

・自分の部屋は掃除のおばさんが来るが、子供がカーペット掃除機を持ってきてくれたので、リハビリでしている。2

・小さいもとか、ちよこちよこと洗濯しとる。外にずらっと干すんぞ。自分でできることは自分でしとる。厚いものはあっち行って機械にかけてとってくる。6

・靴下、手ぬぐい、ハンカチは自分で洗面所の方で洗う。外ではお湯が出るから。顔も外で洗う。18

・タオル掛けは、こっちに来て買った。自分で洗濯する。できる間は自分でする。掃除は一日一回してくれるけど、細かいところまでは自分で掃除機を買ってきてやる。流しのところなども、お掃除の人が来てもらわずに自分で拭いてしまう。25

・掃除はしない。退屈だから何かしなくちゃならん。洗濯物は洗濯機でやっている。他に誰も使わないので、UYさんと二人だけ使っている。37

・(洗濯は)身体動くもん。自分のことは自分でせよや。洗濯機を使って。46

・自分の洗濯もする。掃除好き。きれいにする。ここにきてもう一生懸命した。きちんとするのが好き。ちゃんちゃんと仕事する。みんなには負けぬ。44

c. プログラム

日常生活の中に定期的に組み込まれるプログラムは、生活自体をサポートするものではないが、ある意味で生活にリズムと変化を与えている。とくに、半ば強制的に参加せられ、全員一律に与えられるプログラムの場合、入居者自ら主体的に選択し、自分なりの意味付けや思い入れを与えるということは、ほとんどなされない。

定期的に行われる風船バレー・ボール遊びのような娯楽プログラム、不定期で行われる規模の大きい行事など、高齢者施設特有のプログラムであるが、単調な施設生活に刺激を与え

(表 5-4) 施設より提供されるプログラム

毎日:	食事・おやつ・検温・体操・(リハビリ・ゲーム)
週単位:	入浴
月単位:	課生会・外出(買い物など)
不定期:	サークル等(習字・お花・俳句・・) 行事等(誕生日・七夕・夏祭り・・) 懇談等(課生会・歌や踊り・幼稚園や小学生の訪問・・)

てくれるものとして楽しみにし、期待している人がいる。そして、施設の職員が多忙になってそれらのプログラムがなくなったことで残念に思ったり、別の施設で行われていたプログラムが行われないことに対して不当に思ったりといったコメントが見られる。

- ・行事は楽しみにしている。37
- ・カリキュールと時間割がにている。行事も多い。何となく楽しくてよい。5時の晩飯が難点。早すぎて、おなかが空かない。10時半から普通。食堂に居てあったのに、誰がブーの人がはがしていった。これで2-3回目かな? 25
- ・前は職員の人とボール遊びなどしていたが、人数が増えて職員の人が忙しがついていて、やらなくなってしまった。27
- ・風船パレーやサッカーなど、この頃しなくなって寂しい。21
- ・ここに来る前は、越野荘に3年いた。仲良しがいる。向こうではいろんなものを買ったが、ここでは何もくれない。写真1枚、花1本くれん。食べ物もやりとりしたけど、ここではしない。6

一方で、そういったプログラムには大きな期待をしていない、あるいは全く期待していないというコメントも見られる。

- ・食堂はよそ行きという感じ。アトラクションは特別のことという感じ。ダイの人の交流は昔にない。27
- ・行事には出たことない。休稼にも行かない。記念写真も撮ったことない。19
- ・ここは退屈。ダイの人が来るのが楽しみ。囲碁や将棋。47

d 役割

自分の身の回りのことの管理は在宅で生活していれば当然していることであるが、昔のために洗濯したり洗濯物を畳んだりといったことが役割として与えられるというのは、施設での生活に特有のことである。与えられた仕事を単にこなすだけというレベルから、自ら積極的に仕事を見つけ施設生活における役割を見出していくレベルまである。施設に入居することでこれまで生活していた世界から離脱し、それまで持っていた社会的役割の喪失に直面した入居者にとって、施設の中で新たな役割を得、それが他の人に認知されるということは、施設という新しい環境の中で自分の社会的な位置づけを再構築する手段として重要な意味を持っている。

- ・洗濯物畳みはする。体の動く人はやらなといかんし。46
- ・洗濯物やおしほりやら、こっちでは50人分をみんなやっています。ここでは洗濯物が少ないので、体は楽。

太ってしまった。9

- ・食堂のところで、おむつやおしり袋んだり。自分の
 できることで、食堂の台拭きをしている。誰も来ない
 うちにとまってざーっと拭いてしまう。18
- ・1日3回おしりや洗濯機。こうして歩かんらんが、
 自分の運動だと思って。21
- ・毎日毎日食事前にお茶配り、片付け、洗濯、たたみも
 のと、ずいぶん疲れましたが、慣れてきました。部屋
 にはほとんど降りません。こうして洗濯機が終わるの
 を待っているときが、一番のんびり出来る。49

施設から与えられた仕事をこなすという以外に、個人的
 に親しい人の世話をしあけるということも見られる。

- ・2時とか3時に洗濯室で時間。みんなでお喋りしたり。
 前は人が少なかったから、その遊びでればよかつた
 けど(今は食堂で)。同じ村じゃない人のところへは
 あまり行かない。MSさんが半身不随なので、トイレ
 やご飯の世話したり、部屋まで運んでいく。21
- ・UFさんがフリエールで仲が良かったので、少し重例を
 見たりしている。90歳だが、すごく若い。25

中には自分から働きかけて、自治会を組織して施設の中
 で公式に認めさせるという手続きを経て、自治会長という「名」
 のもとに自分の役割を位置づける例も見られた。

- ・自治会長として、いろいろ対立することもあるんです。
 (老人ホームは)20世紀で終わる事業ではないですか
 らね。人間の生ある限り続く事業ですから。はじめに
 入った者としては、後から入ってくる人が入りやすい
 ようにしていく義務があると思います。施設長に向
 かって直接言うんです。AKさん、勘弁してよって
 言うくらい。47

(表5-5) 社会的環境：共同生活の場であること

共同生活の場であること	
ギャップ	気遣い 自制
親密	義密 媒介の関係
離脱	不参加 トラブル 孤立

2) 社会的環境：共同生活の場であること

e. 共同生活へのギャップ

ほとんどの人はこれまでに自宅で家族のみで生活してきており、とくに同じ空間内での共同生活という大きな環境の変化に対して、心理的にギャップを感じざるを得ない。気を使わねばならないこと、気になることが、浮かび上がってくる。

- ・昔で住んでますので、暮すのもイヤだし移されるのもいやなので、マスクをしております。とくに風邪引いているわけではない。丸髯の共同生活ですから、空気も悪かでしょう。今は健康第一。今から予防しとこにや。今からでも遅くない。20
- ・人に迷惑かけんように、それだけ気を使っている。個室になっているので、他の人の所を踏んで良いやら悪いやら。他の部屋に行ったりしない。お互いのプライバシーあるから。46

f. 親密

もちろん、共同生活をきっかけとして個人的に親しくなって、いつも一緒に行動したりお互いの部屋を行き来するような親密な関係が形成されることは何例も見られる。ふだんから一緒に過ごすことが多いので、日常生活の中でお互いの存在が大きなものとなっている。

- ・ICさんといつも仲良くしている。あの人は耳も目も近いし頭もいい。ご飯のときも近くにいってもらわないと。おかずの位置とかも分からないから、ICさんに教えてもらう。18
- ・家が近くの人を集めている。HKさん、TFさん、ICさん。ICさんに手をつないでいてもらう。ペンチとかでちよっと話したりはする。23
- ・UYさんとは村は違いうけど、カリエールと一緒にだったので友達になった。UYさんが来ると、ソファに並んで腰掛ける。ちゃんちゃんこを編んだりする。37

お互いの部屋を行き来するような関係は、かなり個人的に親しい場合であり、そこまで親しくない人には部屋に上がり込むことはしない。部屋が個室になっていることでそこが「その人の領域」であることが認識され、心理的な関が高くなっている。

- ・ほうすの中では友達はおらん。まだ大分出来ない。2-3人はおるが。TV見ながら喋っておる。他の人の部屋には遊びに行かない。6
- ・他の人と言葉は交わすけど、部屋まではいる人はいない。人の噂とか嫌い。TNさんもたまに来るだけで、私



(図5-3) お互い行き来している人の居室位置関係

もたまにいくだけ。25

- ・いつもだいたい4人組。全員が一つの部屋に集まることはあまりない。みんな自分自分のTV見てるから。じゃまになるかなと思ったり。18
- ・とくに他の人の部屋に遊びに行くようなことをしなくても、自分の思いついたときに共同空間に集まることで、誰かとコミュニケーションをとることができる。
- ・昼間は真ん中で新聞見たり、TV見たり。新聞は3紙束らし、TVもあるし、部屋にいないでも良い。結構楽しく過ごしている。他の人のところには遊びに行かない。人と話すときにはその卓椅子のところにけば、誰かいる。27
- ・外のテーブルにはちよいちよいと行く。話をしに行く。居場所、食堂とこくらしい。11

洗濯物を畳むなどの仕事は特定のグループで行われており、同じ人と同じ時間に毎日顔を合わせるにより仲良くなっていく、一つのきっかけになっている。

- ・はうすの人は、だいたい覚えた。音役おしゃべりするのはこちら(東)の人。ここの人たちは特別仲良くはないが、皆で洗濯物を畳みながらお喋りしたりして、友達になってくる。おやつの時もすぐの椅子でみんなと話す。27
- ・この入居者は、東の人はほぼ全員覚えていて、他の人のところへは滅多に行かない。洗濯物畳みの時やおやつの際に皆と喋りたりする。18
- ・2時とか3時に洗濯畳む時間。みんなでお喋りしたり。前は人が少なかったから、その畳みですればよかったけど(今は食堂で)。21

iv. 解説

共用空間での集まりも、そこにいる人たちと自分との価値観やコミュニケーションのスタイルが全く異なる場合には、積極的に加わろうとは思わない。

- ・いたるところにTVがある。俳句のヒントになるので、ニュースが見たいが、みんな見ないから、外では見ない。2
- ・部屋にいとると、皆死んだ感じ。四次元の世界にいたようだ。ホールでは赤ちゃんたちが怒鳴っている。テレビもうるさい。47

当然のことながら、50人の共同生活ではさまざまな価値観・生活歴・スタイルを持った人、心身状況も全く異なる人が混在している。皆が親しくなって均一な交流の輪ができるわけではなく、親しい人・親しくない人の垣根線ができてくる。あえて親しくしない、親しくならうとは思わないといったコメントが多く見られる。

- ・同じ村じゃない人のところへはあまり行かない。21
- ・西の人とはご飯のときだけ。あまり言葉も交わしませ

ん。23

-住んでいる人は、このあたりの人は分かるが、向こうの人はわからんね。具合の悪い人もおるし。部屋行き来はしない。それが好きな人もいるが。お友達になるのは難しい。一人でばさーとしていたものから、お茶のみが好きな人から。私はあまり親しくするのは好きでない。46

-新しく入ってきた人はいるけど、付き合ってる人もんだから。UFさんはカリエール。ご飯も一箱だからね。話すね。ずつとあっちの方にいる。37

-まともに喋るのはAKさんだけだもん。頭しっかりしてても喋れなかったり、耳が聞けなかったり。大声出していると3分でこっちがびてしまう。女とはあまり喋らん。AKさんは3回くらい部屋に来た。あっちの部屋へ行ったことはない。いろんな場所タバコ吸ってるので、よく会う。会うと20分くらい話す。19

実際に人間関係のトラブルが起こることもある。また背景の違う人間同士では、表面上は付き合ってもどうしても仲良くないと感じていることもある。とくに個人差の大きい高齢者の共同生活における人間関係形成の難しさが浮き上がってくる。とともに、個室であることよってあえて人間関係のトラブルに身をさらすことなく、お互い距離を取りながら過ごすことが可能となっていると思われる。

- (NIさん)喋ってるけども、親しい感じがしないもん。(SNさん) 俳句の会に、最初は興味なかったけど引っこ張られて(参加している)。嫌気がさしたりしますが、誘われるから、嫌々やります。25

- (自分の本を)読みさっしやいて部屋に持って行きましたが、二宮勲次郎じゃない、そんなに本読んで勉強しないって言われました。はい、ありがとうって言ってくればいいのに。もの言い方ひとつで人を傷つけないように私は気を付けております。20

- 本棚(カラーボックス)は整理さんが何か何か動かさかと思ってくれちゃったですが。他の人から何であんなだけって言われて…。女というのはいつまでたってもあさましいもんです。20

- ものをとったという疑いをかけられて喧嘩をした。この辺の人はまだ苦労が足りない。44

- あんまり仲良くしたらんもん。いろいろあったりして、ひどいわー。3

- 一つの振顔を分け合って食べるような人も一人くらいいる。部屋に行って話したりもするが、でも深入りはない。あまり関わりたくない。怖い。大股とは全然考え方が違いますよ、冗談をいつまでも根に持っている人もいます。難しいですねえ。あんまり他の人のところへ遊びに行くのは好きじゃない。49

- 入居者の顔は皆覚えた。誰かの部屋に上がり込むようなことはほとんどしない。男の人間同士で親しくなることはない。女の人のように、あんまりべちゃべちゃ喋らない。指、ベッドにいる人が多い。47

- 性に仲直しはしません。仲直くしないようにしています。他の部屋に行ったり来たりすることはありません。

家の者がたまに来ます。慣れないうちはよく来てくれましたが、慣れてからはあまり来なくなりました。43
 ・寂しいことは少しもない。本来一人やもん。特に仲良しはおらん。喋らん方が一番利口だ。(金魚飼っているのは) 乱くらいじゃないの。他の人にはいろいろ(家族とか友達とか) 来て、にぎやかしい。私は一人やから金魚でも見とらんと、気が狂いそうになる。(他の人とお喋りしたりとか) せんせん。他の部屋見たことないもん。46

(表 5-6) 物理的環境：個室型居住空間であること

個室型居住空間であること

プライバシー	コントロール
自己決定	配置・服装・時間・活動
他者との調整	気象 感情の解放
連続性	生活歴

3) 物理的環境：個室型居住空間であること

h. 物理的制約

個室が確保されているとはいえ、自宅に比較すればかなり限られたスペースであることは、すべての物の持ち込みに影響を与え、環境形成を基本的に制約する側面である。昔から使っていた家具や仏壇などの思い入れが深い物でも、物理的な制約によって持って来たくも持ってこれない。とくに自宅から入居してきた場合、この物理的制約による環境のギャップに先ず最初直面することになる。また、部屋替えによって居室の面積が減少した場合、家具を処分しなければならなくなった例もあり、入居者にとって生活スタイルの変更を余儀なくされることもある大きな環境移行として感じられる。

- ・お母は(食堂の) 仏壇の所でお祈りします。家にある仏壇はもっと大きいです。家も大きいです。43
- ・お父方は自分で指図した。仏壇持ってきたかったが、持ってこれないので、心で黙ってお祈りしている。21
- ・あと下駄箱もあったが、大きいのでやめた。49
- ・(部屋が狭くなって) ちょっと窮屈になってしまいました。ソファは娘が持って来たのですが、部屋が狭くなったので、持っていかれました。37

i. プライバシー

個室であることによって居室空間が自分だけの生活空間であることが認識されると、自分のプライベートな空間に対して他者の視線の侵入を遮断・コントロールしようという意識が燃えてくる。共用空間からの居室の入り口には扉にガラスの窓が入っており、ここからの視線をコントロールする手段がいろいろとられている。ただし視線を完全に遮断してしまうことは、施設職員によって見守られているという安心感とのジレンマ、もしくは、のぞき窓は職員が中をチェックするためのもので入居者が勝手に覗いてはいけないという暗黙の規制によって、自制されることがある。

- ・扉のガラスは気になる。男の人とかが入るとやだなー。
18
- ・窓の目張りには覗かれるから自分でした。魚谷さんもそう。
37
- ・窓の目隠しは、上の方は夜ベッドの方に明かりが射すのでまぶしいため。下の方は外から見られるのがいやだから。痴楽の人でどこでも覗き込み人がある。25
- ・扉の目隠しは外からのぞかれそうで、前に男の人がいるから。44
- ・窓のティッシュは、置くところないからね。目隠しにもなるが。46
- ・〔窓の目隠し〕本当は貼ってはいけないんですけどねー。夜に隣の人が部屋を覗くので嫌なので。施設の人が回ってきて見えるようには貼ってあります。2
- ・今年の3月か4月ころ、どっかの婦人会が3日か4日来て(部屋の中を)覗いて行ってたまらなかったので、窓に(目隠しを)貼った。貼ったら廊下の電気がまぶしくなくなるのが分かった。今までも廊下の電気がまぶしかったが、気にしないようにしていた。19

物理的な他者の侵入、とくに〔主に自分が部屋にいないときに〕痴楽症の人が入ってこれないように、紐を結ぶなどの自衛行動がとられている。実際に侵入してこられてプライバシーを侵害されている例もあるが、そういう話を伝え聞くことによって不安感を覚え、他者から身を守るという意味でのプライバシー意識が高まっていく様子も見られる。

- ・〔ドアのところの紐は〕出入りばいがあるがです。お金からお菓子から杖から着るもんから、何でもとるがです。おらんとこばっかり。紐結んでから、はどところを見られる思うんですかねえ、楽になりました。最近ばああだったんですかねえ、楽になりました。9
- ・扉の間は戸は開けっ放し。みんな年寄りだから、見えてもかまわん。痴楽症の人が入ってくる。2
- ・〔入り口のところに紐は〕痴楽の人で何でも開けてイタズラするので、ひもを付けてしぼる。開かないように。20
- ・入り口の紐は用心のため。YAさんしてるから。57
- ・〔外の扉の紐〕外に買い物に行くときとか、しばっとく。誰も入ってくるわけではないが、入ってきた言う話聞いてから。46
- ・夜は扉を閉めて、(開かないように)袋をかませておく。痴楽の人が入ってこないように。49

次のコメントのように、人に対する心理的防衛だけでなく、音や臭いといったことに対して居室環境をコントロールしようということも見られる。

- ・戸は開めておくことが多い。見える見えないはどうでもいいが、においが逆流してくるから。47
- ・入口も開けたらいいんだが、戸を開けるとつばとTVでうるそうて。19

1. 自己決定

4人部屋の特費では、家具のレイアウトは一律に決まっており、自分の意志による変更ということは物理的に不可能である。個室であり、面積的にもやや余裕のあることにより、居室の家具の配置を（ある程度であるが）自分で都合のいいように決定することが可能になった。また、自宅から何を持ち込んでくるか、という選択権をも与えられるようになった。自分のスタイルに合わせた居室環境を構築することであり、これによって居室の行動主体が自分であるとともに、居室環境のコントロール主体が自分であることを認識することになる。

- ・ベッドの場所は自分で決めた。床頭台は自分で斜めにした。使いやすいもん。3
- ・配置は自分で都合のいいようにした。TVは持ち込み。藤の軍椅子は息子に持ってきてもらった。持ってきていいと言われたので。座椅子は来客用。自分はその時ベッドに座る。23
- ・北べ方は自分で指図した。仏壇持ってきたかったが、持ってこられないので、心で謝ってお祈りしている。21
- ・（ベッドのところにテーブル）これはベッドにちょうどあうように友達に作らせた。普通のテーブルは、もの読んだり書いたりするには低すぎる。母見の木工所の息子に作ってもらった。材料費だけだから、3000円していない。これじゃあ儲けが出ないと言っていたが、なに言ってやがんだ、それならデザイン料よこせて言っちゃった。ベッドの上で胡座をくんで本を読んだり。47

日常の服装は一つの自己表現の形態であり、何を着るかについての自己決定権が失われることは自己表現の手段が失われることもある。個室であることによって人に気兼ねなく服装を決定することができる。また、個室は自分だけのリラックスした空間であるのに対し、共用空間に出ていくことは人前に出ることであり、外出用の着物を着ていくことで、自分の中の生活のメリハリをつけていくことにもなる。

- ・板井病院はユニフォームのような着物を着なければならぬ。ここでは着物を着ている。23
- ・家にいるときにはよそ行きにしていた服を、ここでは普段着にしている。18

他者に気兼ねすることなく、自分の好きな時間に自由にTVを見たり好きなことができる。とくに夜や朝方など、皆が寝ていて一人で過ごすしかない時間を自分でコントロールできるかどうかは、かなり深刻な問題である。また、プログラムに参加せずに一人の時間をコントロールできることも個室でなければ

ば難しい。

- ・自分一人の部屋だから、遠慮することもなし、自由に出来る。自分の部屋では、TVは朝のテレビ小説と夜寝るまでしばらく1時間くらい。寂しいから。27
- ・宇奈月にしたときは、10時まででもTVを見ていた。眠くなったらそのまま寝られる。畑をかして体が疲れていれば眠れるけど(ここではなかなか寝付けない)。1度夜中に目が覚めるとなかなか眠られない。1人なら気楽にテレビみたいときはテレビみられる。ちよんまげ好きなの。市民病院に入っている人とか、かわいそうだ。21
- ・テレビはたまに、運動とか行かないでみている。時代劇が好き。相撲は若が好き。部屋には若のなかったもので、黄の花のポスターを貼っている。ご飯食べているときも、一人でテレビで応援している。44

個人的な趣味の活動など、他人から離れ、他人とは違う自分だけの世界を構築し没入できることは、一人一人に個別の空間が与えられていなければならないことである。サークルなどのように皆でする活動もあるが、個人的な活動を生活の一部に取り入れ、今活動している自分自身と向き合うことができるかどうかという点において、両者の意味合いはまったく異なる。

- ・趣味は俳句。部屋に自分の作品を掲示してもらって飾っている。夜は眠れなくても、俳句をしているので楽しい。寝もりいて 俳句と遊ぶ 月月かな。2
- ・TVは長時間見られない。特に好きな番組もない。2-3分でやめちゃう。部屋で風の標々づくりの方が好き。ここに来てから気兼ねせずにどこで作っても良くなった。作って保育所の子供にあげる。目が覚めると水で洗う。23
- ・普段は部屋で見える方が好き。私ひねくれているから。20

k. 他者との調整

個室では、一人になりたいときに一人になれる、他の人に気兼ねすることなく過ごすことができる、ということによって何より気楽でリラックスできる空間として評価されている。同室者がいないことで「寂しいかな一思」うことに対しては、「外にいけば誰かいるし」といった共用空間の質が非常に重要になってくる。

- ・一人部屋で楽でいい。18
- ・4人部屋より気が楽。ここではうるさい看護婦の出入りはないし、楽だ。個室はすぐ楽です。カリエールは4人部屋だった。最初は寂しいかな一思いましたけど。25
- ・大勢の部屋だと気遣いせんなんら。一人だと気楽。寂しい小間かれども、なーに寂しいことない。寝てばかりいる。食べて寝てばかり。外にいけば誰かいる

し。32

同居者が居る場合、家族が来てくれても自分のプライベートな空間では会うことができなかつたり、同居者に気を遣って思うことが言えないということは容易に想像される。家族や親しい人が来て身内だけになることのできる空間が確保されていることで、コミュニケーションが保護され、自由に思うことを話したり、感情を解放することが可能になっている。

- ・家の人が来ようと何しようと思いがけない。32
- ・(北向きの部屋なので)部屋がちょっとくらい、でも他の部屋は狭い。(UYさんと)二人でいたい(のでこの部屋の大きさがいい)。37
- ・友達の下立、栗本、浦山、..、昨日も4人ほど入れ替わり立ち替わり来てくれた。村の様子は村にいないけど手に取るように分かる。夜、無駄口たいて帰る。20
- ・娘が来て泊まっていく。1時頃ついて、遅朝7時頃でいく。西側に布団敷いて。お弁当は自分でもつて来る。お風呂には入れてくれる。電話は週2日ずつ。電話のかけ方はやっとなつてきた。18

I. 連続性

これまで一人暮らしが長かった人にとって、施設に入居してからまったく生活歴も生活パターンも性格も異なる人と同室で生活しなければならなくなることは、自分の生活スタイルや考え方などが守べて適合しなくなることであり、非常にストレスの高い状態となることが考えられる。個室であることによって、これまでの生活で確立されてきた自分の生活スタイルを(一部だけでも)維持できる。

- ・うちにいても今まで一人で来たから、ここで一人で居ても寂しくない。家にいるのもここにいるのも一緒。27
- ・ここは個人部屋でいがんってる。これまでずっと一人で来たから。46

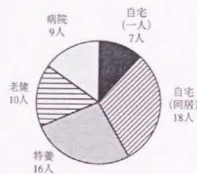


図5-4) 入居以前の居住形態

3. 個人的状況

1) 家族との関係

(表5-7) 家族との関係 (ヒアリング対象者のみ)

家族の訪問	人数
週に1回程度来て面談してくれる	5
月に1回程度は様子を見に来てくれる	10
たまにしか来ない	5
家族はいない	2

家族は入居者にとって最も近い関係にあり、もっとも思い入れのある人たちである。家族とどのような関わりを持つことができているか、ということは、施設自体の環境以上に生活にも大きな影響を及ぼしている。地域的なつながりの強いこの地域では、地元出身の入居者が多く、同居していた場合はもちろん、そうでない場合であっても家族が比較的近い距離に住んでいることが多い。

単に様子を見に来るだけでなく、頻りに、定期的に世話をしに来てくれることがある。必要な物の持ち込み、洋服の入れ替え、部屋の掃除といったレベルから、中には毎日決まった時間に来て身の回りの世話をすっかり行っていることもある。身体的・精神的ともに家族の支えが重要な意味を持ち、施設に入居し施設のサポートも受けながら、ケアの質としては在宅介護の要素が入ってくることになる。

- ・娘は毎日黒部に行くとき朝と晩にだいたい来る。娘が来るのは足音で分かる。娘は20のときに生まれた。19
- ・三男が近いので良く来る。ちゃかちゃかもんで世話焼くのが好き。金魚の水や花の水を換えたり。寝着着を4日に1度取り替えて来てくれる。23
- ・娘は1週間に1度来てくれる。娘は、黒部学園につとめている。夕食の時とか、勤めが休みの時には昼から来る。夜勤の時は無理。お菓子を持ってきてくれるので、UYさんと分けて食べる。37
- ・子供や孫が遊びに来る。孫はいっぱいいい。くるときは1週間に2回でもくる。孫がお探さんをもって連れてきた。10月に結婚式もあるので出たいが、出られるかどうか。11
- ・家は黒部の石田、駅の手前で、便利なんよ。今はお父さんとお母さんと2人だけ。毎週毎週1週間に1回来てくれます。32
- ・おったでの息子がたびたびいろんなものを持ってきてくれる。似合ったものを持ってきてくれる。孫はあまり来ない。20

入居者本人も地元出身で、家族も比較的近距离に住んでいると、様子を見に来がてら遊びに来てくれることが多い。社会的なつながりを感じることができ、施設生活の上で心理的に重要な役割となる。とくに次世代につながる孫や曾孫などの家族が来てくれたり、手紙や写真を貰ったりすることは、楽し

みであり、大きな心の支えとなっている。

- ・子どもは女の子5人、男の子一人。1カ月来んという
ことはないねえ。そばにいる孫ならもつとよく来るけ
んどよう。夕べも暗くなってから娘と孫とやって来た。
無理して来んでもいいよ一言うんやけど。57
- ・父ちゃんがよく孫や曾孫を連れてくる。お庭にくるのが
が楽しみ。若動めているので、日曜ごとに来るわけに
も行かない。9
- ・毎月息子が来る。娘は大阪。夫と二人で毎月来てくれ
る。4・5日前にも来てくれた。孫も就職・結婚した。
この前来たときに、タクシー代と言って、10万くれた。
25
- ・兄弟やいとこなどもちよいちよいと来てくれる。声を
かけてくれるのが嬉しい。21
- ・名古屋・高山・音沢に娘がいる。音沢の娘は、ちよ
くよく来る。友達もちよくちよく来て、花を持ってき
てくれた。6
- ・手紙いっぱい来るんよ。体来れんから、手紙と写真
よく来る。ばあちゃん読みやすいように大きな字で。
32
- ・6人子ども。息子2人は都合で生活。村に一人と黒部に
一人。娘がいて、たまに来てくれる。27
- ・毎日楽しく過ごしている。息子が訪ねてきてくれる。病
気の特は息子が病院へ。43
- ・子供は5人（萩生、下立、長野、埼玉、岐阜）。自分か
ら来てくれとは言いにくい。車じゃなくちゃなかなか
来れないし。順のばなんでも持ってきてくれるけど。
21

かならずしも家族が皆近くに住んでいるとは限らない。
物理的に距離が離れていると、どうしてもそう頻繁には来られ
ない。

- ・娘は忙しくてあまり来ない。子どもを何十人も頼まれ
ているから。3
- ・子供は大阪なので、お盆だけであまり来ない。4
- ・娘は大阪。たまにしか来ない。蓮花を持ってきて、何
本分かまとめて窓に飾っている。窓も何もしないと寂
しいから。25
- ・家族は名古屋にいるが、あまり来ない。おぎゅうの方
のが一人いて、たまにまで来てくれる。たまに孫が来る。
13

はじめはいろいろと心配していた家族も、入居者が次第
に施設になれていき、生活が安定してくると、家族の方も安心
して以前ほど頻繁には様子を見に来なくなることもある。一見
施設にすっかり馴染んだように見えても、その背景の家族との
コミュニケーションが支えになっていると、それが次第に失わ
れていくように感じることで、施設への適応過程に影響を及ぼ
すことが考えられる。

- ・(家の人は) 入ったときはちよいちよい来てくれたど

- も、だんだん来なくなった。23
- 家の者がたまに来ます。慣れないうちはよく来てくれましたが、慣れてからはあまり来なくなりました。43
- このごち家のものも来んしね。37

大勢の入居者の中には、家族も身内もまったくいない人がいる。入居前は地域コミュニティの中で、あるいは仕事をしていた場合にはその仲間の中で、家族の存在をあまり意識せずに過ごすことができていた人たちが、施設に入居し、他の人が家族と過ごしているのを見ると、逆に自分に家族がいないことを意識させられる。自分と同じように家族がいない境遇にある人が少なく、他の人たちは実は家族によって心理的に支えられているのを見ることで（あるいはそう思いこんでしまうことで）、自分の孤独感を深めていってしまうようにも思われる。

- 孤独やから、兄弟も親もいないし、一人。私にも誰か来てくれたらどれだけ嬉しろうと思うが・・・46
- 家族は来ない。訪ねてくる人はいない。友達が来る。44

2) 自宅に対する意識

施設に入居する際に、すべての人がこれまでの生活の歴史をすべて切り捨てて、何もない状態で入居してくるわけではない。家族と同居していた人だけでなく、一人暮らしを続けていた人の中でさえ、むしろ多くの人が今まで住んでいた自宅をそのままの状態に残している。そのような自宅の有無は、最後には帰ることのできる場所があると思っているかどうか、施設を終の棲家として認識しているかどうか、といった意味で、施設への適応過程に影響を及ぼしている。

家族と同居していて施設に入居してきた場合、同居家族は今でも住んでおり、家が現在も家として機能していることに。自分がいなくても家が維持され、いつでも帰ったときに管で出迎えてくれて昔と同じ家族との交流が再現されるという安心感がある一方、施設は本当の家ではなく仮住まいであり、いつかは家に帰ることができるという意識が働くことがあり、その場合、施設を住処として根付いていくための環境形成があまり進まないことになる。

- 家は家本、横の向こう側。そこに家族がみんなおる。子供やら孫やらいっぱい。家は喜まなので、借り入れのころには家に帰らうかな。その時になってみなきゃ分からない。家もいいよー、隣の家も隣の家もあるし。ここでは独ってるのは隣の人がだけもんねー。57

(表5-8) 自宅の現状 (ヒアリング対象者のみ)

自宅の現状	人数
家族が住んでいる	10
誰もいないが残っている	9
完全に退去	4

- ・家では自分の部屋もそのままにしている。帰るときは、みな応接間で、息子やお嬢さんたちがみんな待っている。帰っているから誰ださなきや悪いと思っていく。皆強に6000円のおもちやを持っていった。セルロイド製だから、なめても平気。衛生的。30
- ・85まで、毎日田舎に出ている。里道からは一人で来たので、知り合いがいない。ここにいるのがずかしい。里道の家に帰りたい。11
- ・ここへは身の回りのものだけ持ってきた。家にはまだいっぱいあります。一見の家じゃけ。壁紙は広いもので、私いたときは草はやさんだも、ほっとくと草だらけになってしまう。息子が迎えに来てくれれば家に帰れる。お正月に2-3日行って来た。23
- ・里道の音曲に家がある。お母さん（私のお嬢さん）の家。減多ありませんが、年に2-3回は自宅に帰ります。益と正月とお祭りの時くらい。子どもがいて孫がいてヒコまでいます。孫の子ども。43
- ・家は里道の石田。駅の前で、便利なんよ。私の孫3人おるがや、今みんな大きくなってね。男の子2人は東京、女の子一人は富山。曾孫は2人。今はお父さんとお母さんと2人だけ。32

一人暮らしの人で、入居後も自宅をそのままにしている人は多く見られる。多くの場合、いつか家に帰ろうと思っただけではないが、家には、建てたときの思い出や、さまざまな苦労しながら子どもたちを独立させていった多くの思い出が刻まれており、なかなか処分はできないものである。子どもたちがいつ来てもいいように、あるいはその後子どもたちの誰かに入って欲しいという思いも込めて、電気や水道なども止めずにいつでも住める状態で残してあることも多い。本人もしくは子どもなどによって、少なくとも定期的なメンテナンスは行われている。昔から使ってきた家具なども、施設には持ち込めないがちゃんと「残してある」ことで安心したり、場合によってはその後施設に持ち込まれていくこともある。

- ・益と正月には子どもが家に来てくれる。電気も水道も付いたままにしてある。いい水ばかり運んで家作ったが誰も入ってくれない。息子が来るのは益と正月くらい。来たときには家のメンテナンスも、娘は時々見に来てくれる。27
- ・家は音沢だぞ。生まれは北海道。益と正月くらいに帰る。1週間程度、音曲まで待っていてくれる。家は、電気も何も切らんとそのままにしてるぞ。音沢の娘が服を入れたりしてくれるぞ。6
- ・その前は一人暮らし。朝5時頃から農業で外へ出ている。若いときは婦人会。年とってからは割と一人。昔の家へは、お盆だけ行って、開け放す。4
- ・5年近く宇奈月に一人でおったが、火の用心で危ないって。娘たちが心配して、年寄りだから、お願いで入れてもらうた。家には何でもある。タンスもあるし、仏壇もあるし。下に2階、2階に2間。ここ来て2年あ

まりたつが、まだ2度いっただけ。孫やら子供やら来て遊ぶかと思うて、貸さずにあるんです。21

- 風呂で一人暮らし。そのときの知り合いはここにはいない。畑で分家のおばあちゃんと花を作ってた。カリエールの看護婦さんが送ってくれたり、加人が来て連れていってくれた。娘が月1回行って、メンテナンスしている。25

- 自分の家はそのまま残してある。親が苦労して建てた家もそのままにしてある。たまに行って風を入れてやりたいが、子供が迎えに来てくれないと外に出られない。車でも呼んで一人でも行けるが。47

- お家は広かったよ。田圃も広いし。子供が残ってる。ここは狭いわ。着物なんか全部置いてきた。家はあけびだから。換えてすつと上がってったところにあるのよ。大きいうちなのよ。家には誰も居りません。3

- 17~8年前に夫を亡くして、一人暮らし。愛本の家は5.27~8年に建てた。家を建てたおかげで力がついて、働けるようになった。ほっとしたら、また病気に。病院に3年間いて、それから移ってきた。家にはたまに戻る。13

町営住宅やマンションなどからの入居の場合、あるいは自宅であってもすっかり処分して入居してきた場合、他に帰る場所がなく、施設を終の家としてここに定着せざるを得ない状況に置かれることになる。荷物を持ち込んで居室の環境を形成し、定着しようという意識が高い反面、施設以外に心の拠り所となる場所があるときのような心のゆとりを感じることができないようにも思われる。

- ずっと独り暮らしで、家を処分して入ったから、帰るところはない。昔兄弟の家にやったり、捨ててきたりした。家にいたときは、夏は5時からいらいら出ていた。雪下ろししたり掃除したり、何でも自分でしてた。18

- 引っ越しの時の荷造りは近所の人がしてくれた。洗濯機やらタンスやら、欲しいという人に着けてしまった。こけしの人形も前は飾り棚にいっぱいあってたが、これだけとって後は全部捨てた。前はずらっといっぱいあったんよ。46

たとえ家には家族が残っており、いつでも帰ることができるところがあると思っても、実際に帰ってみると、自分の居場所がなかったり、することがなかったり、施設に比べて機能的に不便な点が目立つたりと、失望を感じて施設に戻ってくることもあるようである。これもまたある意味で自宅の喪失であり、施設以外に住処はなく、定着して生活していこうという意識と、心の拠り所としての（いつか帰れる場所としての）家

を失ったという気持ちが続いているように思われる。

- ・正月は家に3晩泊まりました。家の方が寒い。ここは全部暖房入ってきます。家は大きいです。私のいるところに暖房入れてももうても半分はどしきかかんが。帰っても誰とも話でんし。トイレも使われません。ここにいた方が気楽です。食事も食べやすいでしょう。行きたくもないです。不便で。23
- ・すっかり慣れて正月も家に帰らない。帰っても悪いし。お盆には自宅に行って来たがですが、その後はいっとなれません。お盆前に息子をなくして、その時には随分行ったがですが、部屋にばかりいて、何でも悪い出したりして頭痛くなるんだども。このごろ家のものも来んしわ。37
- ・家は宇奈月の役場から1kmくらいのところ。ここから3km半だから、ここ20周回った家に行って帰ってこれると思って回った。今年は行かない、盆も。正月も帰らん。家行っちゃって寝とるだけだもん。車持たんでいっちゃって。寝とるだけだ。去年一晩だけ行ってきたが、寝とるだけ、山見とるだけだもん。19

とくに一人暮らしに不安を覚えたために入居してきた人の場合、施設入居の他に選択肢としては「子供と同居」という形があり得る。このとき、入居者は自分の家から子供の家へという移行をたどることになる。たとえ家族であっても（と言うよりむしろ家族であるがこそ）いまままで自分でコントロールしてきた空間から他人のコントロールする空間へ移動することによって、どうしても気兼ねが出てきてしまう。

- ・家にいるよりもここであずかってもらった方がいい。いいところであずかってもらって、ありがとうありがとう。ここはいいところ。お食事もおいしいし。ありがとうありがとう。6
- ・家にいると気兼ねする。だんだん足が悪くなってきたので、ここ「病院」に入っている。今はここが自分の家。9
- ・最初入ったときは心配で心配で。でも慣れたところに行くと気兼ねせにゃならん。ここにいれば皆よくしてくるし。18

3) 施設に対する認識

入居時に、特別養護老人ホームという施設に入居することについての意味をどの程度認識しているか、と言うことは、とくに入居当初の入居者の生活に影響を与えていたようである。

特別養護老人ホームに生活の拠点を移すことを明確に認識し、施設の中に自分で働きかけて居場所を形成しながら適応していく。施設入居も自分で決定し、自分で環境の変化の意味

を把握していることは、その後の適応についても自ら主体となっていくことができることと関連がある。

・家は福山。土建業をやっていた。東京に60年つめていた。家内と別れて一人暮らし。ここに転がり込んだ。家は牛もある。生活の根拠はここ。日常の根拠は全部持ってきている。向こうは別荘。47

反対に、特別養護老人ホームは一時的な場所であって、定住の場ではないと認識していると、最終的に自宅に戻ることを前提としているため、自ら働きかけるような形での環境適応は進まないことになる。

・ここもいいかなーと思って来たけど、どこにいても一緒よ。どちらにいても、苦しいこともあれば楽しいこともある。ここには死ぬまでおれるわけじゃないでしょう。家にかえらなきゃならん。部屋もそのまま残してある。いつまでもおられんでしょう。やどかりです。そうでしょう？ 57

・ここに来る前は、3年くらい向こうに行っていた。こっちは平屋だが、向こうは3階建てくらい。この「旅館」に来て1年くらい。一人だけだと良いこともない。向こうにいたときは4人部屋。いろいろ気を遣うので、やっぱり2人くらいが良いねえ。向こうには4人友達がいる。3

特別養護老人ホームかびのような場所が分かっておらず、漠然と収容施設・能捨て山のようなイメージを抱いていると、自分がその入居者になってしまったことで、あきらめ・羞恥などの感情を持ちながら生活をしていくことになる。その後施設の生活になれていくことで、こういったイメージは払拭されることが多い。

・最初は何が何だか全然分からなかった。入ってきたときは、これが終着駅かいなー、きびしいような、これで自分も最後かいなー、と思いました。49

・ここにいろのがはずかしい。黒部の家に帰りたい。11

4. 入居以降の環境移行

在宅あるいは他施設から施設へと危機的環境移行を経験しつつも、それを乗り越え環境との関わり方が安定したもののへと変化していくが、それですっかり安定してしまうわけではなく、自分の身体状況の変化といった内発的環境移行や居室の部屋替えなどの外発的環境移行によりその安定しつつあった関係が再び乱されることになる。

1) 心身状況の変化

体調の変化は、ほとんどの場合悪化の方向に向かう。少しずつ次第次ぎに変化していく形で体験する場合もあるが、軽んじて体を痛めたり、病気の発作が起こったりといった、何かをきっかけとして急激に身体機能が悪化するような形で体験されることが多い。行為が制限され行動範囲が狭まり、それ以前とは全く異なる環境に直面せざるを得なくなると言う意味で、インパクトの強い危機的な状況である。環境適応能力（コンピテンス）が低下しつつある高齢入居者が、そのコンピテンス自体の低下という環境移行に直面したときに、どのようにそれを乗り越え、新しい人間-環境の関係を形成していくのか、これは大きな課題である。

- ・目が悪くなって、操作られん。眼鏡かけても新聞見えないがです。(4~5日前から) 歩くのがやっとになりました。あまり外にも出られませぬ。目が悪いもんですきかい。風邪もひいております。23
- ・ここに入って、はじめはどうしようかと思ったが、だんだん慣れてきた。目の方はだんだん見えなくなってきた。よくはならん。18
- ・入院してようやく寝てきました。1ヶ月くらい右腕病院に。痛風の発作が出て。ひどかったですよ。我事はずでそこ(広間)で。退院してからTNさんとこにまだ逃げに行っていない。そこまで歩いていく自信がない。25
- ・最近具合が悪くて。手芸もやっていない。孫が何か編んでいって毛糸を持ってきたけど、編む気がなくて。買い物にも最近いってない。37
- ・(食堂でのお手伝いは)このごろ腕が張るがでいかれんがです。朝、そこで寝むものはしとるがですが、食堂まではいっとらんがです。37
- ・このあいだ転んで腰痛めた。今では多行器で外回り半分はどしどし歩けなくなった。前は1回りいくらでも回れたが。頭も痛くなったし。37

(表5-9) 身体的自立度の変化
Katz スケールによる 94年11月時点
と96年6月時点の比較

		96.06 Katz							
		A	B	C	D	E	F	G	O
94.11 Katz	A	0	0	0	0	0	0	0	0
	B	5	0	0	0	1	0	0	0
	C	5	1	0	0	0	0	0	0
	D	0	1	0	0	1	0	1	0
	E	1	0	0	0	3	0	0	0
	F	0	0	0	0	1	3	3	0
	G	0	0	0	0	0	1	2	0
	O	0	0	1	0	0	0	0	0

(表5-10) 痴呆程度の変化
Berger スケールによる 94年11月時点
と96年6月時点の比較

		96.06 Berger					
		1	2	3	4	5	6
痴呆程度	クリアー	3	0	0	0	0	0
	やや好-でない	5	0	1	0	0	0
	軽度痴呆	3	3	2	4	0	0
	中度痴呆	0	0	0	0	0	0
	重度痴呆	1	0	2	2	3	1

2) 部屋替え

部屋が替わる(替えさせられる)ことは、入居者の生活に対してさまざまな側面において影響を及ぼす。

居室の周辺の人的環境が変化するために、それまでに確立されつつあった人間関係が失われたり、それに伴い自分の生活パターンを変化せざるを得ないことがある。

- ・引っ越してから前よりも部屋にいたことが多くなりました。車椅子の人が多くなっちゃって。(外に出るの)は)ご飯のときとお風呂はいるときくらいですらや。 23
- ・NIさん、前はよく来てくれたが、部屋が遠くなって前はどは来れなくなった。あの人はいい人。 21
- ・TNさんは息子を今年なくした。退院してからまだ遊びに行っていない。そこまで歩いていく自信がない。 25

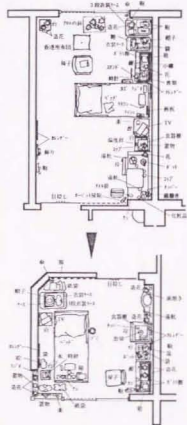
居室自体の環境の変化 とくに居室の面積が狭くなる、いろいろと持ち込んでいた家具が入らなくなり処分せざるを得ないか、少なくともレイアウトは全く変更しなければならなくなる。これは居室の中に築かれていた、人と物理的環境との関係が全く変化することを意味する。

- ・引っ越しは家族に来てもらって、ベッドは始め真ん中になりましたが、こうした方がいいかなーと思って。荷物は全部はいりました。ずいぶん狭くなりました。 25
- ・引っ越しの時はずいぶん来てくれた。ずいぶん窮屈になりましたが、だいぶん慣れてきました。ソファは娘が持って来たのですが、部屋が狭くなったので、持っていきました。ここ来てから朝日さすところはいいです。前は陽さませんでした。 37
- ・はじめんとこはじゅうたんで。(今は床) 家族とか来たとき、床だと擦れなくて困りました。前の部屋の方が大きかったんではないでしょうか。前は10畳で今は8畳。2畳ばかり小さくなりました。 43

部屋替えさせること自体については入居者の側には決定権がほとんどないが、せめて部屋の場所の選択に対して自分の意志がある程度でも聞き入れられると、生活の主体性が確保され、新しい環境に対しても自ら意味を見出すことが容易になる。

- ・今年2月に部屋が変わった。花いじりするのが好きだから。すぐ出られるとこちうだいて。 27

しかし、自らの意志とはまったく関係なく、部屋替えさせられたという意識だけが残ると、自分が自分の生活の主体であるという感覚が失われ、受動的に自体を受け入れるだけの存



(図5-5) 部屋替えによる居室環境の変化の例
上: 96年2月、下: 96年6月

在となり、新しい環境に対して自分なりの意味付けをすることが難しくなる。環境の質と自分の主体性を相互に高めあうという関わり方よりも、変わってしまった環境の質に対し「あきらめ」によって自分の主体性を下げ合わせていこうという消極的な関わり方が主流となりがちである。居室の物理的な環境の変化自体よりも、それを受け入れざるを得ない施設の制度的環境の方が、より問題が深いのかもしれない。

・前はあっちにいたんぞ。今度はこっちだぞ。ここに来てから部屋を4回替わったんだぞ。ほんとだぞ。替もかわったんぞ。はいはいって言われるとおりにしとらんと。6

・始め入ったときは、もう（部屋を）替わらんも人かと思っった。23

・引っ越しの時はだいぶ様でしたが、大きな部屋は車椅子の人ばかりでしょう。小さい部屋じゃ入らないからですかね。ずいぶん狭くなりましたが、ここに慣れなくちゃしょうがないもんね。25

・引っ越しの時は職員に手伝ってもらうて。何も言わんと。どこへ変わっても一理よ。別に行ったり来たりせんもん。自分一人で楽しよう思います。46

5. 全体的な評価

1) 人と環境との相互交渉の型

ある環境は、行動環境を一方的に規定するものとして働く。また、ある環境は入居者に選択肢を提供する。入居者によるコントロールをかなりサポートする環境もある。入居者による環境の評価からは、環境のさまざまな側面において人が環境に関わっている、その関わり方に違いがあることが分かる。人はそのさまざまな側面で環境といわば交渉しながら固有の行動環境を形成し、それが評価として現れてきている。

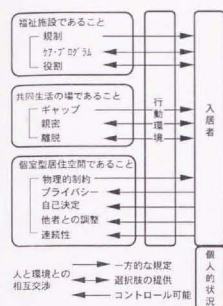
1. 一方的な規制

施設環境は、その制度的環境・社会的環境・物理的環境のすべての側面において、入居者の行動環境を規制している。入居者は、物理的な環境の制約によって、施設の規則によって、あるいは共同生活において感じざるを得ないギャップによって、一方的に制限を受ける対象となる。時には自制という形をとることもあるが、行動の自由度がせまられるという意味で同等の結果となる。この側面のみが際だっているとトータル・インスティテューション (Goffman 1961) と呼ばれる画一的環境になるが、実際にはさまざまな側面において相互交渉が行われ、入居者各人の主体性が確保されている。

2. 選択肢の提供と選択権

・ケア・プログラム

食事・入浴などの基本的な生活に関わる Residential Care・Personal Careは、居住施設としての本来的な機能であり、入居者に対し一方的に与えられるものである。趣味活動やコミュニケーション目的の Self Careは、入居者の間により広い選択権が認められている。ただし、それぞれの状況においての選択権は、プログラムに「参加する/しない」の二者択一であることが多く、積極的に受け入れる人とそうでない人とに二極分化される傾向がある。積極的に受け入れることで、生活の基本的な部分を支えてくれているという安心感につながることもある。また、これらのプログラムにあえて依存しないことによって、自分の主体性が確保されることもある。



(図5-5) 入居者と施設環境との相互交渉による行動環境の形成

・役割

施設における役割はたいへい、お手伝いの機会という形で施設側から選択肢を与えられる。これに参加することは、施設の中で一定の社会的役割を果たしていることになる。これまでに住み慣れた環境から施設への入居に伴い、これまで何らかの形で社会と関わり社会から期待されていた役割が失われるという「役割移行」を経験することになる (Allen & van de Vliert, 1984)。施設の役割を果たすことで、これまでの社会的役割に替わる、新たな社会的アイデンティティを再構築する手段となることもある。中には自ら働きかけて、施設の選択肢ではない新たな自分の役割を構築するような入居者もおり、制度的環境の中で自らコントロールを可能にしたことで、この役割が本人にとって重要な意味を持つものとなっている。

・親密と離脱

入居者同士の社会的関係については、入居者自身によるコントロールの難しさが現れている。とくに親密な関係は、能動的に選択する人とそうでない人に二極分化しており、その関係を「選択する／しない」という二者択一が要求されているようである。それを選択した人の場合、自分の施設生活にとってその親密関係が大きな部分を占めることになる。それ以外の場合、社会的関係においてあえて他者との距離をとることで自らコントロールできる人も中にはいるが、多くは自分でコントロールしきれないものと感じ、それが社会的環境のギャップにつながることも多い。

3 主体的コントロール

個室という物理的環境は、物理的な制約はあるとしても、プライバシーへの対処、自己決定権、他者との調整など、入居者による主体的なコントロールが確保される上で重要な役割を果たしている。個室以外の物理的環境では、制度的環境や社会的環境が入居者に対して直接規制を加え、あるいは選択を迫っているのに対し、物理的に囲われた個室という環境がクッションとなり、制度的環境や社会的環境の直接的な影響は軽減されている。他者から煩わされずに自分のペースを守ることのできる場所として、限られた人とのみとの交流を行う親密空間として、あるいは外の世界とは切り離れた自分だけのシェルターとして、またある場合には、そこに自分の主体的な世界を

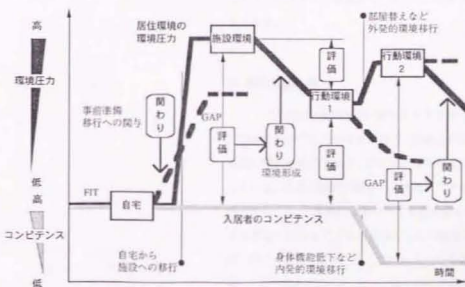
作り上げそれを映し出す空間として、それぞれのやり方で自分のコントロールの及ぶ空間として評価されている。それは空間内における行動や人間関係についてのコントロールだけでなく、その外側の世界との関係に対してのコントロールも同時に意味している。

2) 適応と評価の過程

入居者が施設へ入居してからの適応過程とそれに伴う評価の過程を、居住環境の環境圧力と入居者のコンピテンスの概念 (Lawton, 1973) を用いて、モデル的に表してみる。自宅に生活していた時を、環境圧力とコンピテンスがフィットしていたと仮定する。(実際には自宅においてもフィットしていない場合が多く、そのために入居してくる人も多い。)

施設への移行直後、これまでの住み慣れた環境とはまったく違う環境におかれることになり、入居者は施設環境を環境圧力の高い状態として経験する。その時に感じる心理的ギャップが入居時の評価となって現れる。入居以前から、事前に準備したり知識を得るなどして移行への関与がなされていると、このギャップを軽減することができる (Pastalan, 1983)。

その後、入居者は施設環境とさまざまな相互交渉しながら関わっていくことで、自らの行動環境を形成していく。この環境形成は、自分に環境をフィットさせようとして行われるため、環境圧力は次第に軽減され、ギャップの減少が評価に現れ



(図 5-7) 入居後の環境圧力モデル

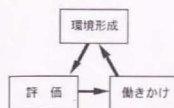


図5-8) 環境適応のためのサイクル

てくる。(それでも残ったギャップはギャップとして経験されるが。)たとえば、入居当初、施設が「これが終着駅かいなー、さびしいような、これで自分も最後かいなー、と思」うような場所であったり、「ここにいるのが恥ずかしい」というイメージで扱えられていたものが、時間が経って環境に慣れるにしたがい、「今ではもう慣れてそんなことと思いませんけど、まわりはいい人たちばかり。」「最初はちょっと寂しかった。でもまわりはいい人ばかり。」と行動環境(とくに社会的環境)が肯定的に評価されるようになっていく。Lawtonによると、入居者のコンピテンスに応じて環境に適応する環境圧力の範囲が定まっており、形成された行動環境の環境圧力がこの範囲内に位置するのであれば、入居者は適応的な行動をとることができる。

この適応過程において、評価→働きかけ→環境形成→評価……のサイクルが重要な役割を果たしている。入居者がどのように環境に対して評価し、主体的に関わっていくかということが、環境への適応にとって必要なプロセスなのである。

部屋替えなどの環境移行によって、これまで作り上げてきた行動環境が影響を受け、それが著しく変質させられるような場合には環境圧力は上昇する。また、身体機能が低下するなどによって入居者のコンピテンスが下がることもある。これらの外発的・内発的環境移行は多くの場合、ギャップを増加させる方向に働く。再び環境と関わっていくことで行動環境を再構築していく過程が行われるようになるが、コンピテンスが下がった場合には環境圧力の適応レベルも低下するため、環境圧力をそのレベルまで軽減していくことが以前よりも難しくなってしまう。

3) 評価の個人差

この図は、施設生活に関わるさまざまな側面が評価に結びついていることを示すと同時に、評価は移行前後の相対的な変化に関わるものであり、ひとによって基準が異なることを示している。ある入居者の場合、身体的にケアを受けなければ生活が成り立たず、家族によるケアに心底不安を覚えていたとき、その不安を解消してくれる存在としての施設は、「人のお世話ばかり」を受けながらも「ここに入ったら毎日毎日感謝してる。心から喜んで嬉しいが、」と最大級に評価されている。これは自宅の環境圧力が高かったために、施設に入居したことでそ

れが軽減されたことが評価に結びついていると言える。またある入居者は、施設生活と自宅とのギャップが大きすぎたためか、「どこも行くところ無いから、感謝せにゃばち当たる。」と言いながらも、施設の生活が「金魚でも飼うてないと気が変になる」ようなものであると評価されてしまうこともある。

最後に、評価に関して注意すべき点は、評価は環境に対するさまざまな側面を含むため、ある側面に対する評価をまったくそのまま受けとめることができないことが多いことである。「ここはいいところ。」「いい施設にあずかってもらって。」といったコメントはよく聞かれたことであるが、そこに自分で選択することやコントロールすることに対するあきらめが含まれることがある。環境との交渉によって関係を作っていくのではなく、規制された環境に対して自分の中である部分をあきらめ、環境に合わせることで、一見フィットした関係が保たれるようになる。とくに入居者が自らを、施設からサービスを提供される受動的な存在であるとみなしているような場合、このような状況にあると言える。ふと本音を覗かせてくれる次の句は、高齢者居住施設の計画に対して、根本的な面から考えていく必要があるのではないかと思わせる。

わびしさを忘れんとして心なき呆け老人と載れてをりさ